平成２９年度
「被災地域の教育力向上プロジェクト」
調査報告書

平成３０年３月

熊本県教育庁教育総務局社会教育課

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

１　プロジェクトの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

（１）プロジェクトの背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

　①　熊本地震の発生状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

　②　熊本地震の被害状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

　③　本県における「地域と学校の連携・協働」の推進状況・・・・・・・　３

（２）プロジェクトの趣旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

　①　プロジェクトの目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

　②　調査の計画立案及び委託市町村の選定・・・・・・・・・・・・・・・　４

　③　調査研究委員の選任・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

（３）プロジェクトの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

　①　委託事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

　②　調査研究委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

　③　事業視察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

（４）調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

　①　調査の手法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

　②　調査の対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

　③　調査の実施時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

　④　調査アンケートの回収状況及び聞き取り状況・・・・・・・・・・・・　６

２　地域学校協働活動の実施効果及び今後の活動充実に関する調査結果・・・・・・・・・　7

（１）調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７

　①　児童生徒への効果に関する調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・　７

　②　教職員への効果に関する調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

　③　地域ボランティア等への効果に関する調査結果・・・・・・・・・・・２１

　④　地域全体への効果に関する調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・２４

　⑤　推進員の存在がもたらした効果に関する調査結果・・・・・・・・・・２５

　⑥　今後の地域学校協働活動の充実に関する調査結果・・・・・・・・・・２９

（２）調査結果の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４

　①　成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４

　②　課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７

３　推進員の学校配置や学校を支援する組織の有無等の諸条件の違いによる地域学校協働活動への実施効果に関する調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７

（１）調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７

　①　対象校の推進員の配置の有無に関する調査結果・・・・・・・・・・・３７

　②　対象校の学校支援地域本部の設置の有無に関する調査結果・・・・・・３９

　③　対象校のコミュニティ・スクールの導入の有無に関する調査結果・・・４０

（２）調査結果の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３

　①　成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３

　②　課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４

４　今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４４

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４５

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４６

平成２９年度「被災地域の教育力向上プロジェクト」調査報告書作成に係る構成員名簿・・・　４６

参考資料

１　各対象別回収者の属性の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４７

２　平成２９年度「被災地域の教育力向上プロジェクト」に関するアンケート・・・・・・・　５２

は じ め に

県内各地に甚大な被害をもたらした「平成２８年熊本地震」から２年が経とうとしています。発災直後からこれまで、全国各地の皆様からたくさんの御支援を賜りましたことに対し感謝申し上げます。

熊本地震は多くの県民の生活を一変させました。震度７の揺れに２度も襲われ、４，４００回以上の余震が発生し、関連死を含め２５０名を超える尊い命が奪われました。多くの学校、公民館などが避難所となり、４月１６日の本震の直後は約１８万人が避難所に避難し、その他多くの県民が車中や自宅の軒先等での不便な生活を強いられました。改めて命の尊さについて深く考えさせられ、日常生活の有り難さを実感したところです。

一方、発災直後から、先の見えない不安な生活の中でも、すべての避難所で、子どもから高齢者まで身を寄せ合い、助け合いながら生活する姿がありました。多くの児童生徒が自ら今できることを考え、行動し、そのような子どもたちの活躍ぶりに誰もが頼もしさやたくましさを感じたところです。

また、避難所としての指定の有無にかかわらず、多くの学校が実際に避難所となりましたが、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動に取り組んでいる学校では、避難所の運営がより円滑だったという調査結果があります。これは、日頃の活動を通して、住民相互、あるいは地域と学校が顔の見える関係を築き、信頼関係にあったことによるものと思われます。

本県では、平成２８年１２月に「熊本復旧・復興４カ年戦略」を策定し、「創造的復興」に向けて一歩一歩進んでいるところですが、未だに３７，０００人余が仮設住宅等にお住まいです。また、昨年１１月時点で、心のケアが必要な児童生徒は、半年前の前回調査より３００人多い２，０００人余となり、しかも、その約６割が新たにケアが必要とされた児童生徒で、今後とも長期にわたり対応していく必要があります。

このような状況の中、本県では本年度、文部科学省から「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究」を受託し、「被災地域の教育力向上プロジェクト」に取り組みました。これは、地震による被害の大きかった６町村において、学校支援活動、放課後子供教室、地域未来塾などの地域学校協働活動が児童生徒、学校、地域にどのような成果をもたらしたかについて調査研究したものです。調査方法としては、児童生徒、保護者、学校、ボランティア、町村教育委員会等へのアンケート調査、地域学校協働活動推進員への聞き取り調査等を行いました。

その結果、ほとんどの児童生徒が地域学校協働活動の楽しさや有用性を感じている中、地震後に仮設住宅等に転居した児童生徒の方がより強く感じていること、地域学校協働活動に関わる住民が地震後により意欲的になっている傾向がみられることなど、興味深い事実が明らかになりました。また、地域の人材不足、地域学校協働活動の「仕組み」づくり、コミュニティ・スクールとの連動などの課題も明らかになりました。

今後、この調査結果を地域学校協働活動の有用性や課題等を示す資料として活用し、県内市町村において地域学校協働活動が益々進展するよう取り組んでまいります。他の自治体の皆様にも地域学校協働活動を推進される際の参考となれば幸いです。

最後に、本県の地震からの「創造的復興」を支援するため、委託という形でこの実証研究の機会を与えていただいた文部科学省生涯学習政策局、御協力をいただいた調査研究委員会の委員及び６町村の関係者の皆様の御厚意に対し心から感謝申し上げます。

平成３０年３月

熊本県教育庁教育総務局社会教育課
課長　坂本　富明

１　プロジェクトの概要

（１）プロジェクトの背景

①　熊本地震の発生状況

平成２８年４月１４日及び１６日に熊本県を震源とした大規模な地震が発生した。本地震は、極めて短期間に同一地域で、震度７を観測する地震が連続して発生するという観測史上初めての地震であり、震央となった益城町を中心に県内各地に甚大な被害をもたらした。

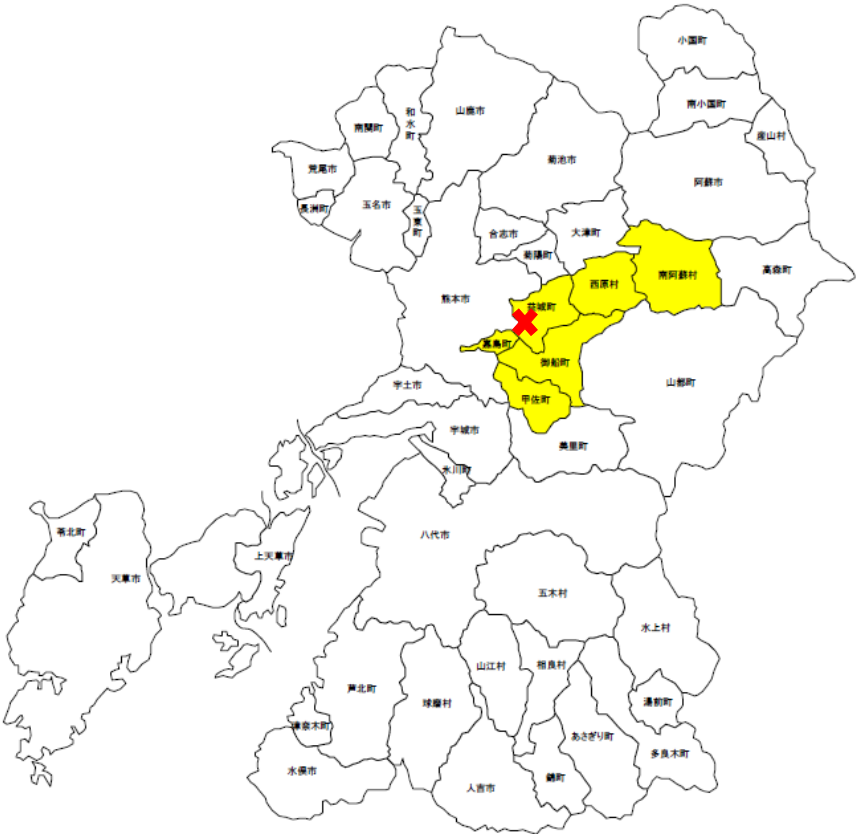
熊本地震の特徴として、余震回数の多さが挙げられる。発災から１５日間での余震回数は２，９５９回であり、阪神淡路大震災の１０倍以上となっている。

＜前　震＞

発生日時	平成２８年４月１４日（木） 午後９時２６分頃
マグニチュード	６．５
県内の震度　　震度７	益城町
震度６弱	玉名市　西原村　宇城市　熊本市

＜本　震＞

発生日時	平成２８年４月１６日（土） 午前１時２５分頃
マグニチュード	７．３
県内の震度　　震度７	西原村　益城町
震度６強	南阿蘇村　菊池市　宇土市　大津町 嘉島町　宇城市　合志市　熊本市
震度６弱	阿蘇市　八代市　玉名市　菊陽町 御船町　美里町　矢部町　氷川町 和水町　上天草市　天草市



② 熊本地震の被害状況

熊本県における人的被害は、平成３０年３月１２日現在、死者が２５６人（直接死５０人、震災関連死２０１人、二次災害死５人）、重軽傷者が２，７２４人に上る。

住家被害は、約１９万７千棟に上り、また、国道５７号や阿蘇大橋などの幹線道路の寸断や電気、水道、ガス、通信などのライフラインの停止など県民の生活を支えるインフラに甚大な被害が生じた（停電約４５万戸、断水約４３万戸、ガス供給停止約１０万戸、通信断約１万件）。

さらに、県民の誇りである熊本城のほか、水前寺成趣園や阿蘇神社など熊本県民の「宝」というべき文化財も大きな被害を受けた。なお、熊本地震による県内の被害額は、試算によると約３．８兆円に上る。市町村が開設した避難所には、最大で１８３，８８２人（県人口の約１割）が避難した。さらに、避難所以外の施設への避難や、商業施設の駐車場・公園・グラウンド等での車中避難、自宅の軒先への避難が発生し、頻発する余震活動の影響から避難所の開設期間は長期化した（市町村が設置した全避難所が閉鎖されたのは平成２８年１１月１８日）。

また、熊本地震では、児童生徒や教職員に死者はなく、負傷者数は２１４人であった。

学校施設についても、市町村立小中学校等４５市町村（熊本市を含む）５９９校中、３９４校が被災した。避難所として学校施設が利用される一方で、平成２８年５月１１日までに全学校が授業を再開した。

【表 1-1　学校施設被害状況】

校種	全校数	被災校数	被災割合	主な被害
小学校	364	222	61%	壁等破損、天井落下、エキスパンジョイントの損傷、水道・給水管破損、窓ガラス破損、玄関部隆起、プール設備の損壊等
中学校	161	112	70%	
高等学校	56	45	80%	給水管・水道管破裂、高架水槽及び給水管破損、建物コンクリート剥離、天井材落下・破損、地面隆起　等
特別支援学校	18	15	83%	ガラス散乱、水道破裂、高架水槽給水管破損等
計	599	394	66%	

【表 1-2　学校施設の避難所開設状況】

校種	全校数	避難所開設	開設割合	最大避難者数	最大避難者発生日等
小学校	364 校	140 校	38%	11,578 人	4.28（4.27 の情報収集開始以降）
中学校	161 校	59 校	37%	5,075 人	
高校	56 校	22 校	39%	10,670 人	4.17 最大は第二、東稜の 2,000 人
特別支援学校	18 校	4 校	22%	610 人	4.16 最大は、かがやきの森の 550 人
計	599 校	225 校	38%	27,933 人	

③ 本県における「地域と学校の連携・協働」の推進状況

本県及び市町村教育委員会や小中義務教育学校では、学校の運営において、地域の人々と教育目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」へと転換していく際の有効なツールである「コミュニティ・スクール」や、地域との連携・協働を促進する「地域学校協働活動」等に取り組んでいる。

なお、平成３０年１月末現在、本県（熊本市を除く）における「地域と学校の連携・協働」の推進状況は、以下のとおりである。

ア　地域と学校の連携・協働の現状

県内小中義務教育学校数	連携・協働の方法		
	①地域学校協働活動推進員等配置校	②ボランティア会議及び研修等の実施校	③校務分掌で地域連携担当が位置づけられた学校
376	204	215	314
	54.3%	57.2%	83.5%

イ　地域学校協働活動と学校運営協議会の現状

県内小中義務教育学校数	地域学校協働活動			学校運営協議会等	
	学校支援活動実施校	放課後子供教室実施校	地域未来塾実施校	コミュニティ・スクール	熊本版コミュニティ・スクール
376	132	69	58	73	194
	35.1%	26.7%	15.4%	19.4%	51.6%
実施割合	54.8%（1つでも実施している学校数）			71.0%（どちらかを実施の学校）	

※　地域学校協働活動は社会教育課調べ、学校運営協議会等は義務教育課調べ

※　コミュニティ・スクールは、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づき市町村教育委員会が規則で定め、学校運営協議会を設置している学校のこと。

※　熊本版コミュニティ・スクールは、コミュニティ・スクールに指定されていない学校が、主体的に、保護者と地域の方々が参加する協議会を設置し、各学校の教育課題等を共有し、その解決や改善に向けて共に話し合い、協力し、一体となって組織的かつ継続的に教育に当たる仕組みのこと。

（２）プロジェクトの趣旨

①　プロジェクトの目的

熊本地震の被災市町村において、地域と学校の連携・協働に係る活動を実施し、その実践効果を調査研究委員会において検証するとともに、検証結果を震災からの復興に取り組む県内の他市町村をはじめ、全国に発信し、地域教育力の意義について普及啓発を図っていく。

②　調査の計画立案及び委託市町村の選定

平成２８年熊本地震からの復旧・復興に地域学校協働活動が果たす効果を検証するために、文部科学省生涯学習政策局の委託事業である「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究（学校を核とした地域力強化プラン）」に係る事業計画書を提出の上、熊本県及び対象６町村において受託した。

熊本県教育委員会では、「被災地域の教育力向上プロジェクト」として調査を行うこととし、県内被災市町村から、表 1-3 の対象６町村を選定した。

対象市町村の選定方法については、県内４５市町村（熊本市を含む）のうち、応急仮設住宅の建設率（仮設住宅整備戸数／世帯数にて算出）が５％を超えた６町村とした。

【表 1-3　６町村の概要】

受託町村（人口）	町村内学校数（児童・生徒数）	実施事業名	学校名
南阿蘇村（10,668）	小学校5校（467） 中学校1校（255）	放課後子供教室（5）	南阿蘇村立中松小学校 南阿蘇村立白水小学校 南阿蘇村立両併小学校 南阿蘇村立久木野小学校 南阿蘇村立南阿蘇西小学校
西原村（6,506）	小学校2校（416） 中学校1校（220）	地域未来塾（1）	西原村立西原中学校
御船町（6,227）	小学校6校（931） 中学校1校（388）	地域未来塾（1）	御船町立御船中学校
嘉島町（3,251）	小学校2校（581） 中学校1校（244）	地域未来塾（1）	嘉島町立嘉島中学校
益城町（11,188）	小学校5校（2,136） 中学校2校（946）	学校支援活動（7）	益城町立益城中学校 益城町立木山中学校 益城町立益城中央小学校 益城町立津森小学校 益城町立広安小学校 益城町立広安西小学校 益城町立飯野小学校
		放課後子供教室（5）	益城町立益城中央小学校 益城町立津森小学校 益城町立広安小学校 益城町立広安西小学校 益城町立飯野小学校
		地域未来塾（2）	益城町立益城中学校 益城町立木山中学校
甲佐町（3,695）	小学校4校（572） 中学校1校（228）	学校支援活動（1）	甲佐町立甲佐小学校
		放課後子供教室（1）	甲佐町立乙女小学校
		地域未来塾（1）	甲佐町立甲佐中学校

なお、県内で応急仮設住宅が建設されたのは１５市町村であるが、受託町村以外の９市町村は建設率が１％前後となっており、明確な差異が見られたため、対象外とした。

③　調査研究委員の選任

熊本県社会教育課が所管する各種委員会の座長を務めている学識経験者３名、及び保護者の視点からの意見をいただくため、熊本県ＰＴＡ連合会から１名を委員として選任した。

なお、第１回調査研究委員会において、委員の互選により本会の委員長は田口委員が務めることと決定した。

【表 1-4　調査研究委員会委員名簿】

氏　名	所属・役職等	備　考
石村　秀登	熊本県立大学文学部　教授	熊本県放課後子ども総合プラン推進委員（委員長）
田口　浩継 【委員長】	熊本大学教育学部　　教授	熊本県地域学校協働活動推進委員（委員長）
中村　慶治	熊本県ＰＴＡ連合会　会長	熊本県社会教育委員
八ツ塚　一郎	熊本大学教育学部　准教授	熊本県社会教育委員（会議座長）

※五十音順、所属・役職等は平成２９年５月２４日現在

（３）プロジェクトの経過

①　委託事業

期　　日	内　　容
平成 29 年 4 月　1 日	委託契約締結（国⇔県）
平成 29 年 4 月　5 日	委託契約締結（県⇔6 町村）
平成 29 年 7 月 25 日	○委託町村連絡会 ・事業趣旨、事業概要、事業の方向性及び年間スケジュールの確認 ・実施事業の進捗状況の報告

②　調査研究委員会

	期　　日	内　　容
第 1 回	平成 29 年　6 月　1 日	調査内容、調査方法及び調査項目についての協議
第 2 回	平成 29 年　9 月 20 日	調査アンケート内容についての協議
第 3 回	平成 29 年 10 月 27 日	調査アンケート内容についての最終協議
第 4 回	平成 30 年　3 月　2 日	調査報告書についての協議

③ 事業視察

	期　　日	視 察 先	内　容
第 1 回	平成 29 年 11 月 28 日	南阿蘇村 南阿蘇西小学校 放課後子供教室	・放課後子供教室の活動の参観 ・地震後の村内の放課後子供教室の実施状況についての説明
第 2 回	平成 29 年 11 月 29 日	西原村	・震災状況の視察 ・震災後の避難所運営の状況についての説明 ・震災後の村内の地域未来塾の実施状況についての説明
第 3 回	平成 29 年 11 月 30 日	益城町 益城中央小学校	・地域住民による学校支援活動の参観 ・益城中央小における事業の実施状況についての説明 ・意見交換

（４）調査の方法

① 調査の手法

熊本県教育委員会が被災６町村の教育委員会を通じて、調査の対象へのアンケート方式のほか、必要に応じて聞き取り調査を実施した。

② 調査の対象

平成２９年度に地域学校協働活動を実施している被災６町村を対象とした。

調　査　票		対　象　者
A	町村教育委員会用	教育委員会(社会教育主管課)の地域学校協働活動担当者を対象
B	地域学校協働活動推進員・地域コーディネーター用	配置 4 町村の 9 人を対象
C	学校用	対象 18 校で、H27 年度から勤務する管理職又は生涯学習担当者等の地域との連携を担当する教職員 18 人を対象
D	保護者用	放課後子供教室及び地域未来塾を実施する対象17校の参加児童及び生徒の全保護者(但し、回収できた分のみ)を対象
E	地域ボランティア等用	対象18校で地域ボランティアを行う方(安全管理員･教育活動推進員･学習支援員の方を含む)を対象(但し、回収できた分のみ)
F	学校支援活動児童生徒用	学校支援活動を行う対象 9 校につき、各学校で抽出した 1 学級の児童生徒全員を対象
G	放課後子供教室児童用	放課後子供教室を行う対象 11 校のうち、3 年生以上の参加全児童を対象(但し、3 年生以上の児童の参加がない場合は、参加児童の最上級生を対象)
H	地域未来塾生徒用	地域未来塾を行う対象 6 校の参加全生徒を対象

③ 調査の実施時期

アンケート調査	平成 29 年 11 月 20 日～12 月 18 日
聞き取り調査	平成 30 年 2 月 8 日、13 日

④ 調査アンケートの回収状況及び聞き取り状況

調査アンケートの回収状況は、表 1-5 のとおりである。また、聞き取り状況については、表 1-6 のとおりである。

【表 1-5　対象別調査アンケートの回収状況】

調査対象別	票	回収数
教育委員会	A	6
地域学校協働活動推進員・地域コーディネーター	B	9
学校	C	18
保護者	D	201
地域ボランティア等	E	223
学校支援活動関係児童	F	194
放課後子供教室参加児童	G	115
地域未来塾参加生徒	H	101

【表 1-6　聞き取り状況】

調査町村数	調査対象者	人数
1	地域学校協働活動推進員	2
1	地域コーディネーター	2

２　地域学校協働活動の実施効果及び今後の活動充実に関する調査結果

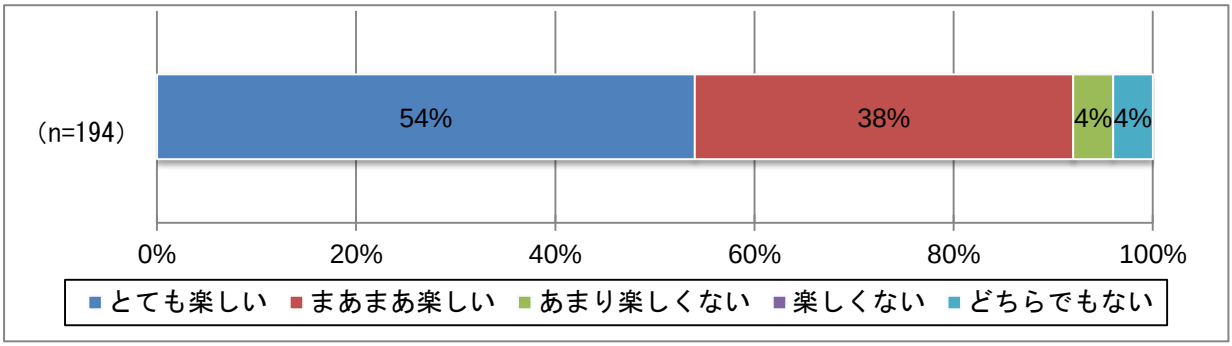
（１）調査結果

①　児童生徒への効果に関する調査結果

ア　児童生徒を対象とした調査結果から（Ｆ票、Ｇ票、Ｈ票）

地域の方と一緒に学習（活動）する児童生徒の楽しさの状況は、図 2-1 に示すとおりである。

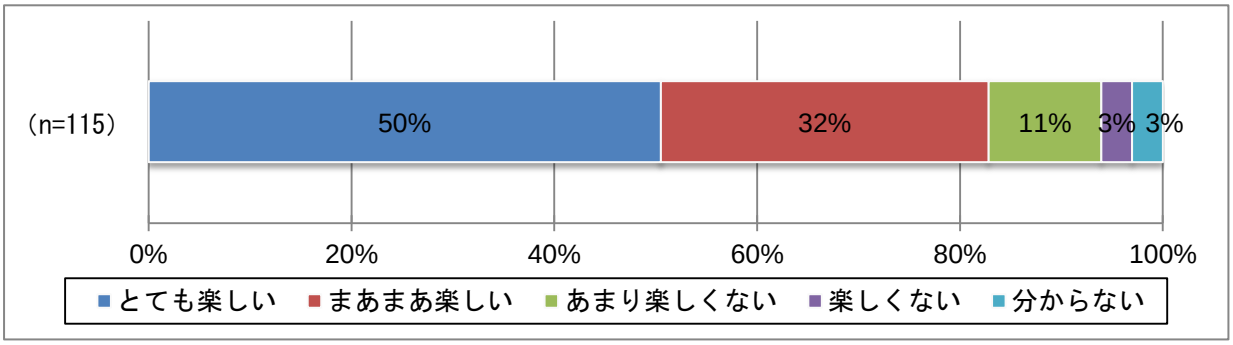
「とても楽しい」が５４％と最も高い割合を占め、次いで「まあまあ楽しい」が３８％となっており、９２％の児童生徒が地域の方と一緒に学習（活動）することが楽しいと感じていることがわかる。



【図 2-1　地域の方と一緒に学習（活動）する児童生徒の楽しさの状況（Ｆ票）】

放課後子供教室に参加する児童の楽しさの状況は、図 2-2 に示すとおりである。

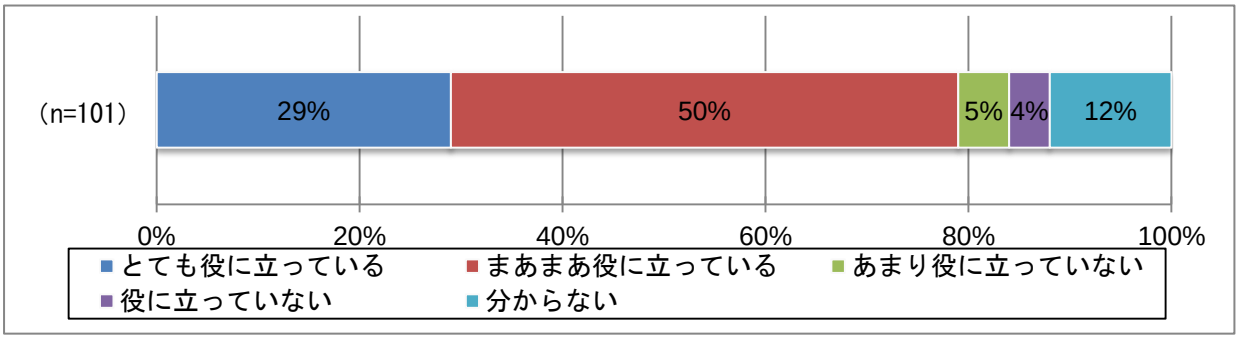
「とても楽しい」が５０％と最も高い割合を占め、次いで「まあまあ楽しい」が３２％となっており、８２％の児童が放課後子供教室を楽しいと感じていることがわかる。



【図 2-2　放課後子供教室に参加する児童の楽しさの状況（Ｇ票）】

地域未来塾に参加する生徒の有用感の状況は、図 2-3 に示すとおりである。

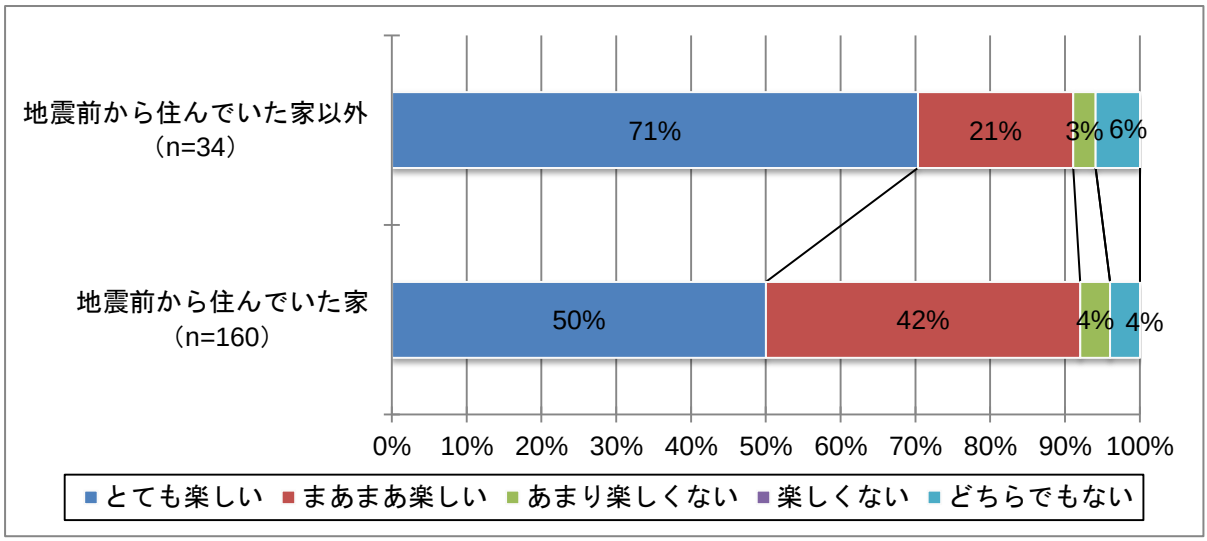
「まあまあ役に立っている」が５０％と最も高い割合を占め、次いで「とても役に立っている」が２９％となっており、７９％の生徒が地域未来塾を役に立っていると感じていることがわかる。



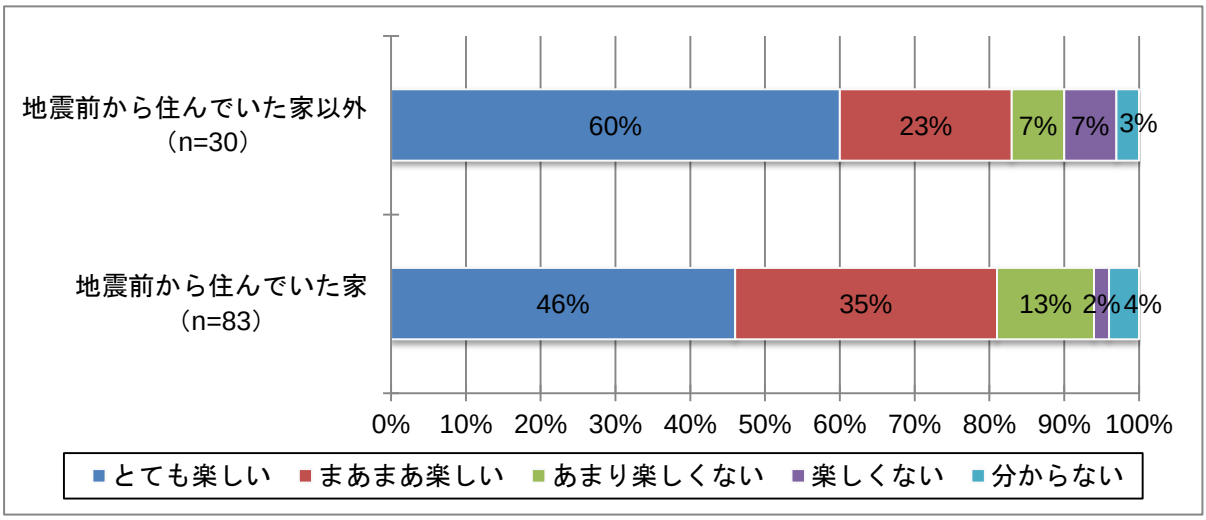
【図 2-3　地域未来塾への参加生徒の有用感の状況（Ｈ票）】

また、学校支援活動、放課後子供教室及び地域未来塾で、“楽しさ・有用感の状況”と“児童生徒の現在の住居”をクロス集計した結果は、図 2-4、2-5、2-6 に示すとおりである。

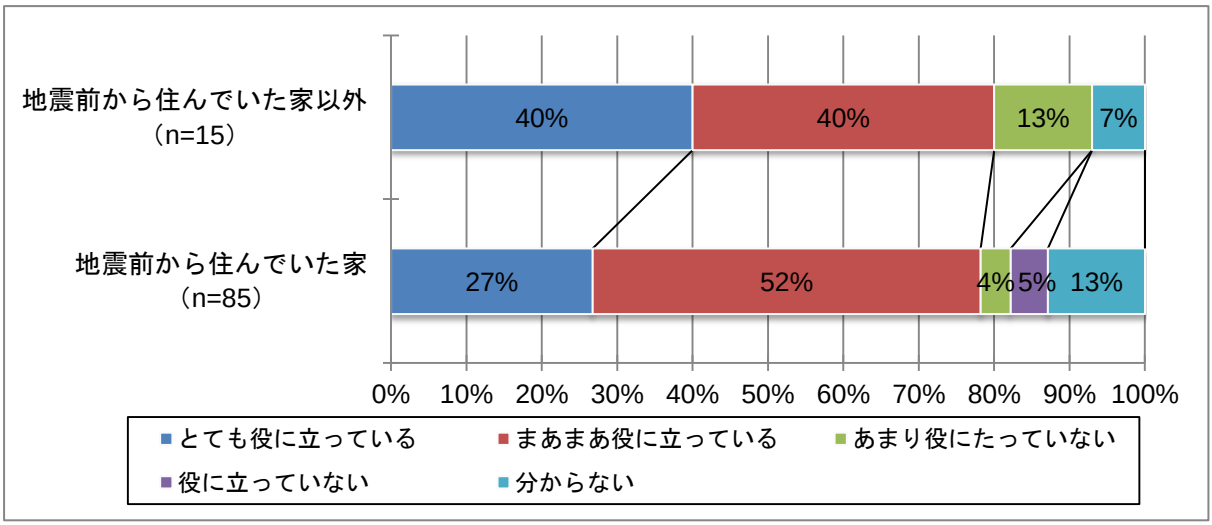
「仮設住宅・みなし仮設住宅など、地震前から住んでいた家以外の住居」に住んでいる児童生徒の方が、「地震前から住んでいた家」に住んでいる児童生徒よりも、いずれの活動において、楽しさ・有用感の状況で「とても楽しい」「とても役に立っている」が高い傾向にあった。



【図 2-4　“楽しさの状況”と“現在の住居”をクロス集計した結果（学校支援活動）】



【図 2-5　“楽しさの状況”と“現在の住居”をクロス集計した結果（放課後子供教室）】

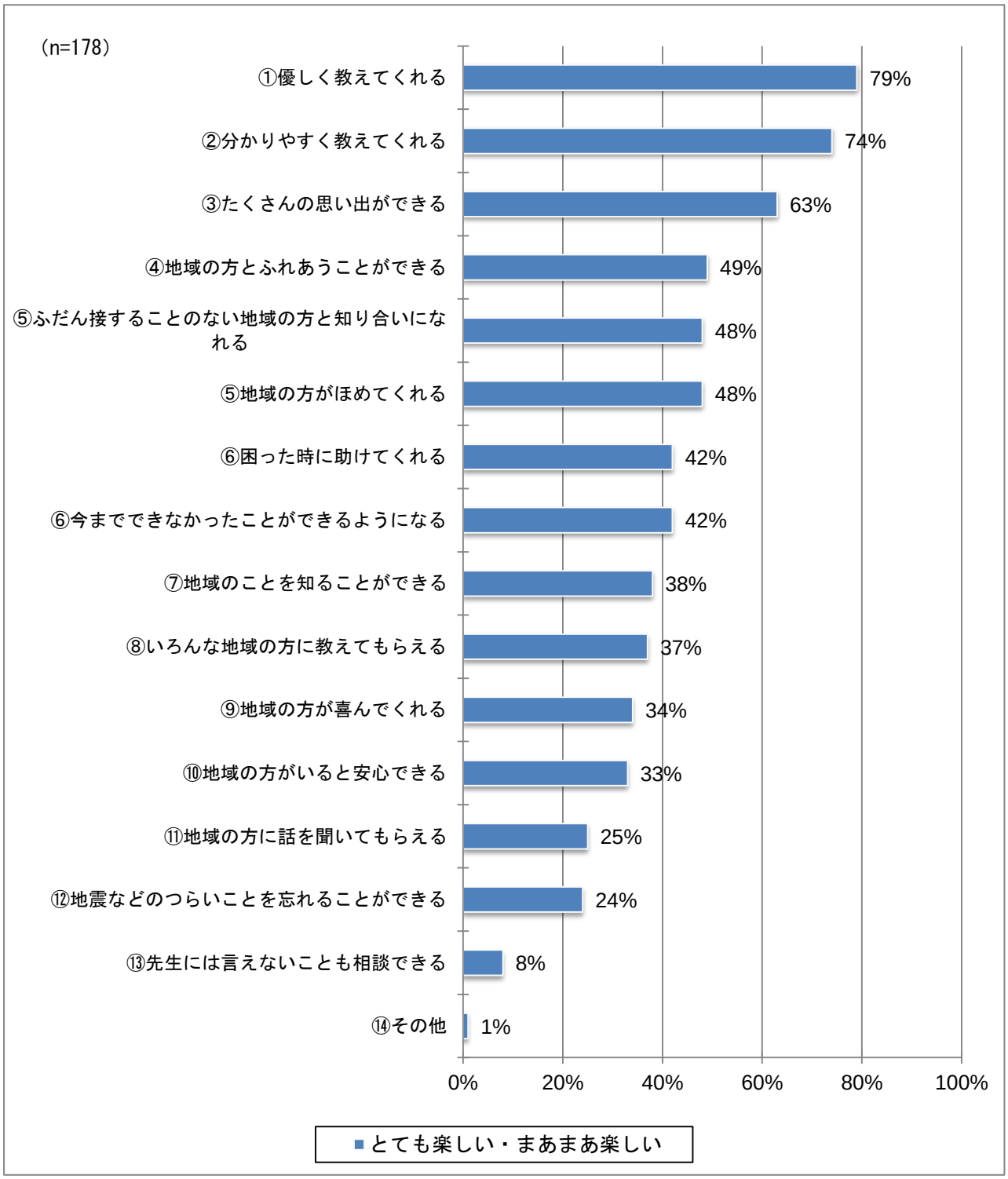


【図 2-6　“有用感の状況”と“現在の住居”をクロス集計した結果（地域未来塾）】

児童生徒が地域の方と一緒に学習（活動）する良さをどのように評価しているかは、図 2-7 に示すとおりである。

図 2-1 で地域の方と一緒に学習（活動）することを「とても楽しい・まあまあ楽しい」と回答した児童生徒の回答を見ると、「優しく教えてくれる」が７９％と高く、次いで「分かりやすく教えてくれる」（７４％）、「たくさんの思い出ができる」（６３％）、「地域の方とふれあうことができる」（４９％）、「ふだん接することのない地域の方と知り合いになる」「地域の方がほめてくれる」（４８％）となっている。

結果から、「地域の方が優しく、分かりやすく教えてくれること」や「ふだん接することのない地域の方と知り合いになる」ことを良さと感じている児童生徒が多いことがわかる。



【図 2-7　地域の方と一緒に学習（活動）する良さの状況】

＜地域の方と一緒に学習（活動）して、「うれしかったこと」の具体例（自由記述から抽出）＞

①【優しく教えてくれる】

・分かりやすく優しく接してくれるので、次来ると思ったらわくわくする。
・習字の時にたくさん考えてくれたり、悪かったことを注意などしてくれたこと。
・竹細工のボランティアの方が、刀の仕組みや切り方を優しく分かりやすく教えてくれたこと。
・普段「ここが分からない」などの質問をするのが苦手だけど、地域の方々は優しくどんな相談にものってくれて話しかけやすいので、質問をたくさんすることができる。
・地域の人がどこがどんなふうに悪いかを優しく教えてくれたりしてくれたのがうれしかった。ボランティアの人がお手本を少し書いてくれたからそれを見てやったりできた。
・苗植えの時に優しく「何個入れればいいよ」とか教えてくれる。
・琴クラブで中央フェスタに向けて練習する時に、たくさん優しく教えてもらってとてもうれしかった。

②【分かりやすく教えてくれる】

・ボランティアの人にアドバイスを言われて、正しく書いたら、今までで一番うまく書けたことがうれしかった。
・「どこにどんな本があるよ」と言ってくれたので、こんな本があるんだと感じたこと。
・習字の時、「この書き方いいね～」とか「ここはこうすればいいよ」などの声をかけてもらったこと。

③【たくさんの思い出ができる】

・将棋の達人と将棋ができたこと。最初は聞いてもらえるか心配だったけど、快く受け入れてくれて良かった。
・自分たちが活動やイベントをすると、たくさん笑って、喜んでくださったりするところ。

⑤【ふだん接することのない地域の方と知り合いになる】

・地域の人のことを知れて、いろいろ仲が良くなったり、顔みしりになったりして声をかけやすくなってうれしかった。
・少し話したり、学習したりすると、あった時に声をかけてくれて、覚えていてくれる。

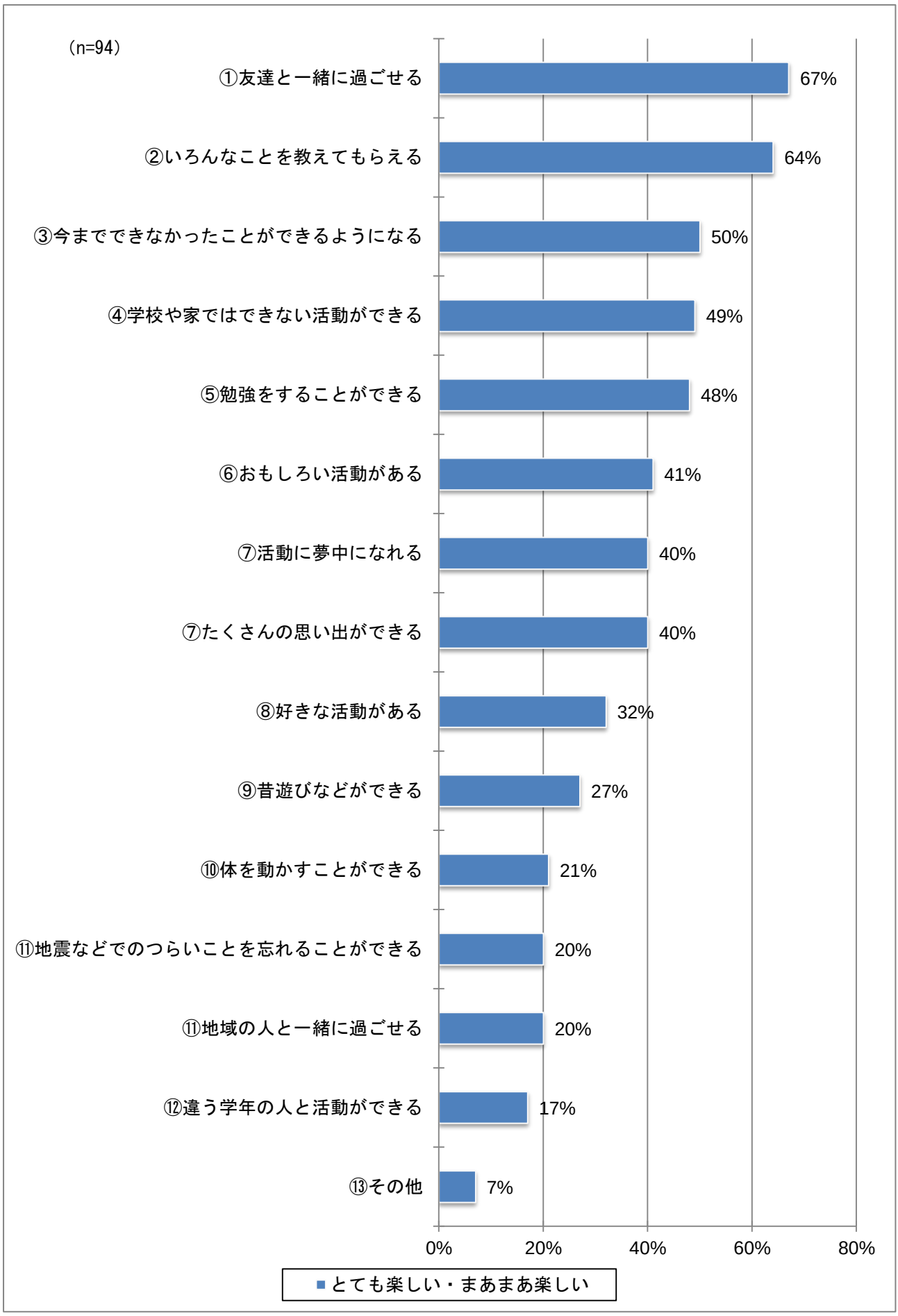
⑤【地域の方がほめてくれる】

・「つり」を初めて書いたときに「上手だね！習字習っているの」と言われたことがうれしかった。
・広安フェスタでちょんかけごまを教えていただいた時、すごくほめていただいた。
・自分の名前を覚えてもらって名前を呼んでもらったことやあいさつをしてもらったこと。
・ミシンをやっている時、ひも通しを失敗して、地域の方に聞いた時、「わあ、でも、ここまでようできとるね」と言ってくれた。

児童が放課後子供教室のいいところをどのように評価しているかは、図 2-8 に示すとおりである。

図 2-2 で放課後子供教室が「とても楽しい・まあまあ楽しい」と回答した児童の回答を見ると、「友達と一緒に過ごせる」が６７％と高く、次いで「いろんなことを教えてもらえる」（６４％）、「今までできなかったことができるようになる」（５０％）、「学校や家ではできない活動ができる」（４９％）、「勉強をすることができる」（４８％）となっている。

結果から、「ふだんあまり接することのない友達との交流」や「学校や家では体験できないいろいろな活動ができること」をいいところととらえている児童が多いことがわかる。



【図 2-8　放課後子供教室のいいところの状況】

＜放課後子供教室に参加して、「うれしかったこと」の具体例（自由記述から抽出）＞

①【友達と一緒に過ごせる】

・帰る時、みんなに「さよなら」と言ったら、みんなも「さよなら」と返事を返してくれること。
・仲の良い子じゃない子ともいっしょに勉強してお話ししたりして、仲良くなれたこと。
・放課後子供教室は同じクラスになったことのなかった人と絆が深まって仲良く話すようになった。

②【いろんなことを教えてもらえる】

・１年生のころに、くまの人形作りで、どうすれば縫えるかが分からなかった。けど、放課後子供教室の先生に教えてもらえて良かった。
・おもちゃみたいにいっぱいいろんな物が作れる。
・友達や一人で宿題をしている時に一人の先生がいっしょに考えてくれたり、そろばんの時も、正解したら、先生がほめてくれたりしてうれしかった。

③【今までできなかったことができるようになる】

・そろばんの検定試験で合格ができ、毎日練習してきた成果が表れていると思ったこと。
・そろばんの試験で合格ができて、シールやバッチ、賞状などがもらえること。
・できなかったあみぼうができるようになった。できるようになったので、家でやっている。

④【学校や家ではできない活動ができる】

・自分が知らない歌や遊びができてうれしかったし、家でも遊べる。
・ひいおばあちゃんがそろばんをやっていた時、自分もしたいなと思っていて、放課後子供教室でそろばんができて上手になったこと。

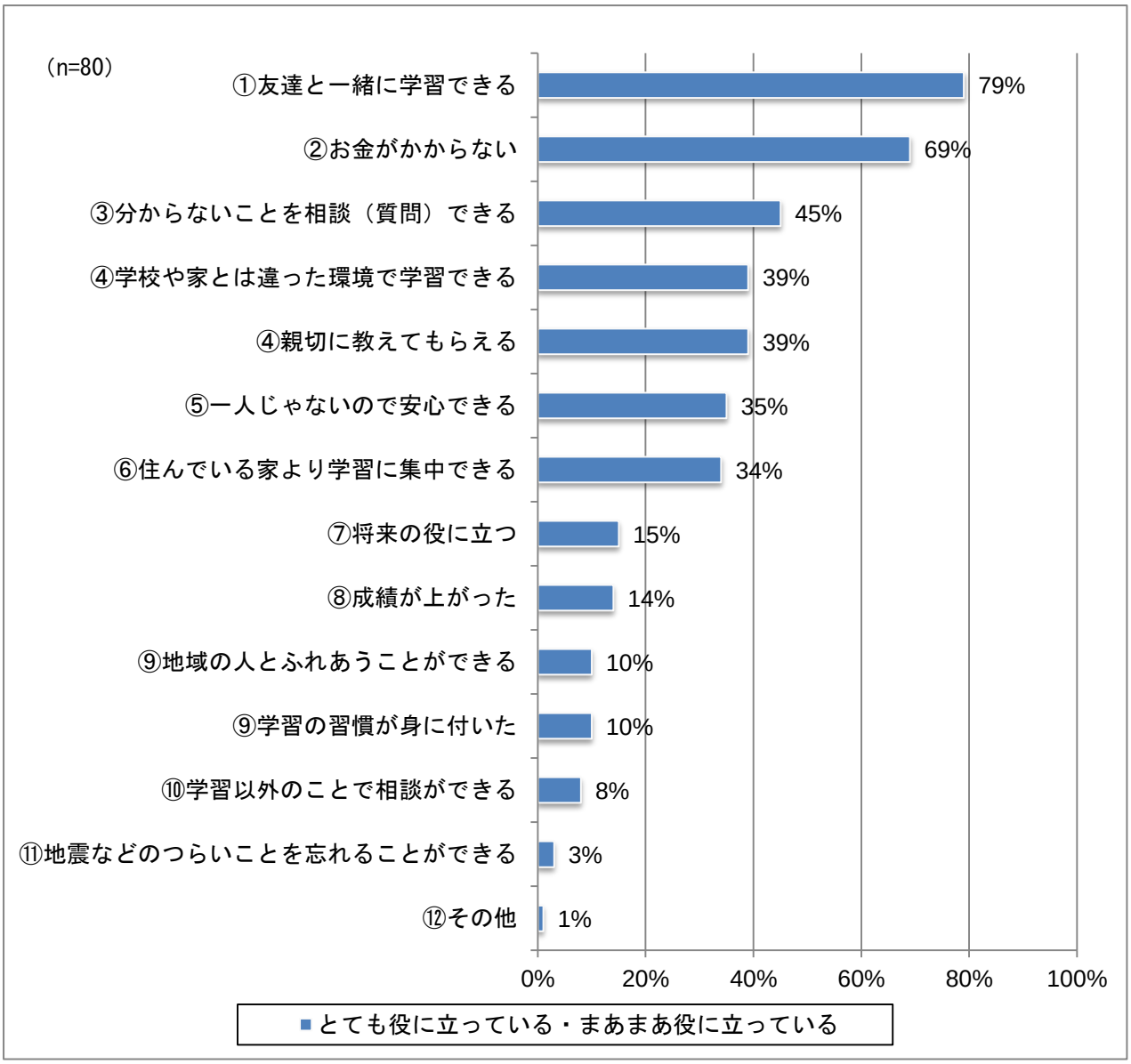
⑤【勉強をすることができる】

・前は算数のテストの計算問題が８０点とかだったけど、９０点とか成績が良くなって、そろばんをしていて良かったなと思った。

生徒が地域未来塾の良いところをどのように評価しているかは、図 2-9 に示すとおりである。

図 2-3 で地域未来塾が「とても役に立っている・まあまあ役に立っている」と回答した生徒の回答を見ると、「友達と一緒に学習できる」が７９％と高く、次いで「お金がかからない」（６９％）、「分からないことを相談（質問）できる」（４５％）、「学校や家とは違った環境で学習できる」「親切に教えてもらえる」（３９％）の順となっている。

結果から、「友達との教え合いや学び合いができること」や「財政的な負担なしで学校や家と違った環境、違った先生（地域の方）から分かるまで親切に教えてもらえること」を良いところととらえている生徒が多いことがわかる。



【図 2-9　地域未来塾の良いところの状況】

＜地域未来塾に参加して、「良かった」と思うことの具体例（自由記述から抽出）＞

①【友達と一緒に学習できる】

・友達と学び合いながら授業をするのでとても良い。
・教え合いができる（だいたいの人が教えてくれる）。
・同じ町でも違う校区に住んでいる同級生と互いに教え合ったりすることができる。

③【分からないことを相談（質問）できる】

・分からないところを進んで、すぐに質問できる。
・何人かの先生がいるからいつでも聞ける。
・他の人に言えないことも何でも話せるし、相談できる。

④学校や家とは違った環境で学習できる

・家ではあまり集中できないけど、地域未来塾は集中して取り組める。
・家ではあまり勉強をしないので、休日に学校に来て勉強できるのが良い。
・全然勉強をしようと思っていなかったけど、少しでもするようになった。

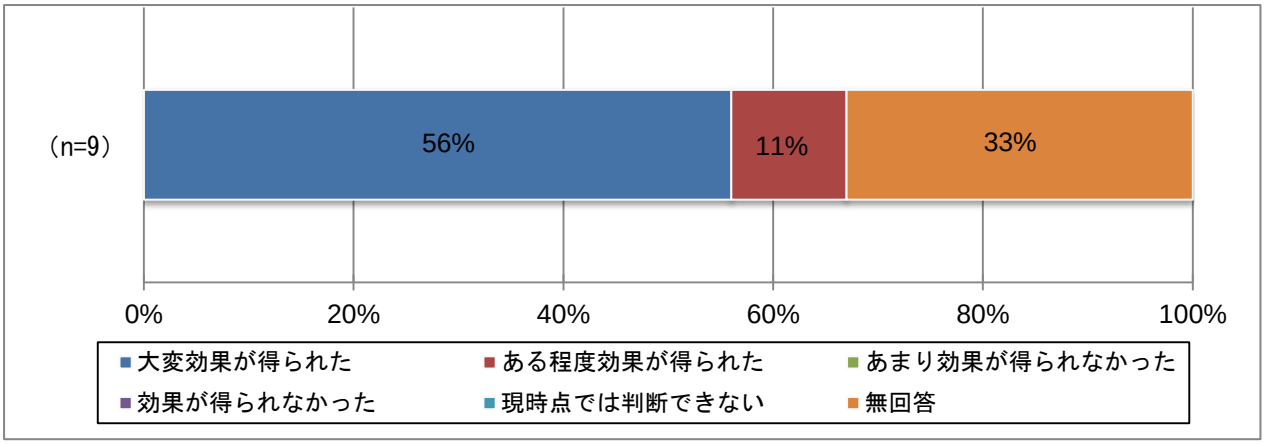
④親切に教えてもらえる

・１つ１つ解説や裏ワザが聞ける。
・分かるまで教えてくれる。

イ　地域学校協働活動推進員・地域コーディネーターを対象とした調査結果から（Ｂ票）

地震後の地域学校協働活動の取組を実施して、児童生徒の心の安定に効果があったと回答した地域学校協働活動推進員・地域コーディネーター（以下、「推進員」と記す。）の割合は、図 2-10 に示すとおりである。

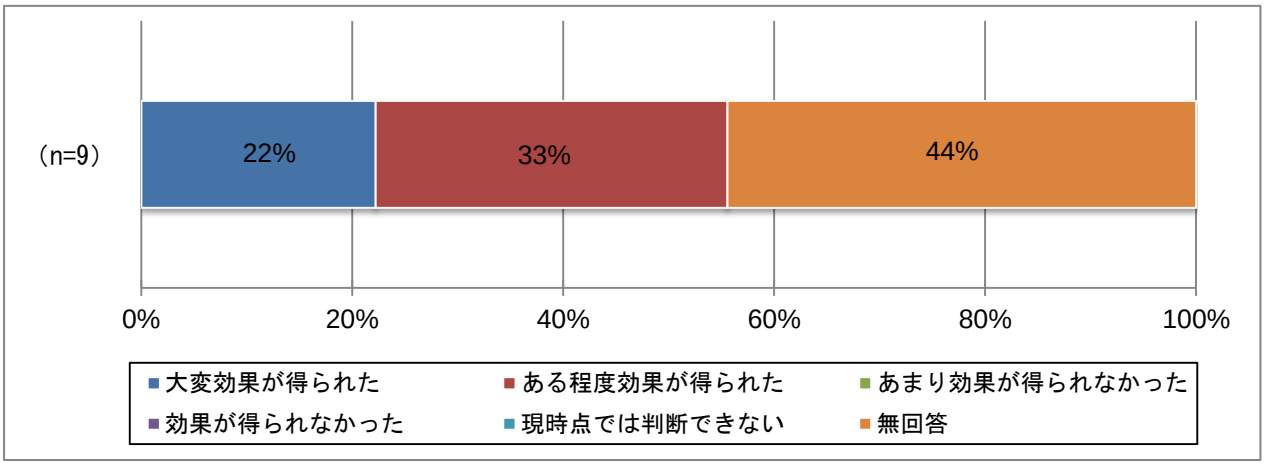
「大変効果が得られた」「ある程度効果が得られた」と回答した推進員の割合は６７％であり、無回答を除き、全て肯定的な回答が得られた。



【図 2-10　地震後の地域学校協働活動等の取組を実施しての子どもたちへの効果（心の安定）】

地震後の地域学校協働活動の取組を実施して、学習意欲の喚起に効果があったと回答した推進員の割合は、図 2-11 に示すとおりである。

「大変効果が得られた」「ある程度効果が得られた」と回答した推進員の割合は５５％であり、無回答を除き、全て肯定的な回答が得られた。



【 図 2-11　地震後の地域学校協働活動等の取組を実施しての子どもたちへの効果（学習意欲の喚起）】

「子どもたちに良い影響を与えたと考えられる取組」の具体例の記述は、以下に示すとおりである。

「人との優しいつながりで豊かな心を取り戻し、笑顔がたくさん生まれました」「感じる心が豊かになり、心の安定に大きな働きになりました」「聞いてもらいたい、ほめてもらいたいという満足感を得られる」等、心の安定に関する記述や「多くの質問が出され、史跡を守っていかなければという意識が高まった」「地域の方の生の声を聞き、自分と重ね、より温かい心あふれる益城町にしたいという思いが強まった」等、学習意欲の喚起に加え、今後の自己の生き方等に関する記述も見られた。

＜地震後の地域学校協働活動等において、「子どもたちに良い影響を与えたと考えられる取組」の具体例（自由記述から一部抜粋）＞

①【心の安定】

・かわいい布のマスコットの手作り

マスコットは幸運をもたらし、身を守ってくれる縁起の良いものと言われています。（中略）心が和み、身近に感じられる大切なお友達、その喜びをたくさんの人に分けてあげることができる。環境が急に変わった時、人との優しいつながりで豊かな心を取り戻し、笑顔がたくさん生まれました。

・楽器音遊び

音を通して、音への興味関心を持ち、思いっきり楽しみました。（中略）心地よさの中、もっと聴きたい高音低音の振動の違い、感じる心が豊かになり、心の安定に大きな働きになりました。豊かな時間の共有、音の力は素晴らしいものです。感じとる力、心からの感動、心を表現し満足感が得られました。感動を伝えあう、温かい時間でした。

・傾聴

小学校２年生の生活科、町探検の学習。子どもが聞いてもらいたい、ほめてもらいたいという満足感を得られる。

・伝承遊び（小・全学年）

毎年行われていた地域、学校、保護者が協力しての行事ですが、本年度は地震前と同様に同程度の規模で開催。児童の参加の態度やお礼の手紙等から、心待ちにしていた様子や感謝の言葉多数。

②【学習意欲の喚起】

・地域の史跡探検（小・３年）

壊れたままの神社や史跡を実際に見ながら、地域の方から昔話や神社を大事にしてきた地域の歴史を聞く。多くの質問が出され、史跡を守っていかなければという意識が高まった。

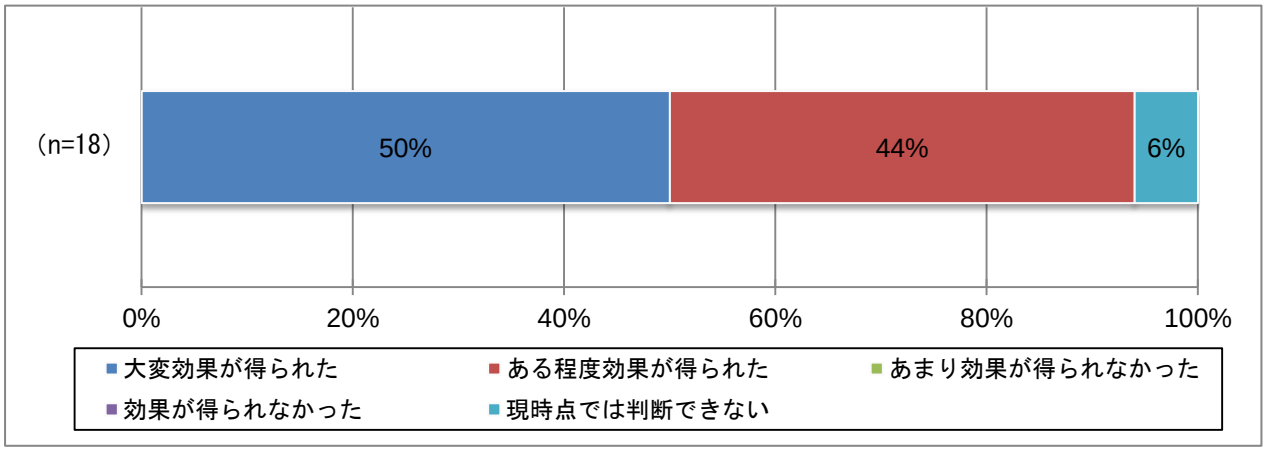
・仮設団地の方々へのインタビュー交流（小・４年）

「どんなことに困っているのか」「その中で楽しみがある」等、生の声を聞き、自分と重ね、より温かい心あふれる益城町にしたいという思いが強まった。

ウ　学校を対象とした調査結果から（Ｃ票）

地震後に地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、子どもたちの行動面や学習面に効果があったと回答した学校の割合は、図 2-12 に示すとおりである。

「大変効果が得られた」「ある程度効果が得られた」と回答した学校の割合は９４％であり、「現時点では判断できない」を回答した１校を除き、全て肯定的な回答が得られた。

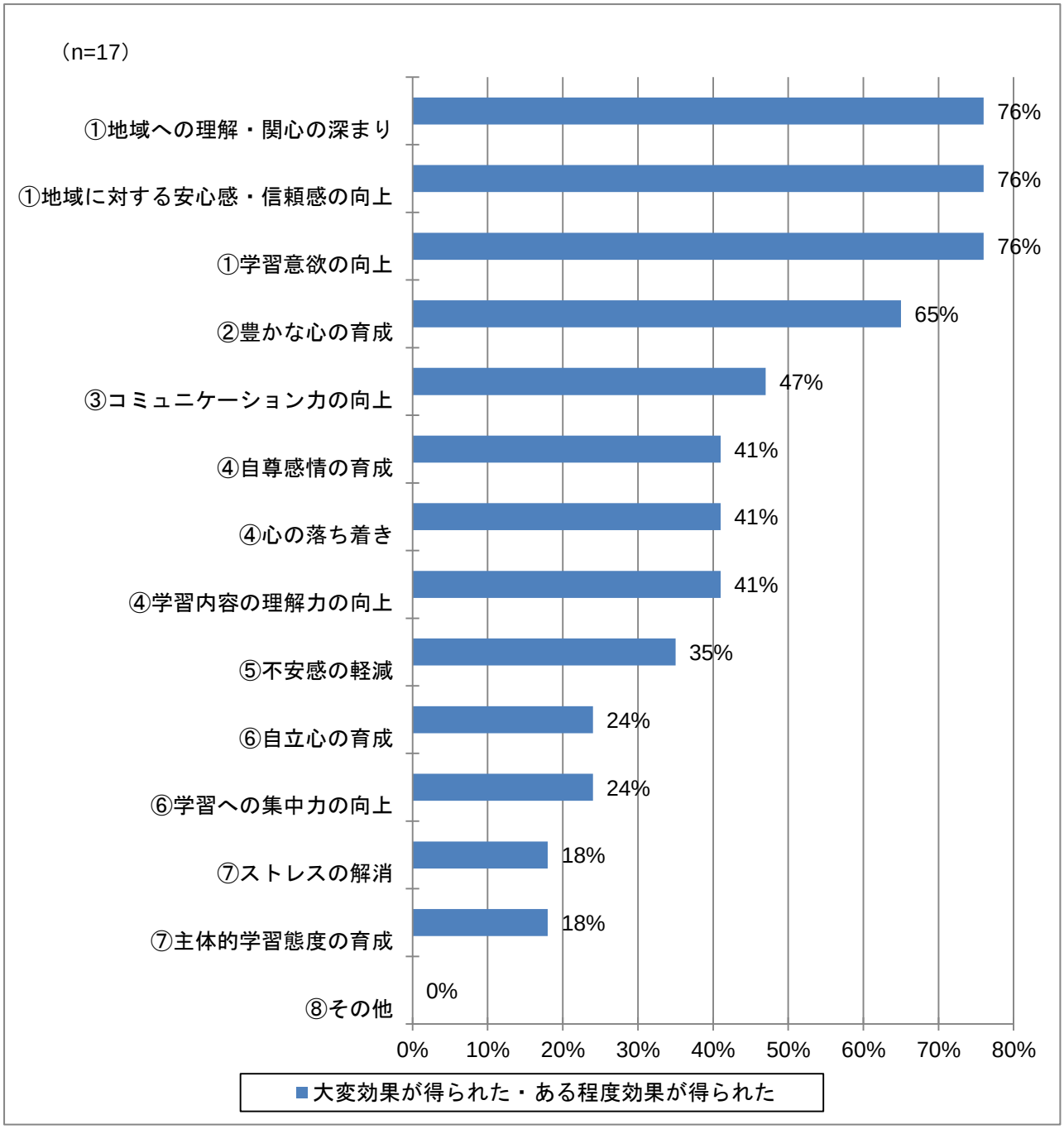


【図 2-12　地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施しての子どもたちの行動面や学習面への効果の状況】

各学校で見受けられた効果については、図 2-13 に示すとおりである。

図 2-12 で「大変効果が得られた・ある程度効果が得られた」と回答した学校の回答状況を見ると、「地域への理解・関心の深まり」「地域に対する安心感・信頼感の向上」「学習意欲の向上」が７６％と高く、次いで「豊かな心の育成」（６５％）、「コミュニケーション力の向上」（４７％）、「自尊感情の育成」「心の落ち着き」「学習内容の理解力の向上」（４１％）の順である。

結果から、多様な地域の方の参画により、地域への関心や学習意欲が高まった児童生徒が多いことがわかる。



【図 2-13　学校で見受けられた子どもたちの行動面や学習面の効果の状況】

「子どもたちの行動面や学習面に効果があったと考えられる取組」の具体例の記述は、以下に示すとおりである。

＜地震後の地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組において、「子どもたちの行動面や学習面に効果があったと考えられる」具体例（自由記述から全て記載）＞

①【地域への理解・関心の深まり】【地域に対する安心感・信頼感の向上】

・地域伝統文化の太鼓、神楽等の学習活動を通して、地域への関心が高まり、同時に郷土を誇りに思う心情が育ってきた。

・地域の保全チームの方とホタルの観察や飼育を行っている。

・仮設住宅の方と交流を行っている。

・小学３年生の総合的な学習の時間（社会）の「防災マップ作り」では、地域ボランティアと一緒に地域探検をし、危険箇所を見つけ、地図作りも一緒に行った。

①【学習意欲の向上】

・話を聞いてもらって、将来の夢を決めることができた。

②【豊かな心の育成】

・分かりやすく教えてくれて、できた時にほめてもらえてとてもうれしかった。

③【コミュニケーション力の向上】

・地域の方と交流することによって、コミュニケーション力（あいさつ・返事・受け答え）などの力がついているように感じます。

④心の落ち着き

・様々な方々から支援活動をしていただいたことで、子どもたちが元気を取り戻していった。

・ボランティアの方と朝のあいさつ運動を充実させることができた。あいさつ運動を通して、生徒一人一人への声掛けができ、生徒の心の安定化につながった。

・地震後、学校環境の整備の協力をしていただいた。環境が改善したことで、生徒のストレスの解消や学校生活の安定化につながった。

④学習内容の理解力の向上

・学力の定着に不安のある生徒及び保護者のニーズに応じた個別指導を行う。

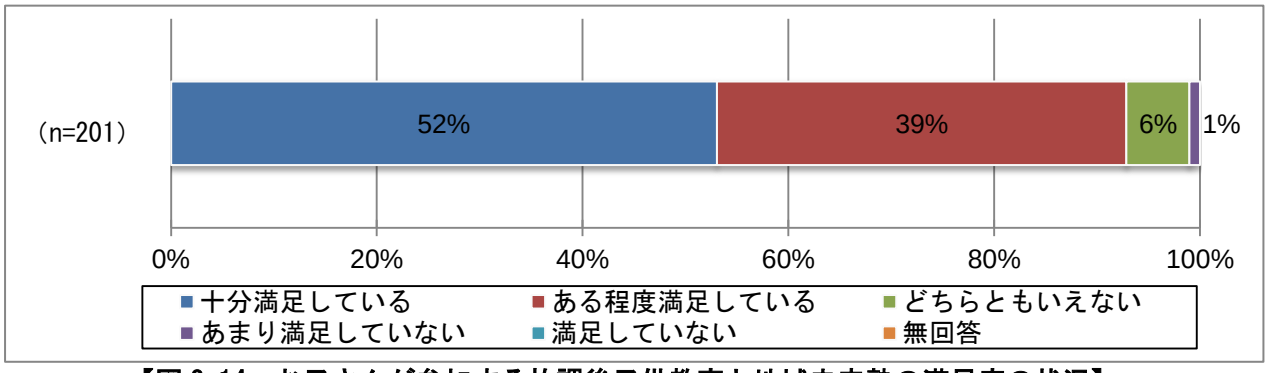
・学習内容の理解について支援をいただいたことで、基礎的基本的事項が定着し、生徒が自信を持つことできた。

エ　保護者を対象とした調査結果から（Ｄ票）

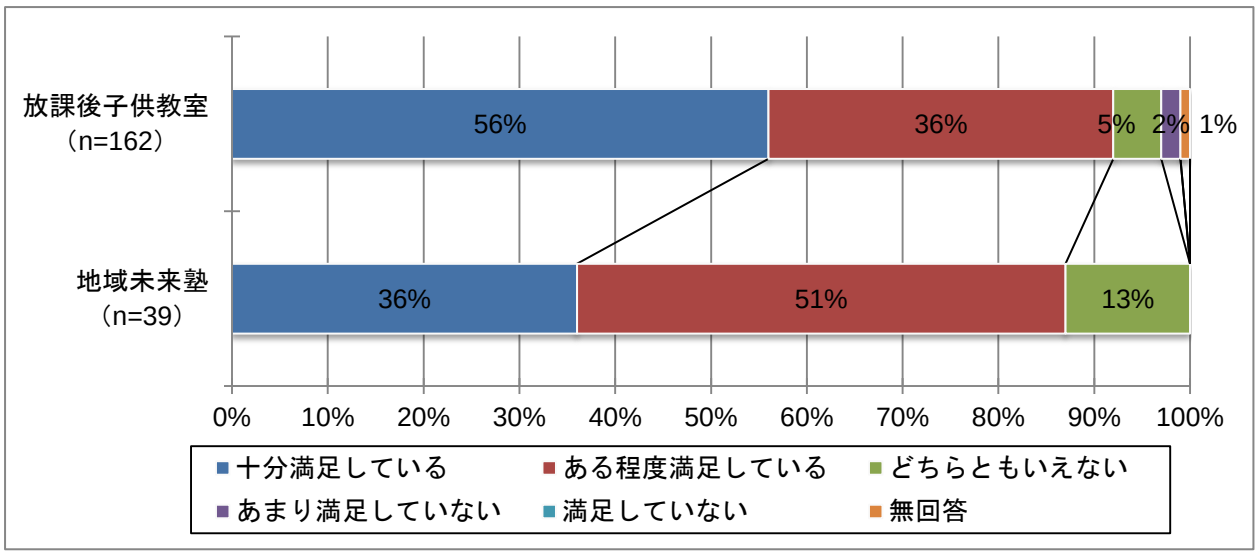
子どもが参加する放課後子供教室と地域未来塾の活動への保護者の満足度の状況は、図 2-14 に示すとおりである。

「十分満足している」が５２％と最も高く、次いで「ある程度満足している」が３９％となっており、９１％の保護者が放課後子供教室と地域未来塾の活動に満足していることがわかる。

また、図 2-15 では各活動ごとの満足度の状況を示すが、双方の活動で満足度が高いことがわかる。



【図 2-14　お子さんが参加する放課後子供教室と地域未来塾の満足度の状況】



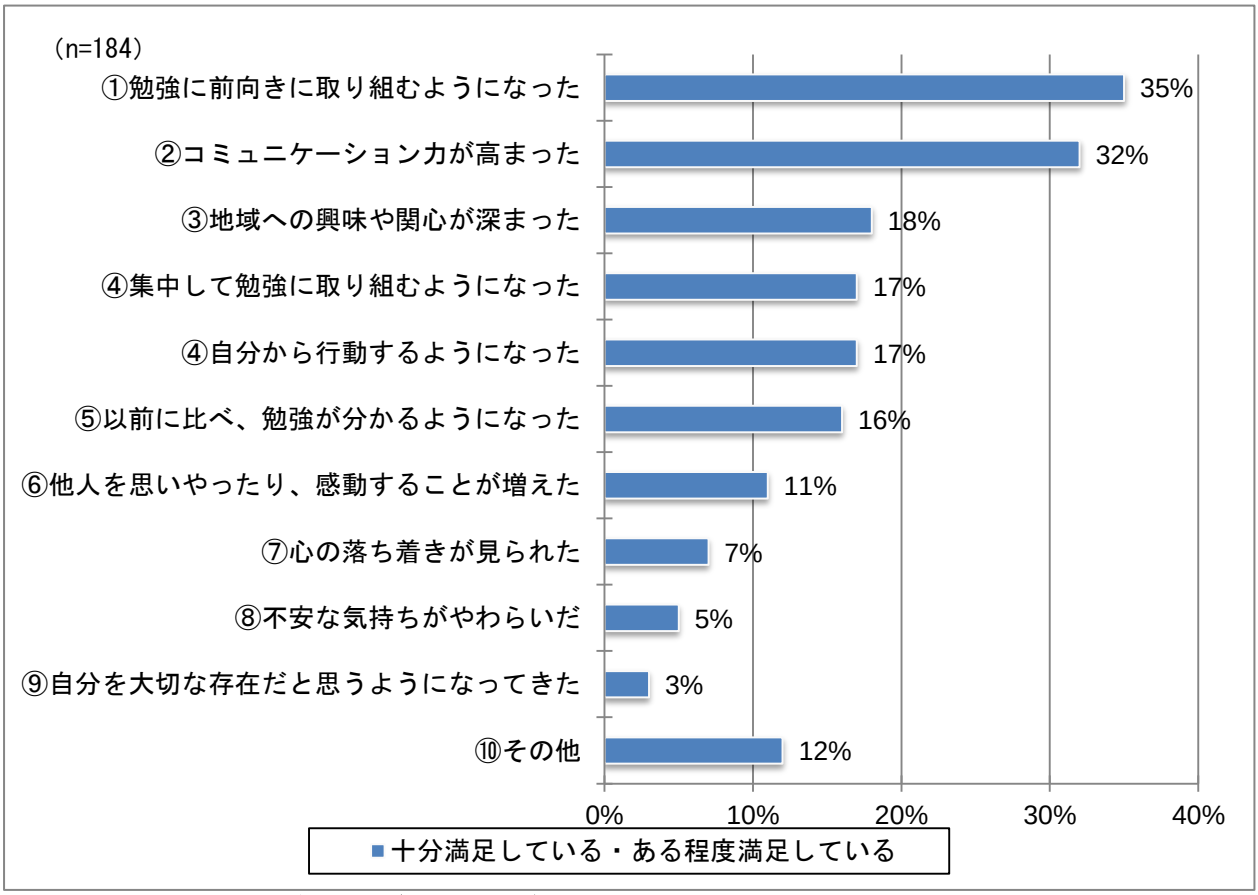
【図 2-15　お子さんが参加する放課後子供教室と地域未来塾の活動別の満足度の状況】

「十分満足している・ある程度満足している」と回答した保護者の、子どもが参加する放課後子供教室や地域未来塾への参加効果の状況については、図 2-16 に示すとおりである。

「勉強に前向きに取り組むようになった」が３５％と高く、次いで「コミュニケーション力が高まった」（３２％）、「地域への興味や関心が深まった」（１８％）、「集中して勉強に取り組むようになった」「自分から行動するようになった」（１７％）の順となっている。

結果から、子どもの家庭での様子から、勉強に取り組む姿勢やコミュニケーション力が高まっていることがわかる。

また、選択肢の「その他」の効果については、以下に示すとおりである。



【図 2-16　保護者が思う放課後子供教室と地域未来塾の参加効果の状況】

＜放課後子供教室（地域未来塾）の活動に参加して、「効果があったと考えられる」その他の例（記述から抜粋）＞

⑩【その他：教科以外の体験ができた】

・授業とは違う体験ができました。
・自分の身の回りのある物で何かを作り出そうとする力、想像する力、意欲が出てきた。
・色々な自然のことなどにとてもくわしくなった。
・もの作りを積極的にするようになった。
・家でも創意工夫をするようになった。放課後子供教室をとても楽しみにしている。
・色々なことを楽しめるようになった。

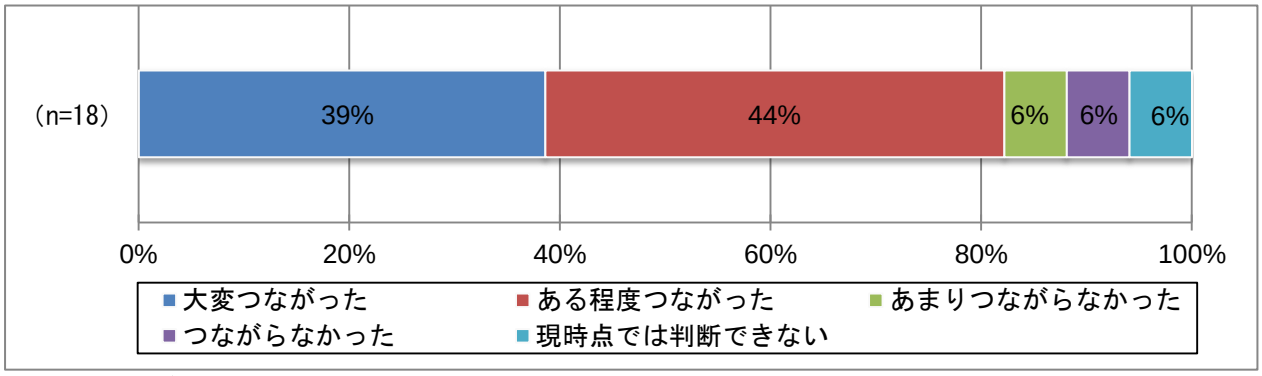
⑩【その他：多様な方とのふれあいが増えた】

・放課後の過ごし方のバリエーションが増え、あらゆる人たちとのふれあいが増えた。

② 教職員への効果に関する調査結果（学校を対象とした調査結果：Ｃ票）

地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、「教職員の業務の助けにつながった」と思うかの状況は、図 2-17 に示すとおりである。

「ある程度つながった」が４４％と最も高い割合を占め、「大変つながった」が３９％となっており、８３％の学校が「教職員の業務の助けにつながった」と感じていることがわかる。

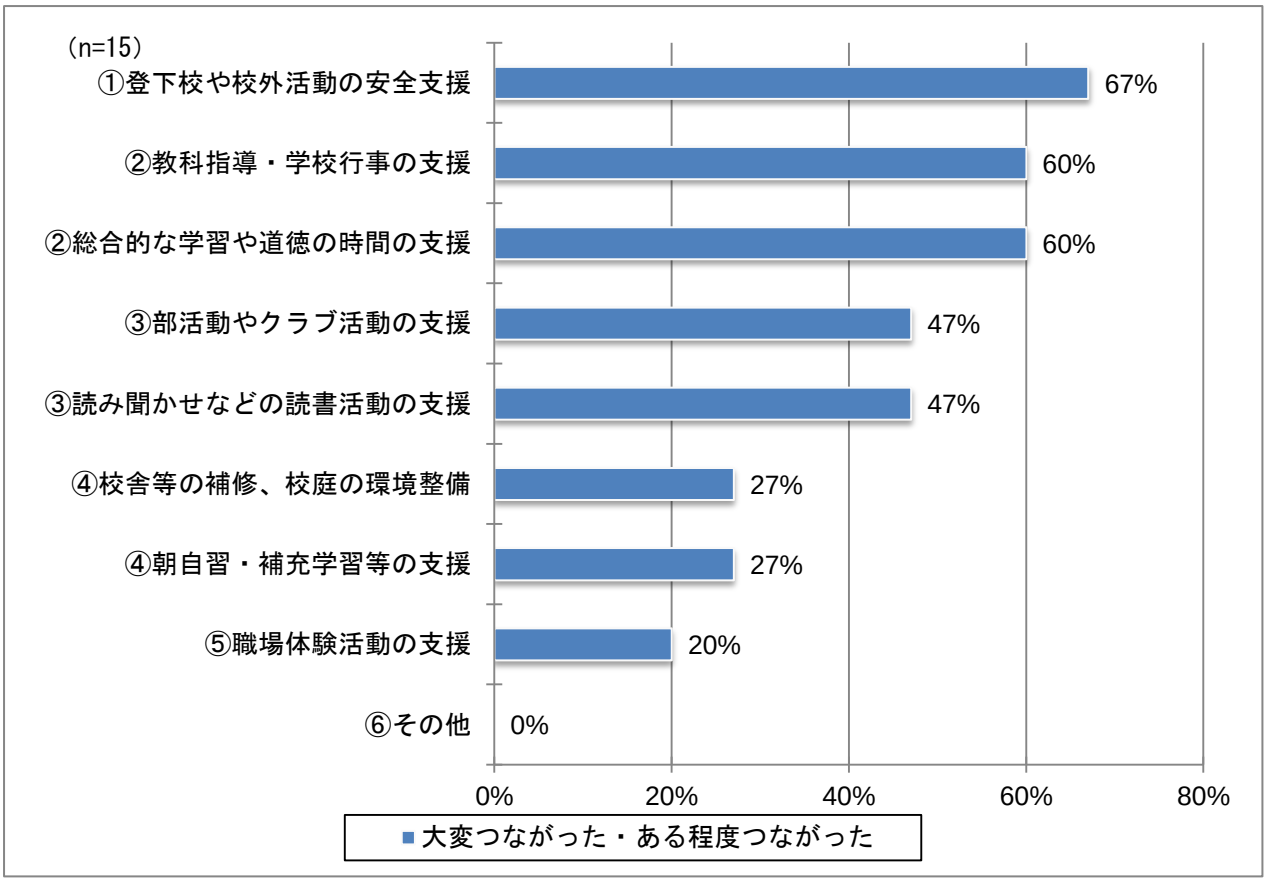


【図 2-17　地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、「教職員の業務の助けにつながった」と思うかの状況】

また、地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）して、「教職員の助けにつながった」取組の状況は、図 2-18 に示すとおりである。

図 2-17 で「大変つながった・ある程度つながった」と回答した教職員の回答を見ると、「登下校や校外活動の安全支援」が６７％で高く、次いで「教科指導・学校行事の支援」「総合的な学習や道徳の時間の支援」（６０％）、「部活動やクラブ活動の支援」「読み聞かせなどの読書活動の支援」（４７％）の順となっている。

「業務の助けにつながったと考えられる」事例等は、以下に示すとおりである。



【図 2-18　地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、「教職員の業務の助けにつながった」取組の状況】

＜「教職員の業務の助けにつながった」取組の具体的な事例等（自由記述から抜粋）＞

①【登下校や校外活動の安全支援】

・下校時に子どもたちへ交通指導を行ってもらうことにより、教職員は学級に残る（スクールバスを待ったりする子への対応等）子どもの指導を行うことができた。

・地震後に通学路の道路状況が悪かったので、登下校の見守りをしていただいたことで、児童のケガや事故を防ぐことができた。

②【教科指導・学校行事の支援】

・学習における専門的な指導ができた。（毛筆指導、米作り、太鼓の演奏指導等）

・南阿蘇村の復興にかかわっておられる方々との交流を通した防災教育。

②【総合的な学習や道徳の時間の支援】

・小学校３年生の総合的な学習の時間及び社会科の「防災マップ作り」では、地域ボランティアと一緒に地域探検をし、危険箇所を見つけ、地図作りも一緒に行った。

③【部活動やクラブ活動の支援】

・ものづくり部のロボットコンテストに向けて、地域の方も指導に来ていただいており、町をあげて、ロボットコンテストに取り組む雰囲気ができている。

・クラブ活動で琴の指導をしてもらった。

④【朝自習・補充学習等の支援】

・放課後や長期休業中に、学習会を開いて、生徒の学習活動を支援していただいた。

⑤【職場体験活動の支援】

・職場体験活動では、協力できる事業の開拓や紹介、連絡調整の業務の一部をしていただいた。

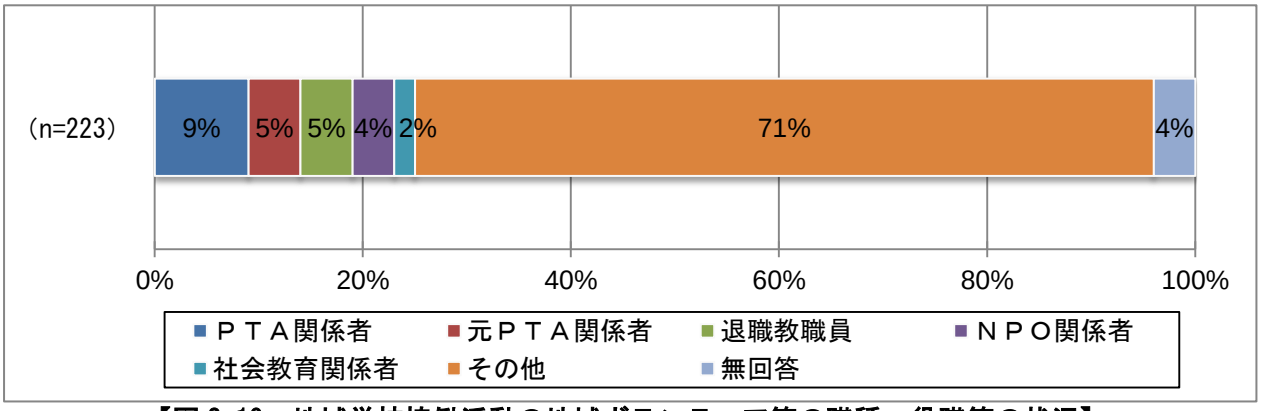
・キャリア教育に関する学習プログラムを、職員とともに計画立案し、当日も生徒への講話や指導など協力していただいた。

③　地域ボランティア等への効果に関する調査結果（地域ボランティア等を対象とした調査結果：Ｅ票）

学校支援活動を行う地域ボランティア（教科指導・学校行事の支援、読み聞かせ等の読書活動の支援、登下校や校外活動の安全支援、朝自習・補充学習等の支援等）、放課後子供教室の活動を支援する地域ボランティア（教育活動推進員、教育活動サポーター、その他地域の協力者等）、地域未来塾の活動を支援する地域ボランティア（学習支援員等）等の職種・役職等の状況は、図 2-19 に示すとおりである。

「その他」の関係者が７１％と多いが、その内訳を見てみると、「食生活改善推進員」、「老人会」、「校区住民」、「放課後子供教室支援員」、「栄養士」、「自営業」、「会社員」、「地域未来塾学習支援員」、「学校サポーター」、「非常勤講師」、「大学生」、「大学教授」、「民生委員児童委員」、「建築士」、「公務員退職者」、「団体職員」、「ダンス指導員」、「学校司書」、「婦人会」、「人権擁護委員」、「自治会区長」、「農業」、「塾講師」の２３職種（役職）である。

このことから、子どもたちは地域学校協働活動を行う中で、結果的に多様な職種・役職等の地域の方と交流していることがわかる。



【図 2-19　地域学校協働活動の地域ボランティア等の職種・役職等の状況】

図 2-20 は、学校を支援する地域ボランティア等の活動状況についての満足度の状況である。

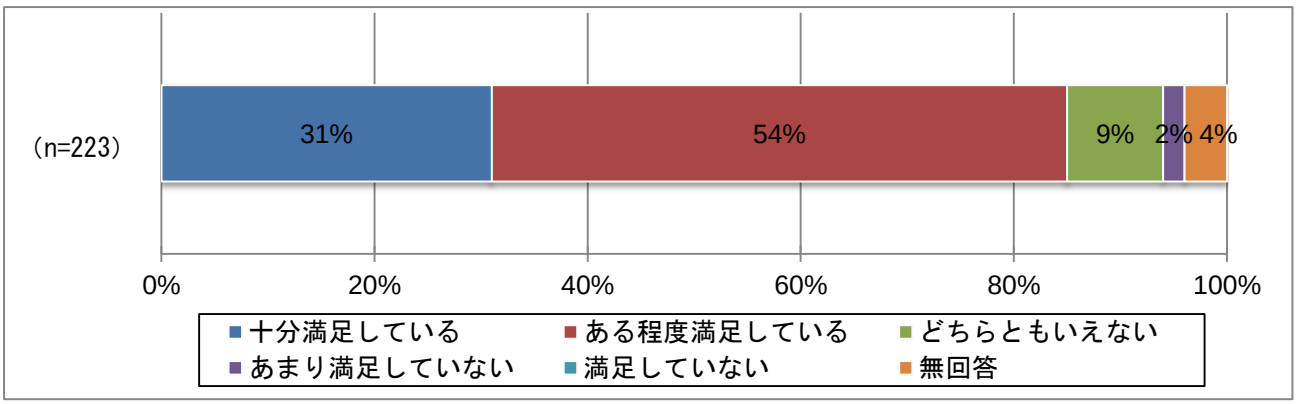
「ある程度満足している」が５４％、「十分満足している」が３１％となっており、８５％の地域ボランティア等が活動に満足していることがわかる。

また、地域ボランティア等の活動に参加して、「良かった」と感じることの状況は、図 2-21 に示すとおりである。

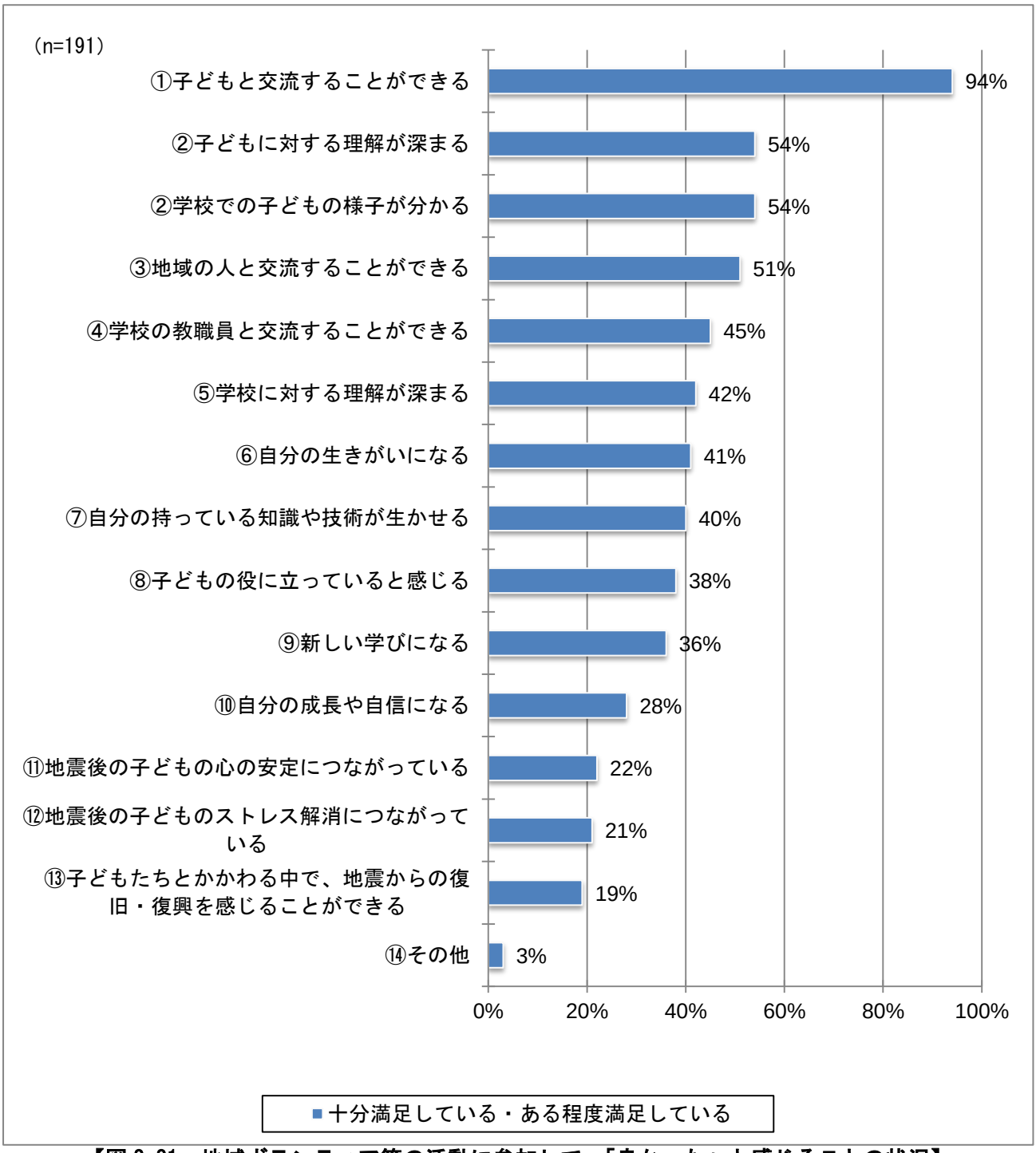
図 2-20 で「十分満足している・ある程度満足している」と回答した地域ボランティア等の回答を見ると、「子どもと交流することができる」が９４％で高く、次いで「子どもに対する理解が深まる」「学校での子どもの様子が分かる」（５４％）、「地域の人と交流することができる」（５１％）、「学校の教職員と交流することができる」（４５％）の順となっている。

このことから、地域ボランティア等は、「子どもと交流すること」はもちろんのこと、子どもと交流する活動の中で、同時に地域の方や学校の教職員と交流できることも良かったと感じていることがわかる。

また、子どもたちは地域学校協働活動を行う中で、子どもと交流することを好意的に感じている地域の方と接し、結果的にたくさんの愛情を注がれていることが考えられる。



【図 2-20　学校を支援する地域ボランティア等の活動への満足度の状況】

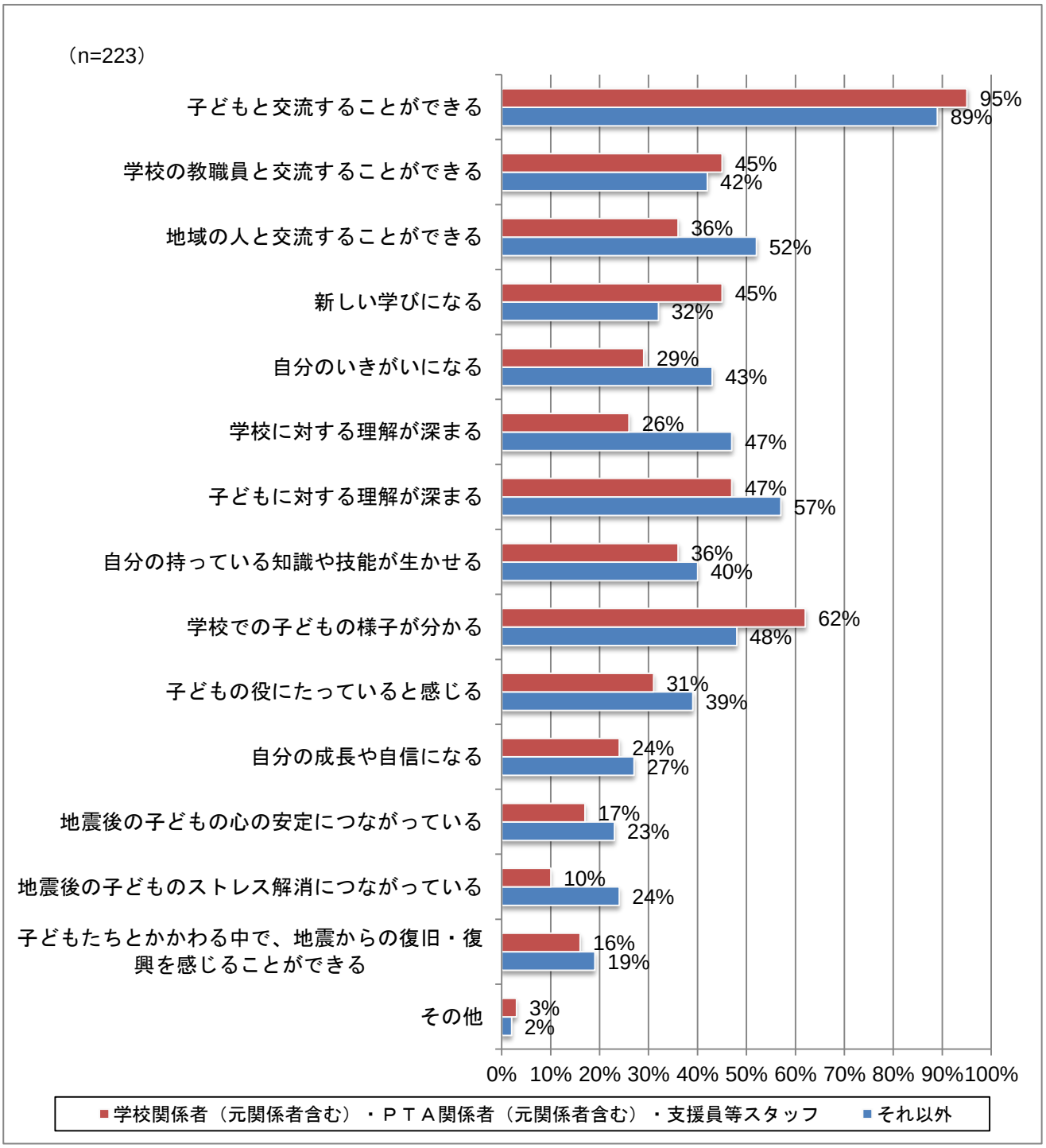


【図 2-21　地域ボランティア等の活動に参加して、「良かった」と感じることの状況】

“地域ボランティア等の職種・役職等”と“地域ボランティア等の活動に参加して「良かった」と感じることの状況”をクロス集計した結果は、図 2-22 に示すとおりである。

学校関係者等とそれ以外の方を比較すると、「地域の人と交流することができる」「自分の生きがいになる」「学校に対する理解が深まる」「子どもに対する理解が深まる」「地震後の子どものストレス解消につながっている」の項目で、学校関係者以外の方々の割合が学校関係者等の割合よりも１０％以上高くなっている。

学校にあまりなじみのない方々は、活動に参加することで、学校や子どものことを理解したり、地震後のストレス解消等、子どもの役に立てていることを実感できる機会となっていることが考えられる。また、地域ボランティア等の活動が地域の方との新たな交流の場にもつながっているものと思われる。



【図 2-22 ”地域ボランティア等の職種・役職等”と”地域ボランティア等の活動に参加して、「良かった」と感じることの状況“をクロス集計した結果】

④　地域全体への効果に関する調査結果（推進員を対象とした調査結果：Ｂ票）

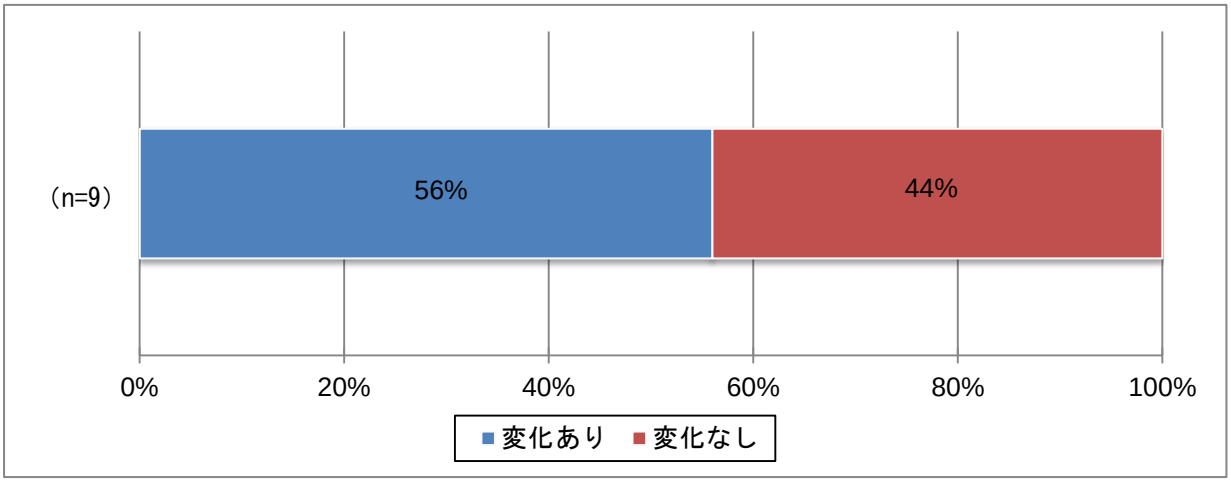
図 2-23 は、地震後の現在、地震発生以前と比べて、地域学校協働活動に取り組む地域の方（推進員自身、ボランティア等、保護者等）や地域の様子に変化は見受けられたかの状況である。

「変化あり」が５６％、「変化なし」が４４％となっており、「変化あり」の回答が「変化なし」の回答をわずかに上回っていることがわかる。

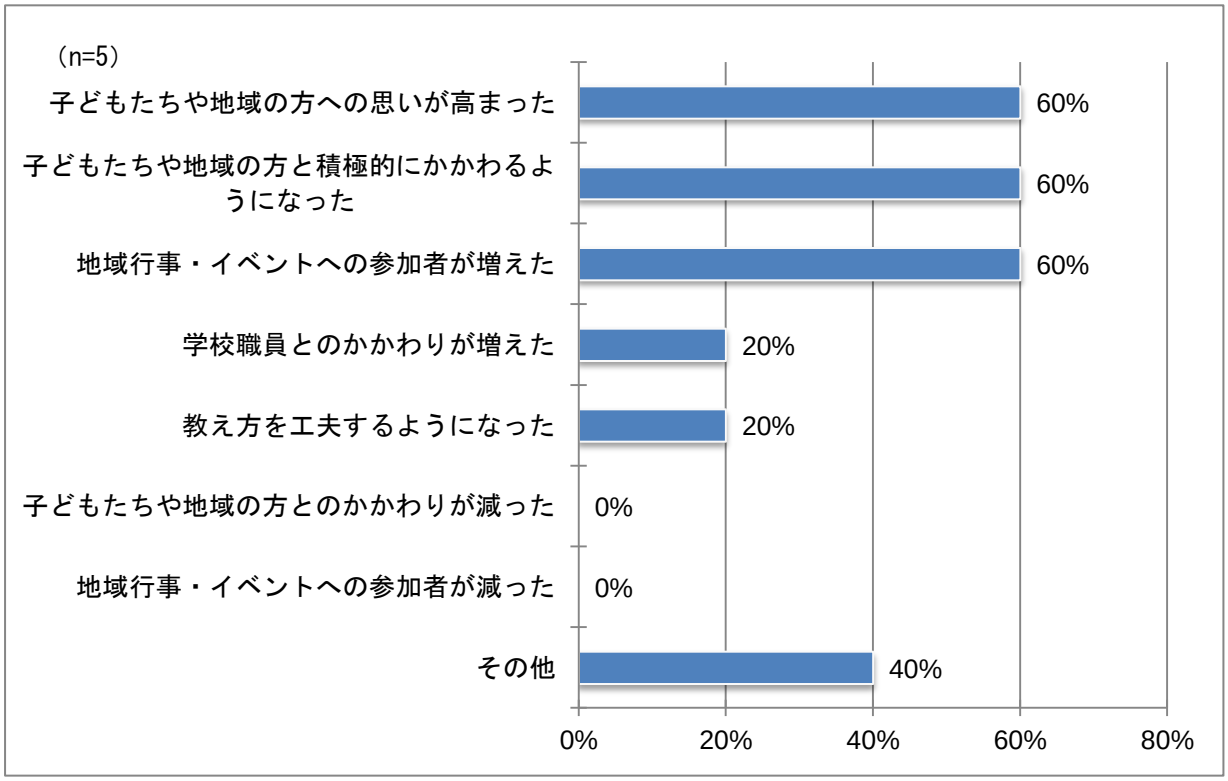
また、地域学校協働活動に取り組む地域の方や地域の様子に変化が見受けられた状況は、図 2-24 に示すとおりである。

「子どもたちや地域の方への思いが高まった」「子どもたちや地域の方と積極的にかかわるようになった」「地域行事・イベントへの参加者が増えた」が６０％で高く、次いで「その他」（４０％）の順となっている。

その他の項目では、「地域でのお互いの声かけが多くなった」や「地域の方から子どもたちの様子や、子どもとどうかかわっていったら良いかという質問が出された」等の記述が見られた。



【図 2-23　地震後の現在、地震発生以前と比べて、地域学校協働活動に取り組む地域の方や地域の様子に変化は見受けられたかの状況】



【図 2-24　地震後の現在、地震発生以前と比べて、地域学校協働活動に取り組む地域の方や地域の様子に変化が見受けられた状況】

保護者や地域の様子の変化については、アンケート調査とは別に、推進員４人を対象に直接聞き取り調査を行ったが、その結果は、以下に示すとおりである。

＜地震後の現在、地震発生以前と比べた地域学校協働活動に取り組む保護者や地域の様子の変化（一部抜粋）＞

【保護者の様子の変化】

・現在では、保護者が好意的な話をしてくれたり、保護者の方から子供教室を手伝う人が出てきた。子どもたちのことを現役で育てている方々なので、私は以前から子供教室にかかわってほしいと思っていた。

・保護者同士で誘い合い、ボランティアに来ていただいたことがある。保護者に入っていただけると、いろいろな考えや示唆を与えていただけるので子供教室の活動にとって強みになる。

・ＰＴＡの主催行事であるフェスタに来られる保護者が、様々な体験活動ブースを参観するだけでなく、以前と比べ、いろいろな活動を地域の方と一緒に体験するようになった。

・小学校１～２年生では帰りに保護者のお迎えがあるが、その時間は、丸付けボランティアに来ていただいている時間なので、その様子を参観する保護者が多い。以前は「何をしているんですか？」程度の反応だったが、最近では、「毎回、このような支援をしてもらえると本当にうれしいですね」と、温かい反応が返ってくるようになった。

【地域の様子の変化】

・七夕等の地域の行事等で、子どもたちと地域の方が一緒に触れ合っている。また、各地域には地域サロンがあり、そこに子どもたちを招いて、交流活動が行われている。これらの活動は地震後特に、地域の方が積極的に子どもたちを招くようになった。また、地震後は、地域の方の子どもたちを見守る目が変わってきたように感じている。大人たちも傷ついているが、子どもたちとかかわりたいという地域の方が増えてきたように感じている。

⑤　推進員の存在がもたらした効果に関する調査結果

ア　学校を対象とした調査結果から（Ｃ票）

ボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組の中で、「推進員の存在がもたらした効果」についての学校の具体的な事例等の記述は、以下のとおりである。

＜ボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組の中で、「推進員の存在がもたらした効果」の具体的な事例等（自由記述を全て記載）＞

【学校とボランティアとの連携調整】

・子どもたちの豊かな体験活動を支える地域ボランティアの方々と知り合うことができ、本校の教育活動全般にもゲストティーチャーとして、学習の支援をしていただけるようになった。

【学校のニーズに合うボランティアとのマッチング】

・学校側のニーズと地域の人材をうまくつないでくれる地域コーディネーターの存在は双方にとってとても大きい。

・授業の内容や目的を確実にボランティアに伝えていただいた。

【ボランティア等と連携・協働した授業づくりのアドバイス】

・授業づくりの相談役となってくれた。

【取組実施による児童生徒の学習意欲の高まりや学力向上】

・学校と地域が協力して授業を行うことが生徒の安心感につながるとともに、生徒が多様な学習の機会を得ることで、学ぶ意欲の向上につながっている。

・コーディネーターの働きで、生徒たちが学習に対する意欲が高まった。

【放課後の教職員の業務の助け】

・コーディネーターが放課後子供教室の運営をしてくださっているので安心してまかせることができている。

イ　地域ボランティア等を対象とした調査結果から（Ｅ票）

地域ボランティア等の活動を行う中で、「推進員の存在がもたらした効果」についての地域ボランティア等の具体的な記述は、以下のとおりである。

＜地域ボランティア等の活動を行う中で、「推進員がおられて良かったこと」の具体的な事例等（自由記述を一部抜粋）＞

【学校、教育委員会、地域等の関係者との連絡・調整】

・学校と地域の方の懸け橋となっていただき、大変ありがたく思います。

・先生に直接言ったり伺うことには少し抵抗があるため、コーディネーターがいると話しやすい。

・急に休まなければならない時の連絡の拠点となり、先生方の連絡を取りまとめる役割をしていただいた。

・何か役に立てる事があればと思っている気持ちを現実の場面で生かせるようにつないでいただいた。

【地域学校協働活動を通した地域貢献への意欲喚起】

・村内の子どもたちのために、役立つことを一生懸命やっていただいていると思います。私も少しでもお役に立てれば幸いです。

【ボランティアへの助言：プログラム作成及び子どもたちとのかかわり等】

・子どもたちへの指導も優しくもきちんとしてくださるので、その分の負担もなく、スムーズに学習支援ができます。

・まとめ役になってもらい、子どもたちのつながりが良くなると思います。不安、悩み、子どもたちへの対応の仕方等を相談することができる。

・経験が浅いので、ある程度の計画と助言をもらえます。

【活動中の子どもたちへの適切な指導や声かけ】

・長年教員をされておられた方なので、（中略）指導面でも長年の経験がおありなので、生徒たちのためになる指導ができていると思います。

【活動中のボランティアへの配慮や気配り】

・学習支援員一人一人に対していつも柔軟に対応してくださり、子どもたちへ影響のないようにしてくださるのでとても助かっています。

【活動を円滑に実施するための適正な事務処理】

・活動に一貫性が生まれ、事前準備等をよくしてもらうので、活動がスムーズにいく。

・活動日程や内容等に関して、いつも早めのご連絡をいただき、ありがとうございます。飲み物等も用意されていたり、細かいところにまでのご配慮、本当にありがたく思っております。また、教材等のプリントコピーも毎回大量ながらご準備していただき、とても助かっております。ありがとうございます。

ウ　推進員への聞き取り調査結果から

地震後の地域学校協働活動を行う上で、推進員として行ってきたことについて、４人を対象に聞き取り調査を行ったが、その結果は、以下に示すとおりである。

＜地震後の地域学校協働活動を行う上で、推進員として行ってきたこと（一部抜粋）＞

【地震直後】

○避難所や子ども・ボランティア宅への訪問活動、避難所内での活動や避難所との交流活動

・地震後は、学校、行政、地域の方が被災されており、放課後子供教室の活動がすぐにできるという状況ではなかった。私も同僚の地域コーディネーターも被災者の一人で、再建に向けて頑張っているところだった。ただ、子どもたちとかかわりたいという思いから、地域の子どもたちのところを回った。

・私は家が半壊で危険な地域だったこともあり、体育館に避難していた。避難所には放課後子供教室の子どももいて、たまたま子供教室のスタッフだった役場職員が避難所運営に携わっており、スタッフで子どもたちに声をかけあった。また、避難していたところが、旧役場のすぐ近くだったこともあり、子供教室の道具等を持ってきて、避難所の一角に子どもコーナーを作った。

・最初は子どものことが心配だったが子どもたちが全員無事だということがわかり、次は１００人のボランティアさんのことが心配になり、学校再開後１ヶ月ぐらいかけてボランティアの家を全部まわった。でも、会えたのは４割ぐらいだったが、「あなたが来てくれてうれしかった」と言ってくださる方がたくさんいて、「早く学校にいきたい、昔みたいな気持ちになりたい」というボランティアの声も聞かれた。

・小学校に中学校と保育所が同居して学校生活が再開したが、５月半ばくらいまでは私自身が手つかずで、推進員として何をしていいか分からない状況だった。いつからか、ボランティアから「いつから始まるんですか」等の声が聞かれるようになり、１年生の先生と相談して１年生の朝顔植えの活動を行うこととした。ボランティアは隣接する体育館に避難されている方に呼びかけたが、初めてボランティアに参加する方も含め十数人の方に来ていただいた。以前からボランティア活動に参加していた方が避難所で周りの方を誘われたとのことだった。

・避難所が閉鎖される前に、５～６年生の子どもたちがボランティアに来ていただいた方を招いて交流会を行ったが、子どもたちの歌や感謝の言葉を聞いて、ボランティアの方は涙を流されていた。

【活動再開に向けて】

○研修参加や学校への聞き取りの実施

・活動再開前に「心のケア研修会」や「防災教室」に放課後子供教室のスタッフ全員で参加した。今も、その時学んだことがかなり役に立っている。

・学校評議員をしており、学校に子どもたちの体や心の状態を聞く機会をもった。

・放課後子供教室が再開した後に、余震等があった場合には、どこにどのように避難したらいいか等、不測の事態での対応について学校の校長先生と話し合いを行った。

【活動を再開して、留意したこと】

①ボランティアに関すること

○ボランティア募集の仕方

・２学期になり、丸付けボランティアから始めてみることとなり、丸付けボランティアの方の家を個別に回ったり、電話をかけたりしてボランティアをできる方を募った。その際には、「家庭を最優先にして、絶対に無理をしないでください、余力がある時だけお手伝いください」ということを伝えた。仮設住宅や地震後に違う地域に転居した方も含め、２０人近くが集まった。

・ミシン学習の時は避難所が閉鎖された後で、そこからようやくボランティアに電話をかけたり、町内の大規模仮設住宅２か所にも直接通って、声をかけるようになった。ボランティアの方がいつも「来る場所があって良かった」とおっしゃられており、特に高齢の方は、仮設の中で１日中外に出られないこともあるので、なるべく電話でお声かけをするようにした。

○地震後の子どもたちの様子等に関する打合せの実施

・活動前には、ボランティアの方に子どもたちの現在の様子を必ず伝えるようにした。子どもたちとの心の触れ合いを充実させるために、地震前よりも念入りに行った。

・ボランティアをお願いする時はなるべく時間をとって、直接会うようにした。地震前よりも打合せの時間を長くとるように気をつけている。

・事前の打合せの際に、スクールカウンセラーに入ってもらい、震災後の子どもたちの様子やかかわり方、子どもの心の状態について研修を行った。また、ボランティアの方が頑張りすぎないように、「できるときにできるだけでお願いします」を合言葉として伝えるようにした。

○ボランティアへのいたわりや心配り

・ボランティアに対しては、礼をつくすしかないと思っている。ボランティアが来られた時は、玄関までお出迎えをして、特に地震後は、学校内にボランティアのためのサロンを確保した。休憩の時に、自分たちでくつろげるようにお茶やコーヒーを準備した。

②子どもに関すること

○地震後の子どもたちと活動するにあたって心掛けたこと

・人生で２度あるかわからないような怖い思いをしているので、「とにかく楽しんでほしい」との思いが強かった。放課後子供教室の時間だけでも思いっきり遊んで、はめをはずしてもいいと思っていた。でも、実際、始めるにあたっては、地震ごっこをしたり、パニックになったりする子どもがいたらどうしようかと私自身とても不安だった。ただ、子どもたちからは不思議なことにそのような光景は見受けられなかった。子どもたちに救われた感じだった。

・子どもたちにとっては小さい時の出来事で、子どもたちの心の中はどういう思いなんだろうと思っていた。スタッフ同士では、「子どもたちにとっての『心のケアチーム』としてやっていかねばならない！」「私たちは笑顔を見せる、届けるチームにしよう！」と意識して、活動始めには必ず子どもたちに「心と体の具合はどう？」と声かけするようにした。

○活動中の子どもたちへの配慮

・活動中、自分からは地震のことを話さないようにした。また、子どもから、地震の話があった場合には、何よりも平常心で受けとめることを心掛けた。

・活動後は、子どもたちがボランティアの方へのお礼の手紙を書いているが、手紙を書く前には各ボランティアの方々が地震後の大変な状況の中にも、わざわざボランティアに来ていただいていることなどを子どもたちに詳しく話す等、書き方に気をつけるよう声かけしている。

○活動で新たに取り入れたこと

・以前は工作等、達成感を味わえる、家に持ち帰ることのできるプログラムが多かったが、今は体を使って思いっきりできるドッジボール等が多くなり、プログラムの傾向が以前と変わってきたように思う。

・村内外を問わず新たなボランティアの方からの活動協力が多くなり、「心のケア」や「心の平穏」をねらって、マスコットづくりや音楽活動、読み聞かせ等を行った。

・今年度は防災教育を取り組んだ学年があり、まずは老人会に「一緒に危険箇所チェックをしませんか？」と電話をして、２０数人に来ていただいた。１週間後には、危険箇所チェックをもとに防災マップづくりにも一緒に取り組んだ。

③学校に関すること

○学校の職員との連携

・担任の先生と意見交換をすることが多くなった。また、子どもたちは、学校で放課後子供教室のことをよく話しており、担任の先生からも子供教室での子どもの様子を聞くことも多い。

・私がかかわる学校では、校長先生が教室に訪れたり、教頭先生が活動に加わったりしている。学校の先生方も活動に協力的で、地震後はその傾向が強くなったと感じている。

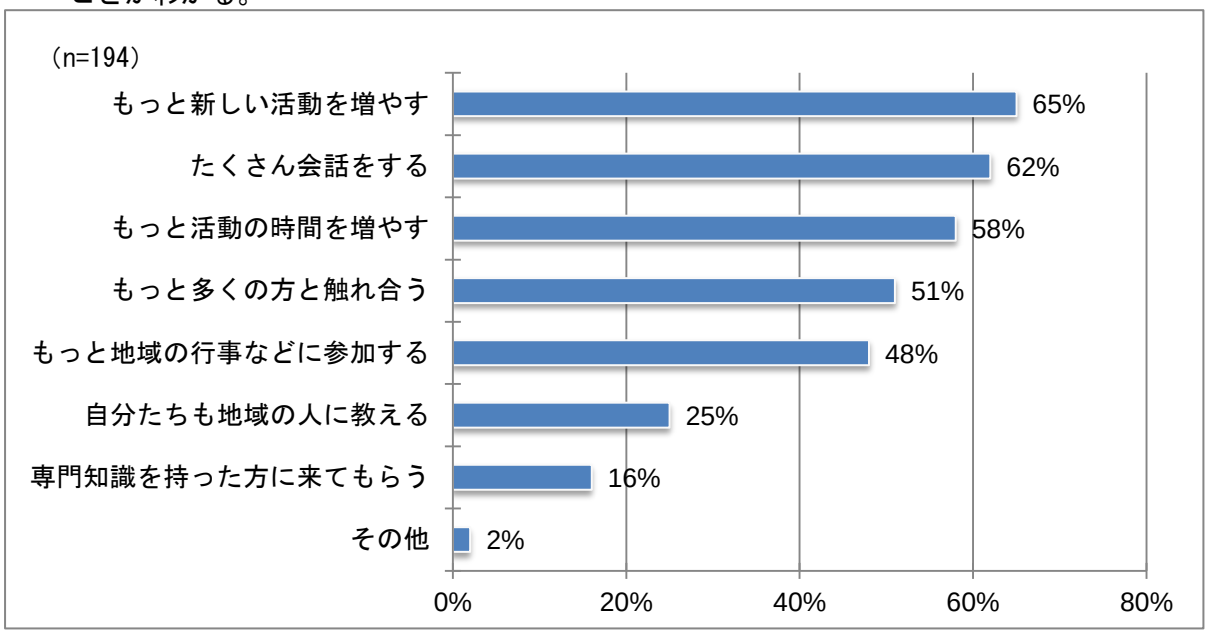
⑥　今後の地域学校協働活動の充実に関する調査結果

ア　児童生徒を対象とした調査結果から（Ｆ票、Ｇ票、Ｈ票）

地域の方との学習（活動）をもっと良くするには、どうすればいいと思うかの児童生徒の回答状況は、図 2-25 に示すとおりである。

「もっと新しい活動を増やす」が６５％と高く、「たくさん会話する」（６２％）、「もっと活動の時間を増やす」（５８％）、「もっと多くの方と触れ合う」（５１％）の順となっている。

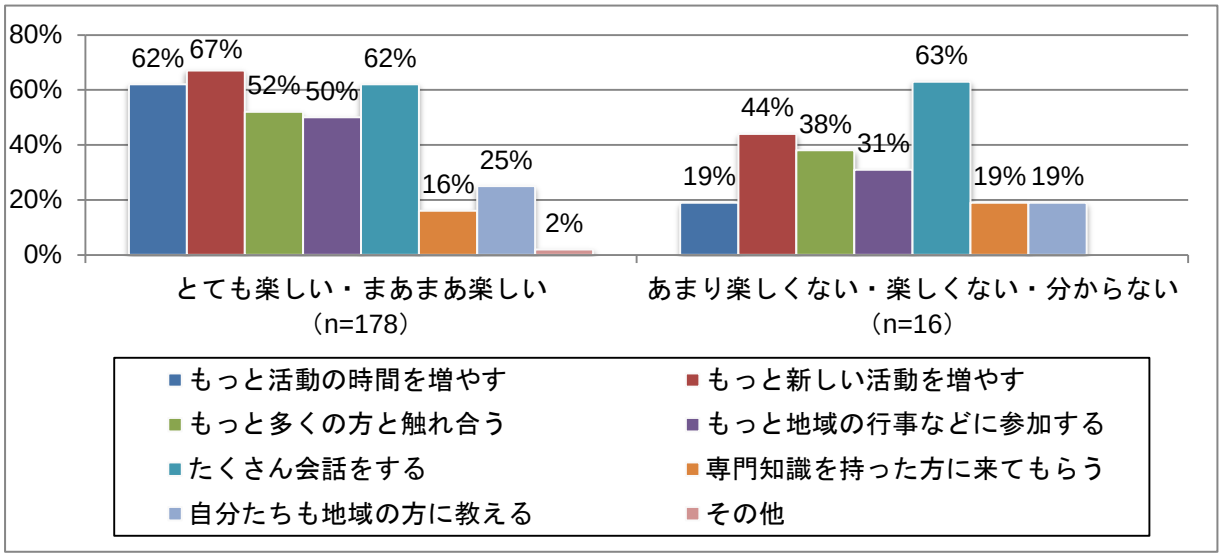
結果から、児童生徒が新たな活動との出会いや新たな地域の方とのかかわりを望んでいることがわかる。



【図 2-25　地域の方との学習（活動）をもっと良くするにはどうすればいいかの回答状況】

また、Ｆ票で、“楽しさの状況”と“学習（活動）をもっと良くするにはどうすればいいか”をクロス集計した結果は、図 2-26 に示すとおりである。

不足している事項では、「とても楽しい・まあまあ楽しい」と回答した児童生徒では、「たくさん会話をする」が６２％で高く、「あまり楽しくない・楽しくない・分からない」と回答した児童生徒においても、６３％と高い。逆に「専門知識を持った方に来てもらう」は１６％及び１９％と双方で低くなっている。

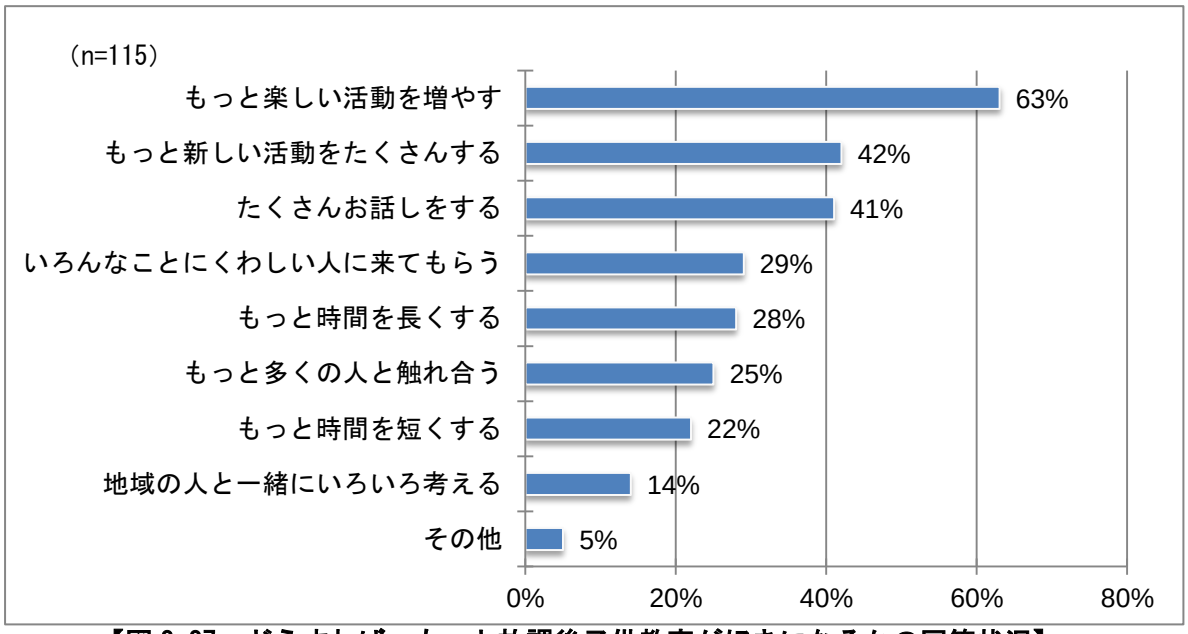


【図 2-26　“楽しさの状況”と“学習（活動）をもっと良くするにはどうすればいいか”をクロス集計した結果（Ｆ票）】

どうすれば、もっと放課後子供教室が好きになるかの児童の回答状況は、図 2-27 に示すとおりである。

「もっと楽しい活動を増やす」が６３％で最も高く、次いで「もっと新しい活動をたくさんする」（４２％）、「たくさんお話しをする」（４１％）の順となっている。

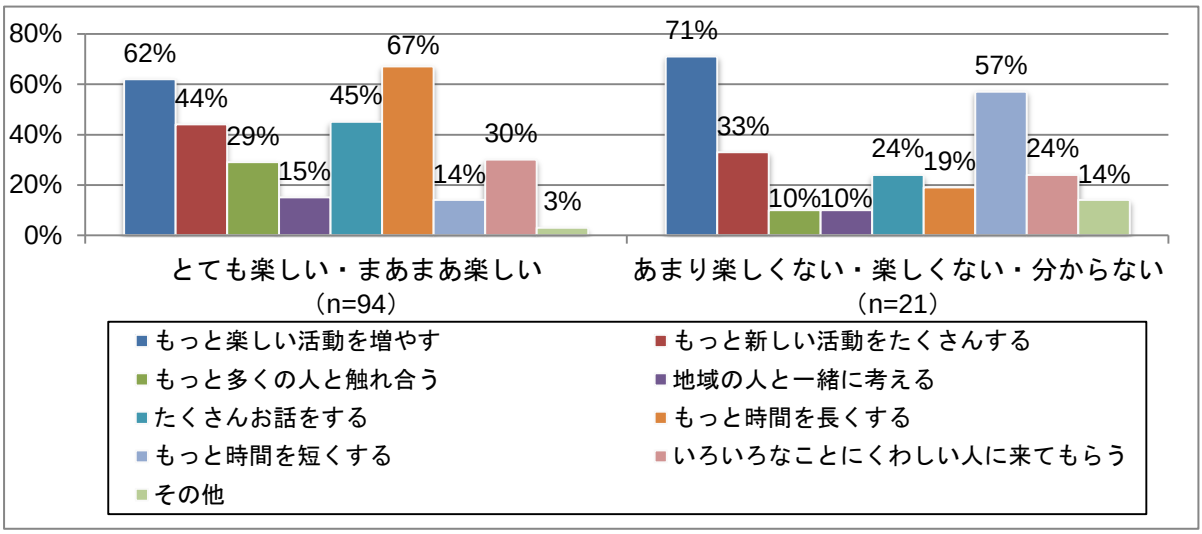
結果から、楽しい活動（新たな活動）との出会いや地域の方とのかかわりを望んでいる児童が多いことがわかる。



【図 2-27　どうすれば、もっと放課後子供教室が好きになるかの回答状況】

また、Ｇ票で、“楽しさの状況”と“どうすれば、もっと放課後子供教室が好きになりますか”をクロス集計した結果は、図 2-28 に示すとおりである。

不足している事項では、「とても楽しい・まあまあ楽しい」と回答した児童では、「もっと時間を長くする」（６７％）、「もっと楽しい活動を増やす」（６２％）で高く、「あまり楽しくない･楽しくない･分からない」と回答した児童では､「もっと楽しい活動を増やす」（７１％）、「もっと時間を短くする」（５７％）の順となっている。ただ、「もっと時間を長くする」と「もっと時間を短くする」は双方での見解に相違があるため、「もっと楽しい活動を増やす」が不足している事項と考えられる。逆に「地域の人と一緒に考える」は１５％及び１０％と双方で低くなっている。

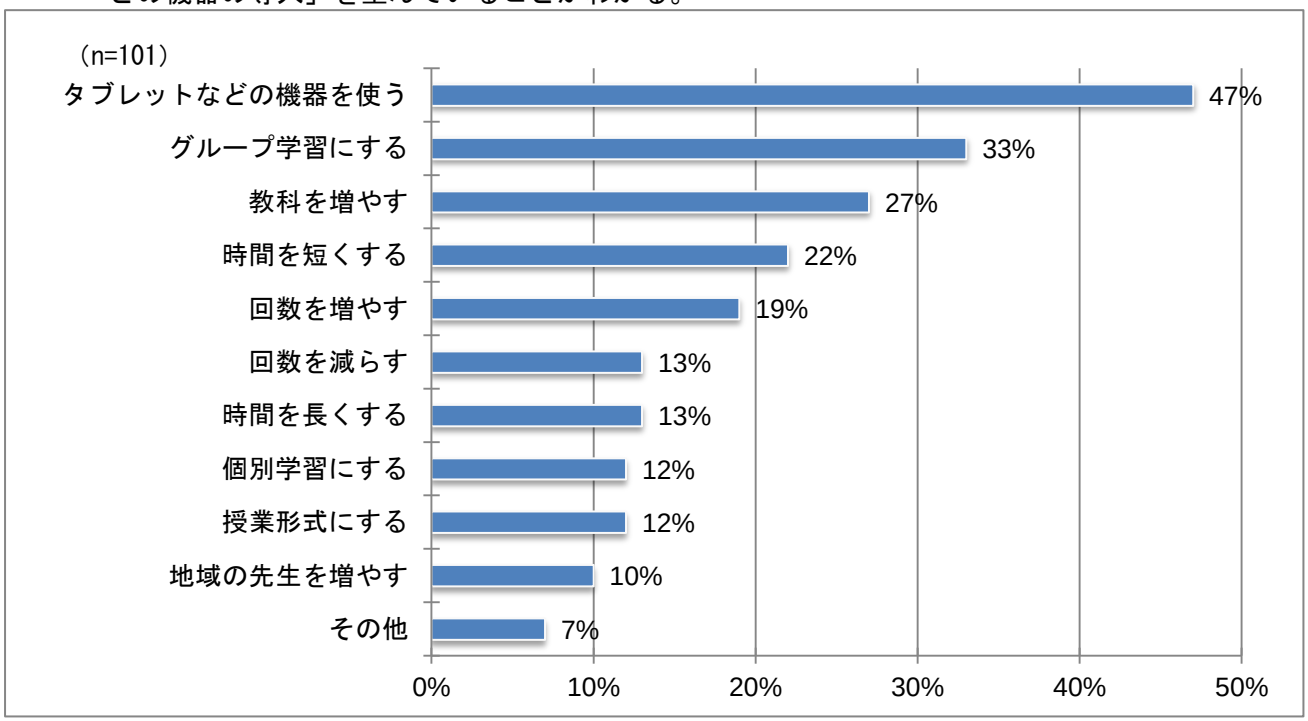


【図 2-28 “楽しさの状況”と“どうすれば、もっと放課後子供教室が好きになるか”をクロス集計した結果（Ｇ票）】

地域未来塾をもっと良くするには、どうすればよいと思うかの生徒の回答状況は図 2-29 に示すとおりである。

「タブレットなどの機器を使う」が４７％で最も高く、次いで「グループ学習にする」（３３％）、「教科を増やす」（２７％）の順となっている。

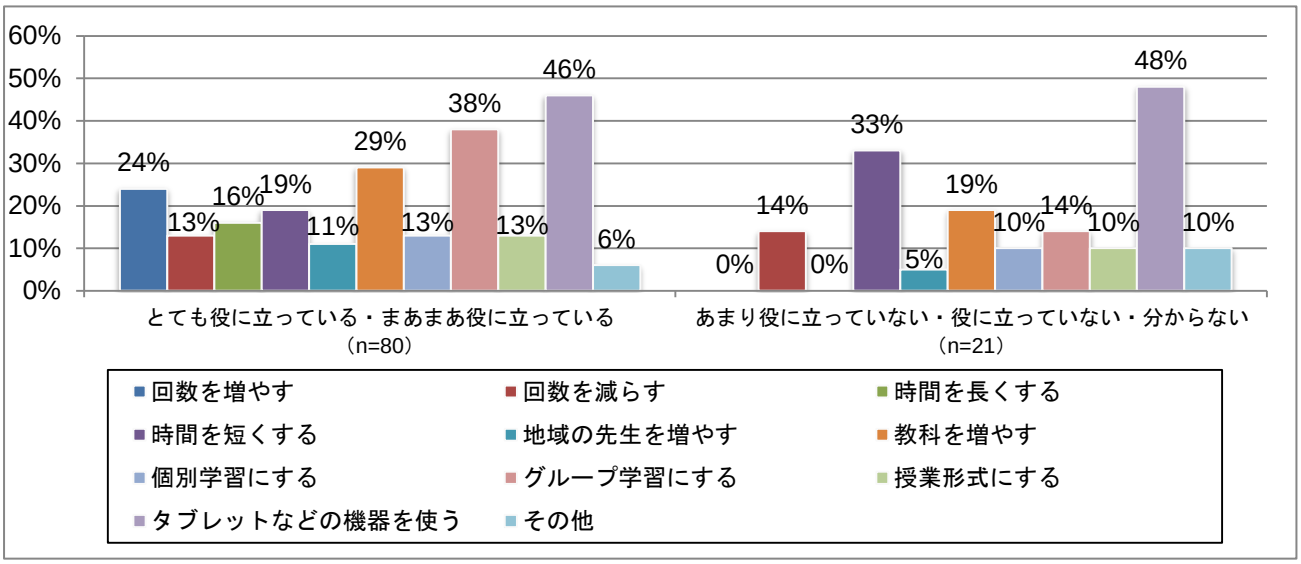
結果から、回答した生徒の約半数が、学習内容定着のためのツールとして、「タブレットなどの機器の導入」を望んでいることがわかる。



【図 2-29　地域未来塾をもっと良くするには、どうすればよいかの生徒の回答状況】

また、H票で、“有用感の状況”と“地域未来塾をもっと良くするには、どうすれば良いか”をクロス集計した結果は、図 2-30 に示すとおりである。

不足している事項では、「とても役に立っている・まあまあ役に立っている」と回答した生徒では、「タブレットなどの機器を使う」が４６％で高く、「あまり役に立っていない・役に立ってない・分からない」と回答した生徒においても、４８％と高い。逆に「地域の先生を増やす」は１１％及び５％と双方で低くなっている。



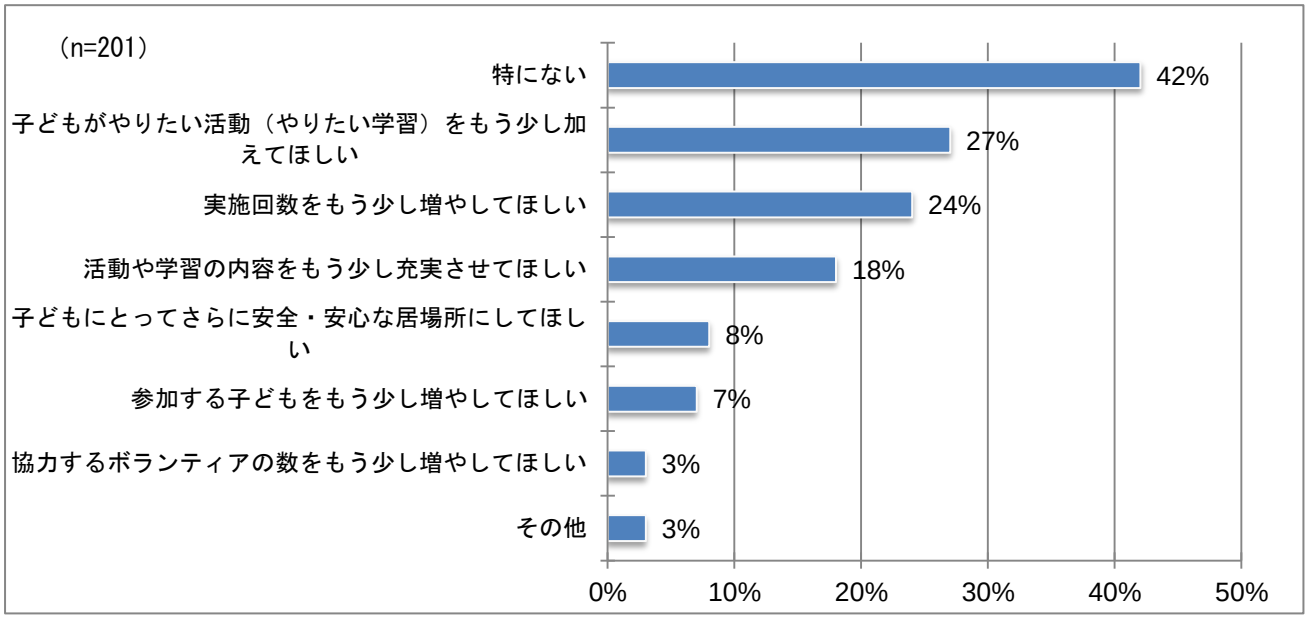
【図 2-30 “有用感の状況”と“地域未来塾をもっと良くするには、どうすればよいか”をクロス集計した結果（H票）

イ　保護者を対象とした調査結果から（Ｄ票）

放課後子供教室及び地域未来塾について、「こうすればもっと良くなる」と思うことへの保護者の回答状況は、図 2-31 に示すとおりである。

「特にない」が４２％で最も高く、次いで「子どもがやりたい活動（やりたい学習）をもう少し加えてほしい」（２７％）の順となっている。

結果から、回答した保護者の約４割が現状の放課後子供教室及び地域未来塾の活動に満足しているものと思われる。



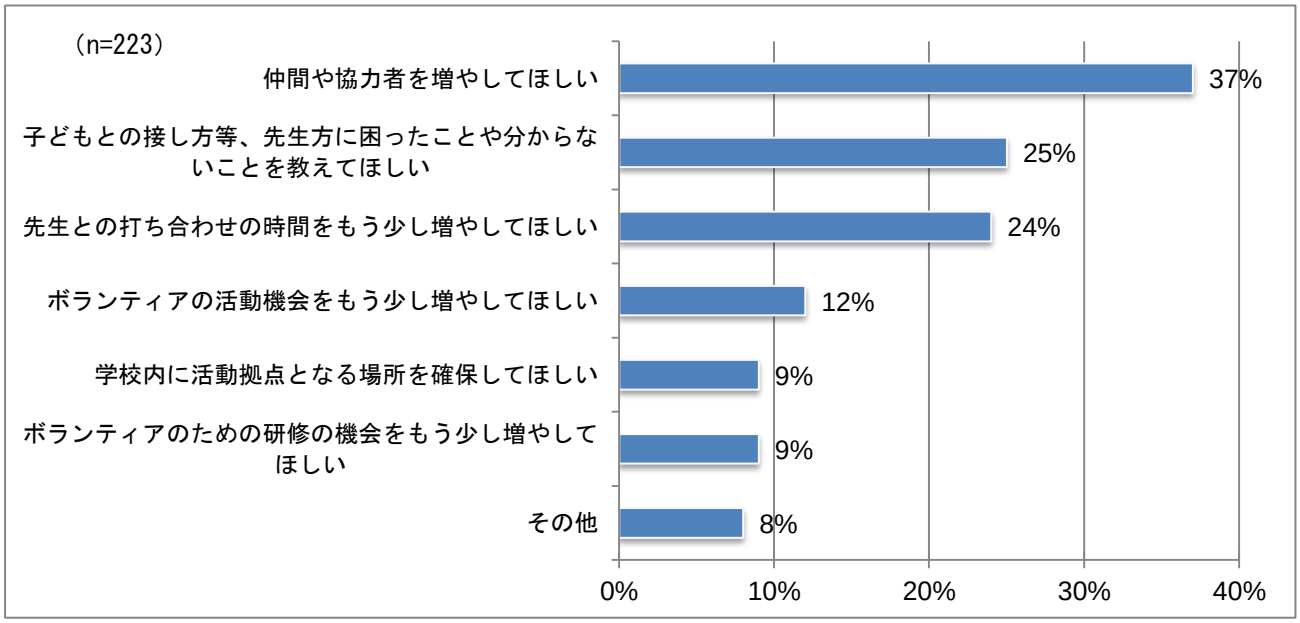
【図 2-31　放課後子供教室及び地域未来塾の活動について、「こうすればもっと良くなる」と思うことへの保護者の回答状況】

ウ　地域ボランティア等を対象とした調査結果から（Ｅ票）

地域ボランティア等の活動を行う中で、「こうすればもっと良くなる」と思うことへの地域ボランティア等の回答状況は、図 2-32 に示すとおりである。

「仲間や協力者を増やしてほしい」が３７％で最も高く、次いで「子どもとの接し方等、先生方に困ったことや分からないことを教えてほしい」（２５％）の順となっている。

結果から、回答した地域ボランティア等の約４割が、共に活動する仲間の存在を欲していることがわかる。



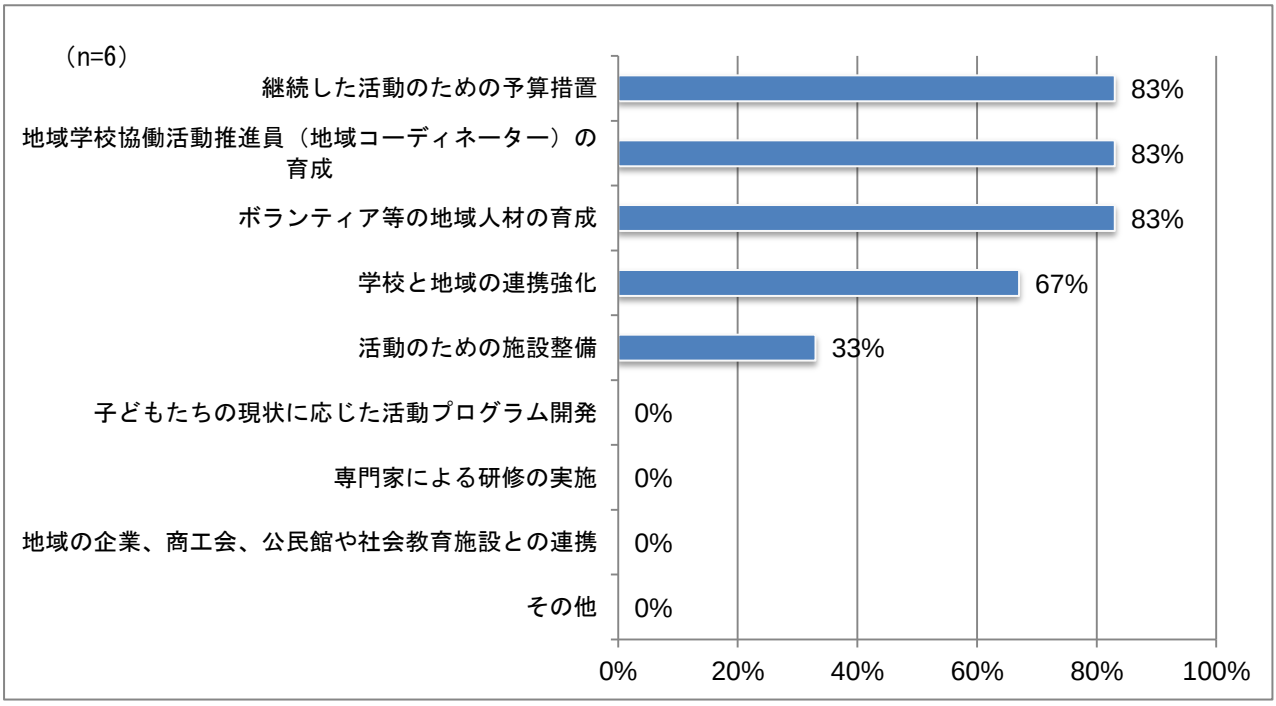
【図 2-32　地域ボランティア等の活動を行う中で、「こうすればもっと良くなる」と思うことへの地域ボランティア等の回答状況】

エ　教育委員会を対象とした調査結果から（Ａ票）

今後、子どもたちの心の安定や学習意欲の向上のために、中長期的にどのような取組が必要になるかの教育委員会担当者の回答状況は、図 2-33 のとおりである。

「継続した活動のための予算措置」「地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）の育成」「ボランティア等の地域人材の育成」が８３％で高く、次いで「学校と地域の連携強化」（６７％）となっている。

結果から、各教育委員会がそれぞれ、多様な活動を継続的に推進していくために、コーディネート機能や活動をサポートする人材育成を強化しようとしていることがわかる。



【図 2-33　今後、子どもたちの心の安定や学習意欲の向上のために、中長期的にどのような取組が必要になると思うかの教育委員会担当者の回答状況】

オ　推進員を対象とした調査結果から（聞き取り調査）

今後の地域学校協働活動のさらなる充実に向けて必要だと感じていることの推進員への聞き取り調査結果は、以下に示すとおりである。

結果から、推進員が「地域・学校等のネットワーク形成」や「ボランティアの方々との良好な関係づくり」等、関係者との連携を一層強めていくことが必要だと感じていることがわかる。

＜今後の地域学校協働活動のさらなる充実に向けて、必要だと感じていること（一部抜粋）＞

【地域・学校とのネットワーク形成】

・地域の方にもっと広くかかわってもらいたいという思いがあるので、そのために、自分の人脈を増やして、更なるネットワークを構築したい。

・地域と学校とコーディネーター三者の更なるネットワークの構築が必要だと思う。

・どの教科どの単元で地域ボランティアの方を活用すると学習効果が高まるか、学校の地域連携担当と検討し、地域のボランティア等を活用した授業の年間計画の作成に着手したい。

【ボランティアの方々との良好な関係づくり】

・時間をとってきていただいたボランティアの方をしっかりと大事にしていく。ボランティアが来られた時は、玄関までお出迎えをして、お茶を出す。帰られる時には、お見送りをする。こうしたちょっとした感謝の気持ちを日々ボランティアに表現することを積み重ねていくことが次の地域学校協働活動の充実につながると思っている。

（２）調査結果の考察

①　成果

ア　成果１：地震後の地域学校協働活動実施が子どもや学校にもたらした効果

地震後の地域学校協働活動の実施は、子どもや学校（教職員）に、様々な効果をもたらした。

○　子どもへの効果

子どもたちは、学校支援活動、放課後子供教室、地域未来塾等の地域学校協働活動について、楽しさや有用感を感じていた。また、地震前から住んでいた家から登校する児童生徒に比べ、仮設住宅など地震前から住んでいた家以外から登校する児童生徒の方が楽しさや有用感を強く感じていることが明らかとなった。不安定な居住環境の中においても、子どもたちが地域学校協働活動でこれまで経験したことのない多様な体験や学習をいろいろな友達と学び合うことで、体験することや学ぶことそのものの楽しさを実感しているものと考える。

また、子どもたちは、地域の多くの関係者とかかわりを持ち、優しく接したり、ほめたり、分かりやすく教えたりなど、地域の方からたくさんの愛情を注がれることで、学習や活動意欲が高まり、自己肯定感など豊かな心が育まれたものと考える。

このような活動を継続して行っていく中で、子どもたちのコミュニケーション力、地域への理解や関心及び地域への安心感や信頼感の高まり等につながったものと考える。

○　学校（教職員）への効果

地震後、児童生徒への心のケア、安全な学習環境の確保、転出等に伴う事務手続き、避難所となっている学校施設への対応が課せられている状況において、主に「登下校や校外活動の安全支援」、「教科指導・学校行事の支援」、「総合的な学習の時間や道徳の時間の支援」、「朝自習・補充学習等の支援」等の地域学校協働活動が教職員の業務の助けにつながったことがわかる。

学校への調査結果の中にも、「校舎修復工事のため、校区を離れ、不慣れな中学校での生活を余儀なくされたが、小学校からゲストティーチャーとして中学校での学習に協力してくださったことで、地域とのつながりを保つためにも有効であった」や「地震後に通学路の道路状況が悪かったので、登下校の見守りをしていただいたことで児童のケガや事故を防ぐことができた」などの記述があり、地域学校協働活動の実施が教職員の業務の強力な手助けとなったことを裏付けている。

なお、これらの支援は、震災前から学校にかかわっていた関係者だからこそ、さらに、関係者との間に絆があったからこそ、実動も早く、スムーズに行われたものと考える。

イ　成果２：地震後の地域学校協働活動実施が地域にもたらした効果

地震後の地域学校協働活動の実施は、地域（保護者、ボランティア、地域全体）に、様々な効果をもたらした。

○　保護者への効果

「子どもが参加する放課後子供教室や地域未来塾の活動への満足度」の状況から、ほとんどの保護者が活動に満足していることがわかる。

その理由として、保護者の記述から、子どもが放課後子供教室や地域未来塾に参加して、「放課後の過ごし方のバリエーションが増え、新たな地域の方々との触れ合いが増えた」ことで、コミュニケーション力が高まったり、多様な体験活動を行う中で、「自分の身の回りのある物で何かを創り出そうとする力、想像する力、意欲が出てきた」等、勉強に前向きに取り組むようになるといった効果が得られたことが要因となっているものと思われる。

また、「先生方にはとても感謝しています」、「とてもありがたく思っております」、「いつもお世話になっております。ありがとうございます」などの記述が多く見られたことから、保護者がこれらの活動や活動に携わる地域ボランティア等に感謝している様子、地域への信頼感も高まっているものと考える。

このことは、「こうすればもっと良くなる」という活動への要望に関する設問に対して４３％の保護者が「特にない」と回答していることからも裏付けられるものと考える。

さらに、推進員への聞き取り調査では、保護者が主体的に放課後子供教室や学校支援活動のボランティアとして参加するようになってきたという話も聞かれた。

地域学校協働活動の開始当初は保護者のちょっとした反発の声や無関心を装う姿も感じられていたそうだが、地域の子どもたちのために心を込めて活動する関係者の献身的な姿に心を打たれ、「私にも何か子どもたちのためにできることはないか」という気持ちが保護者にも芽生えてきたものと考える。

ある地域コーディネーターからは、「保護者から、子育ての生の声や今どきの子どもたちの様子等を聞くことができるので、地域学校協働活動の内容を考えたりする上で、とてもプラスになっている」との話も聞かれた。

○　地域ボランティア等への効果

地域学校協働活動を通して、地域ボランティア等のほとんどが子どもと交流することに満足感を感じていることがわかる。

また、「子どもや先生、ボランティアの方々と会うとホッとしますね」の感想からもわかるように、活動に参画する中で、地域の方や学校の教職員とも新たな交流が生まれ、そのことも満足感につながっているものと考える。

調査に回答したボランティア等の６５％は６０代以上の高齢者であり、また、５５％が経験年数５年以上である。「自分の学びになり、楽しむことができる」や「以前から、少しでも自分が地域のお役に立てることがあればと思っていましたので、今回このボランティアに参加できて良かったと思います」などの感想からもわかるように、活動が高齢のボランティアの活躍の場や自身の生きがいづくり、自己効力感を高めることにもつながっているものと考える。

ある推進員への聞き取りでは、震災直後にもかかわらず、校舎で学ぶ１年生のために、隣接する避難所となる体育館から朝顔植えのボランティア活動に出向いた高齢のボランティアの方々が多数おられたことがわかった。

「避難所として体育館にお世話になっているので、子どもたちのために役に立ちたい」というボランティアの思いは、「ボランティアに感謝の気持ちを表したい」という子どもたちの心を打ち、避難所閉鎖前には、子どもたちがボランティアとの交流会を企画する等、子どもたちとボランティアの間で、新たな心の交流へと発展していった。

避難所閉鎖後の現在も、ボランティアの方々は学校に出向き、ボランティア活動を継続している。地震でつらい思いをしながらも、「来る場所があって良かった」とおっしゃるボランティアの方々。ボランティアの方々は、今、学校に来ることができる喜びや子どもたちとかかわれる喜びを互いに分かち合い、次のボランティア活動への意欲につながっているものと考える。

○　地域全体への効果

地震後の現在、地震発生以前と比べて、地域学校協働活動に取り組む地域の方や地域の様子に変化を感じている推進員は９人中５人と半分をわずかに上回る程度だったが、そのほとんどが「子どもたちや地域の方への思いが高まった」「子どもたちや地域の方と積極的にかかわるようになった」「地域行事・イベントへの参加者が増えた」ことを実感して

いる。

また、ある地域コーディネーターへの聞き取りでは、「各地域の地域サロンに、地震後、地域の方から積極的に子どもたちを招いて交流活動が行われるようになった」という話が聞かれ、地域の子どもたちを見守る目や子どもたちとかかわりたいという気持ちが以前と変わってきている地域もあることがわかった。

ウ　成果３：地震後の地域学校協働活動の円滑な実施を支える推進員の効果

地震後の地域学校協働活動の円滑な実施において、推進員が重要な役割を果たした。

平時から、本事業の運営では、推進員が重要な役割を果たしていることは周知のことであるが、地震後においては、さらにその役割が重要性を増し、特に子どもたち（学校を含む）と地域ボランティア等をつなぐ懸け橋として尽力したことが、調査結果及び聞き取り調査から明確になった。

地震直後は、推進員も含め誰もが被災している厳しい状況の中にもかかわらず、推進員は子どもたちやボランティア等のことを気遣い、主体的に「避難所訪問」、「子どもやボランティア宅への訪問」、「避難所での子どもとの交流活動」、「避難所と学校の交流活動」等を行っている。

推進員の献身的な姿に触れ、「先生のところに手伝いにいこうか」や「あなたが来てくれてうれしかった」等、多くの子どもたちや地域の方が励まされた様子が想像できる。

地震直後の活動を行っていく中でも、推進員が被災後の子どもたちの状況とボランティアの状況を気遣いながら、双方の心が和み、相互に交流できるように調整を行っている。

地震前と比較した推進員の動きでは、子どものことに関しては、被災後の子どもたちの状況を把握するため先生たちに聞き取りを行ったり、心のケア研修会に参加したり、また、心のケアに係る活動や地域の防災マップ作り等の新たな活動を導入したことがあげられる。

また、ボランティアのことに関しては、仮設住宅を訪れたり、個別に電話をかけてボランティアを募ったり、スクールカウンセラーも交えて入念に打合せを行ったり、ボランティアの方が頑張りすぎないように声かけをしたり、ボランティアの方の休憩部屋を確保したことがあげられる。

学校支援活動を行っている学校で、推進員が常時勤務している学校では、長年継続して学校支援活動を行う中で、推進員と教職員との信頼関係が高まっており、地域の方を活用した授業づくりについて教師が気軽に推進員に相談する場面も増えている。

ある学年の防災教育の学習では、「震災後でもあり、地域の方にも一緒に危険箇所を見てもらいたい」という教師の発想から、推進員が地域の方にボランティアを募り、危険箇所巡りと防災マップ作りの学習を地域の方と子どもたちが一緒に行っている。

その学校に勤務する推進員からは、「先生たちの持っていらっしゃるアイデアは計り知れないものがある。私は先生の意見に賛成して、人を集めるだけの仕事です」と、また、「先生と顔をつきあわせながら話すことで、どういう学習内容なのかを把握することができるし、何より自分が子どもたちの役に立っていることを認識できる」と話しており、推進員が先生たちの思いをしっかり汲み取って、地域のボランティアにつないでいることがわかる。

放課後子供教室の地域コーディネーターは、「以前から教頭先生や学級担任が活動に加わったり、校長先生が教室に訪れたりして、その都度、いろいろな話ができている。地震後は、先生方が教室にかかわる頻度が高まっている」と話しており、震災後の子どもたちの安全・安心な活動を行う上で、地域コーディネーターと学校がしっかりと連携していることや学校がコーディネーターの頑張りに感謝している様子がわかる。

「推進員の仕事をする上で大事にしてきたことは、学校、ボランティア、子どもの三者の

気持ちを伝えるパイプ役を果たすことであり、今のやりがいはそこにある」。地震直後に１００人のボランティアの家を個別に訪問した推進員からの言葉である。

子どもたち（学校含む）と地域ボランティア等をつなぐ懸け橋として尽力する推進員は、地域学校協働活動を円滑に行う上で、重要なキーパーソンといえる。

② 課題

地震後の地域学校協働活動の実施が子どもへの実施効果を柱として、学校及び地域に様々な波及効果をもたらしていることは（２）調査結果の考察①の成果（Ｐ３４～３７記載）で述べたとおりであるが、学校支援活動、放課後子供教室及び地域未来塾に参加する子どもたちが、「多様な地域の方と学習や活動の中でたくさん会話をしたい」「もっと楽しい（新しい）活動を増やしたい」「学習内容の理解力向上のため、タブレットなどの機器を使いたい」等、活動をさらにより良くしたいという思いを持っていることが児童生徒を対象とした調査結果からわかった。

また、地域ボランティア等の調査結果では、「仲間や協力者を増やしてほしい」という意見が最も高く、推進員への聞き取りでは、「地域や学校とのネットワークをさらに構築したい」という思いが聞かれた。

推進員や地域ボランティア等は「地域の子どもたちのために、少しでも魅力ある活動を展開したい」という強い思いがあることが想像できる。その思いが、「仲間や協力者を増やしたい」という地域ボランティアの思い、「地域や学校とのさらなるネットワークを構築したい」という推進員の思いにつながっていると考える。

教育委員会を対象とした調査結果からもわかるとおり、各町村教育委員会は今後、この地域学校協働活動を継続的に推進していくために、「ボランティア等の地域人材の育成」「学校と地域の連携強化」等、コーディネート機能や地域人材の育成を強化しようと考えている。

各町村教育委員会は、多様な地域の方々にこの地域学校協働活動のことを理解してもらい、活動の担い手として積極的に参画してもらうための取組を計画的に実施することが必要である。

３　推進員の学校配置や学校を支援する組織の有無等の諸条件の違いによる地域学校協働活動への実施効果に関する調査結果

（１）調査結果

① 対象校の推進員の配置の有無に関する調査結果

ア　学校を対象とした調査結果から（Ｃ票）

調査対象校１８校の中には、推進員が学校に配置されている学校が２校あり、配置校２校と未配置校１６校についてクロス集計を行った。

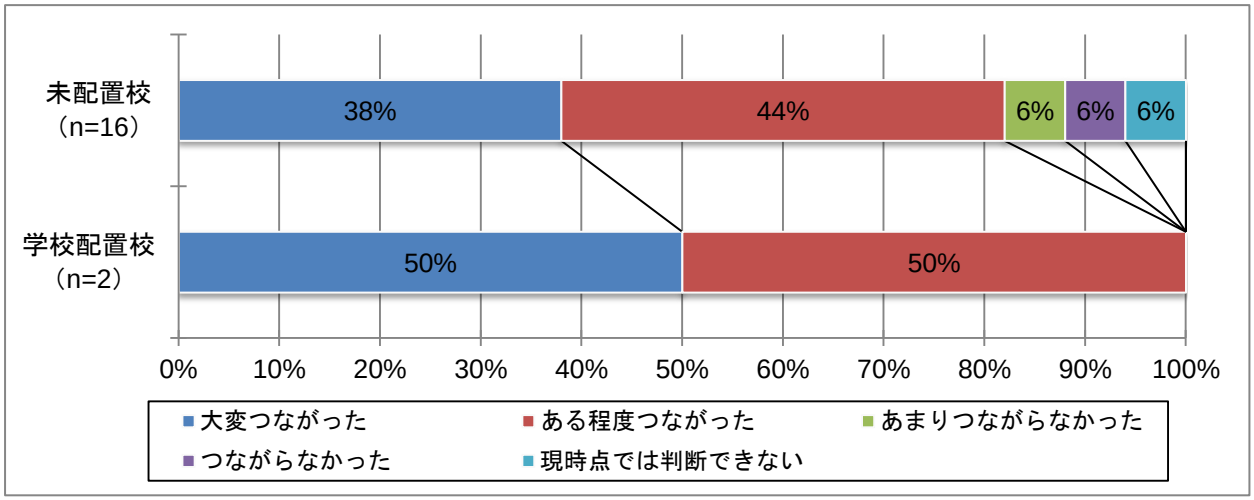
学校を対象とした調査で、“推進員の配置の有無”と“地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組が「教職員の業務の助けにつながった」か”をクロス集計した結果は、図 3-1 に示すとおりである。

配置校の方が「大変つながった」の割合で１２％高く、配置校の２校全てが「つながった」と回答したのに対し、未配置校の回答では、「あまりつながらなかった」「つながらなかった」と回答した学校がそれぞれ１校ずつ（６％）見られた。

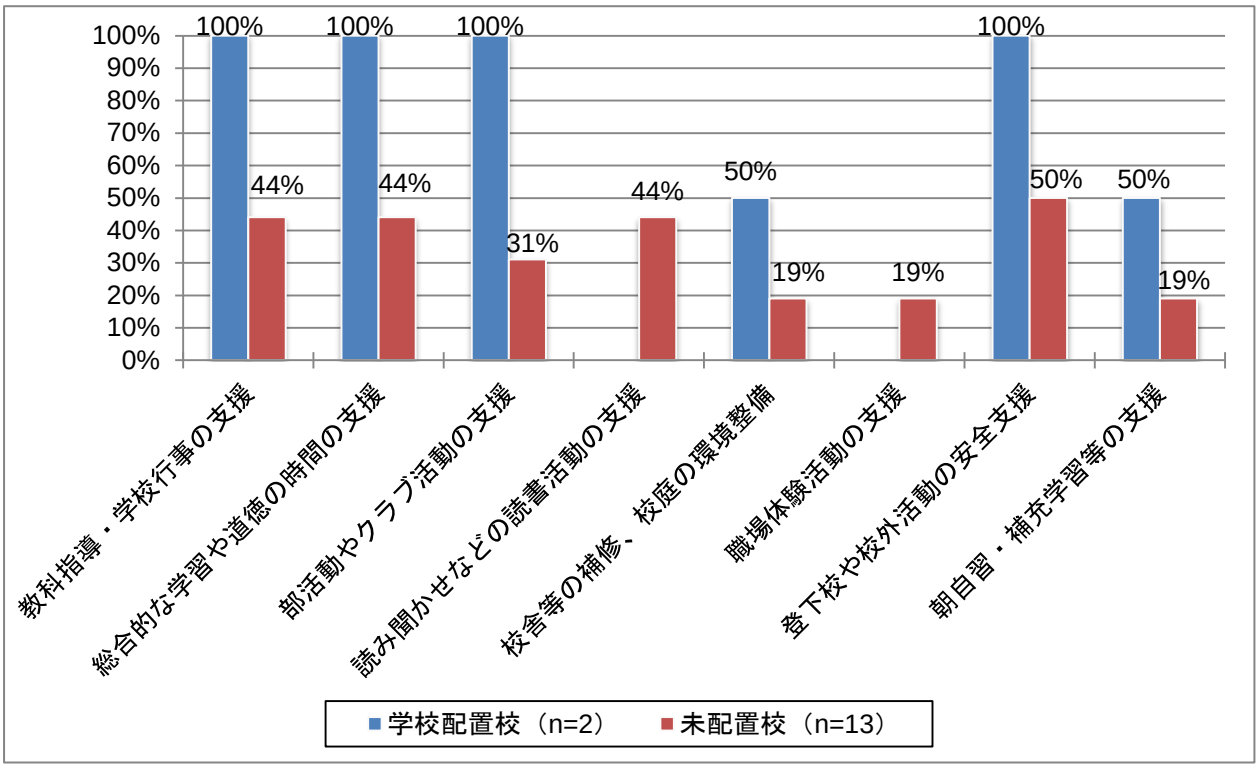
また、教職員の業務の助けに「大変つながった」「ある程度つながった」と回答した１５校で、“推進員の配置の有無”と“地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、「教職員の業務の助けにつながった」取組”をクロス集計した結果は、図 3-2 に示すとおりである。

配置校では、「教科指導・学校行事の支援」「総合的な学習や道徳の時間の支援」「部活動やクラブ活動の支援」「登下校や校外活動の安全支援」で、２校とも「教職員の業務の助けにつ

ながった」ことがわかる。このことから、配置校では、教科指導等の教育課程内の活動、登下校指導等の教育課程外の活動と、教育課程の内外を問わず学校の教育活動全般において支援がなされており、そのことが教職員の業務の助けとなっていることがわかる。



【図 3-1 ″推進員の配置の有無“と”地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組が「教職員の業務の助けにつながった」か”をクロス集計した結果】



【図 3-2 ″推進員の配置の有無“と”地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）して、「教職員の業務の助けにつながった」取組”をクロス集計した結果】

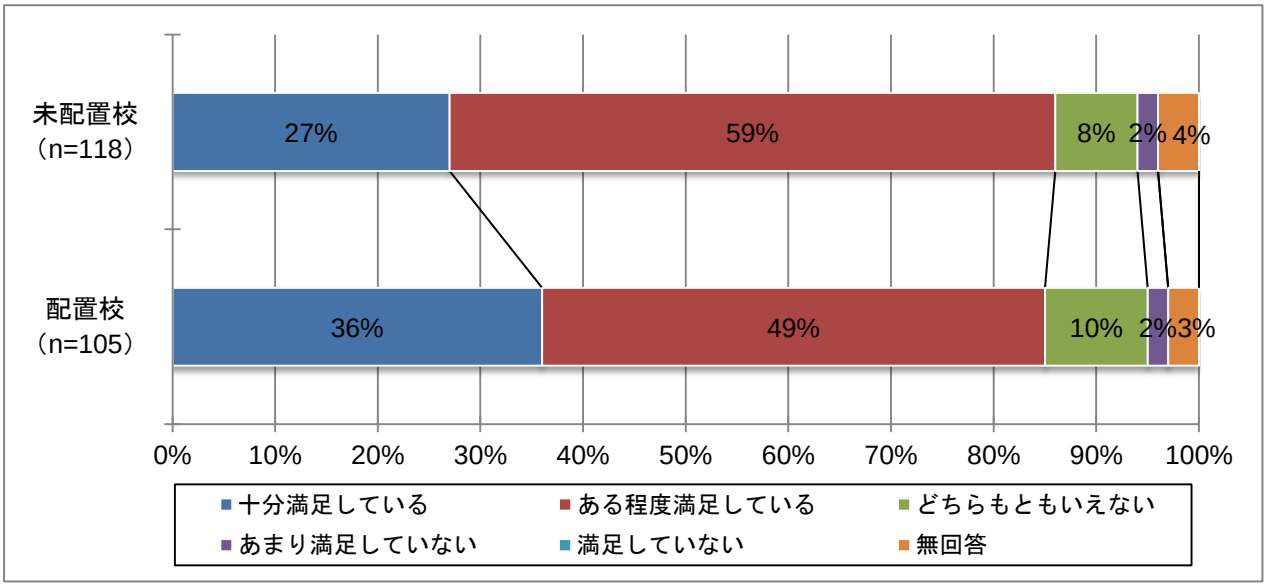
また、配置校の回答で「推進員の存在がもたらした効果やおられて良かったこと」についての学校関係者の記述には､｢学校側のニーズと地域の人材をうまくつないでくれる地域コーディネーターの存在は、双方にとってとても大きい。そういう意味でも学校支援活動を今後さらに拡充させるためには、地域コーディネーターの増員、各学校への配置が必要だと考える」と推進員の学校への配置の必要性を記している。

イ　地域ボランティア等を対象とした調査結果から（Ｅ票）

地域ボランティア等を対象とした調査で、“推進員の配置の有無”と“学校を支援する地域ボランティア等の活動への満足度”をクロス集計した結果は、図 3-3 に示すとおりである。

配置校の地域ボランティア等の回答の方が未配置校よりも「十分満足している」の割合が９％高いことがわかる。

配置校の地域ボランティア等の回答で、「推進員がおられ良かった」ことの記述には、「学校と地域の方の懸け橋となっていただき、大変ありがたく思います」、「先生方に直接言ったり、伺うことには少し抵抗があるため、コーディネーターがいると話しやすいし、参考となる意見もよく言ってもらえる」「地域と学校の間には常に顔の見えるコーディネーターが必要。気持ちの通じる人間関係がその第一歩」等が見られた。推進員が学校で地域ボランティアの方々と日々顔の見える関係づくりを大切にし、良好な関係を築いていることや、学校と地域をつなぐ懸け橋的な存在となっていることがわかる。



【図 3-3　″推進員の配置の有無“と″学校を支援する地域ボランティア等の活動への満足度”をクロス集計した結果】

② 対象校の学校支援地域本部の設置の有無に関する調査結果（学校と対象とした調査結果：Ｃ票）

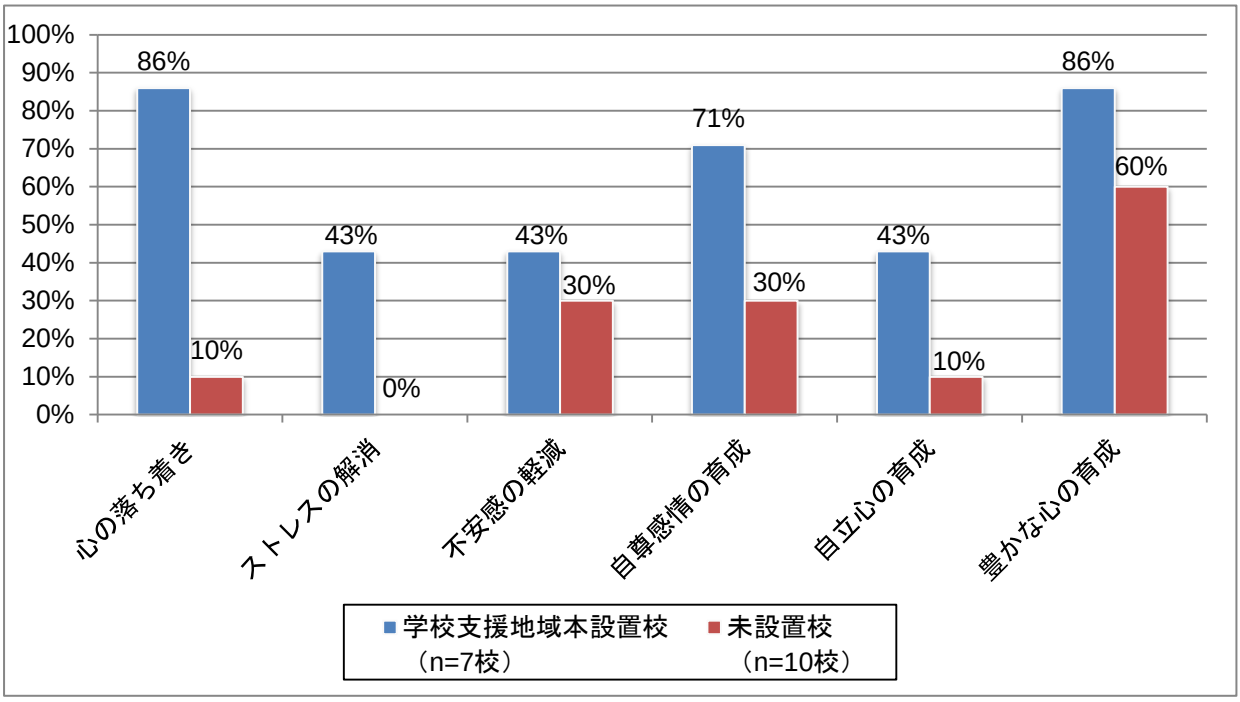
調査対象１８校の中には、学校支援地域本部（地域住民がボランティアとして授業等の学習補助、学校行事の支援、学校環境整備、登下校時の見守り等の学校支援活動を推進する体制：文部科学省が各市町村の取組に係る費用を補助）を設置している学校が８校あり、設置校（※８校中、Ｃ票の問２で子どもたちの行動面や学習面に効果があったかは「現時点では判断できない」と回答した１校を除く７校）と未設置校１０校についてクロス集計を行った。

Ｐ１６で示したとおり、地震後の地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、各学校で見受けられた効果では、「地域への理解・関心の深まり」「地域に対する安心感・信頼感の向上」「学習意欲の向上」が７６％と高く、次いで「豊かな心の育成」（６５％）、「コミュニケーション力の向上」（４７％）、「自尊感情の育成」「心の落ち着き」「学習内容の理解力の向上」（４１％）と、特に学習面で高い効果が見受けられた。

ただ、“学校支援地域本部設置の有無”と“各学校で見受けられた子どもたちの行動面の効果”をクロス集計した結果（図 3-4）を見ると、設置校では、「心の落ち着き」「豊かな心の育成」が８６％で高く、次いで「自尊感情の育成」（７１％）、「ストレスの解消」「不安感の軽減」「自立心の育成」（４３％）と、子どもたちの心の面に関する効果が多く見受けられていることがわかる。

また、これらの数値は未設置校よりもいずれも高く、「心の落ち着き」で７６％、「ストレスの解消」で４３％、「自尊感情の育成」で４１％と大きな差が見られた。

さらに未設置校では、「自立心の育成」が１０％、「ストレスの解消」が０％と、子どもたちの心の面に関する効果があまり見られなかったことがわかる。



【図 3-4 ″学校支援地域本部設置の有無”と″各学校で見受けられた子どもたちの行動面の効果“をクロス集計した結果】

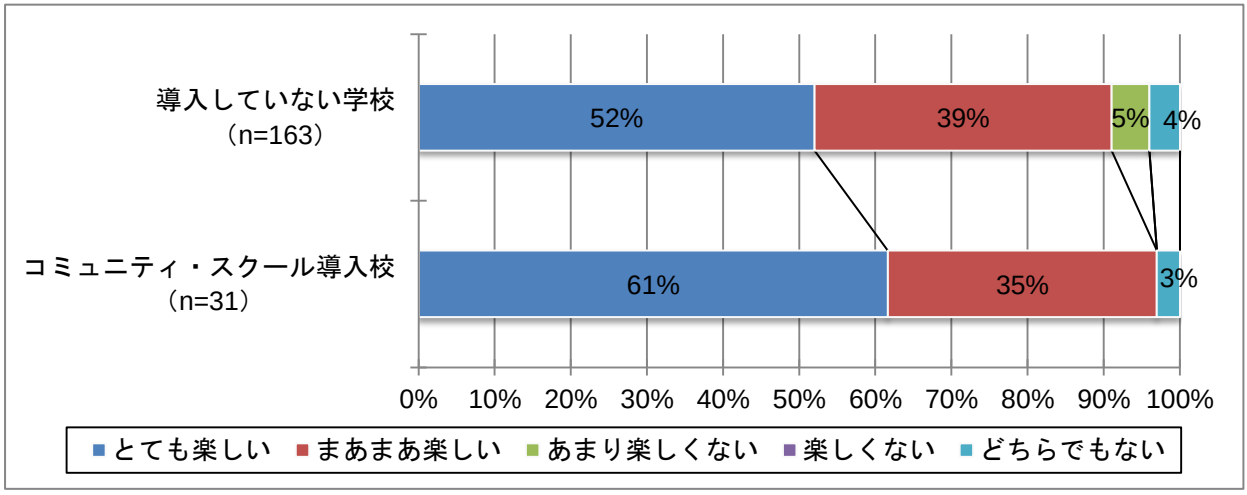
③　対象校のコミュニティ・スクールの導入の有無に関する調査結果

ア　児童生徒を対象とした調査結果から（Ｆ票、Ｇ票）

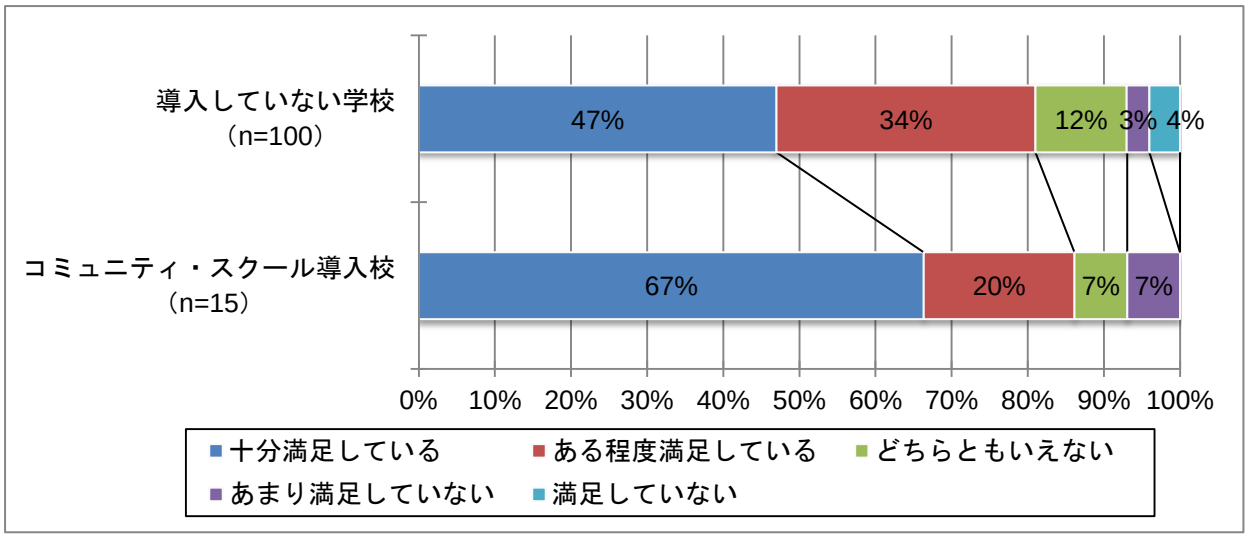
調査対象１８校の中には、コミュニティ・スクールの仕組みを導入している学校が１校あり、学校支援活動実施校及び放課後子供教室実施校で、導入校１校と導入していない学校（学校支援活動７校、放課後子供教室１０校）についてクロス集計を行った。

児童生徒を対象とした調査で、“コミュニティ・スクール導入の有無”と学校支援活動及び放課後子供教室での“楽しさの状況”をクロス集計した結果は、図 3-5、図 3-6 に示すとおりである。

コミュニティ・スクールを導入している学校の児童の回答が学校支援活動及び放課後子供教室の双方で、「とても楽しい」と回答した児童が多いことがわかる。放課後子供教室では、２０％とその差が顕著に表れている。



【図 3-5 ″コミュニティ・スクール導入の有無”と″学校支援活動での楽しさの状況“をクロス集計した結果】



【図 3-6 ″コミュニティ・スクール導入の有無”と″放課後子供教室での楽しさの状況“をクロス集計した結果】

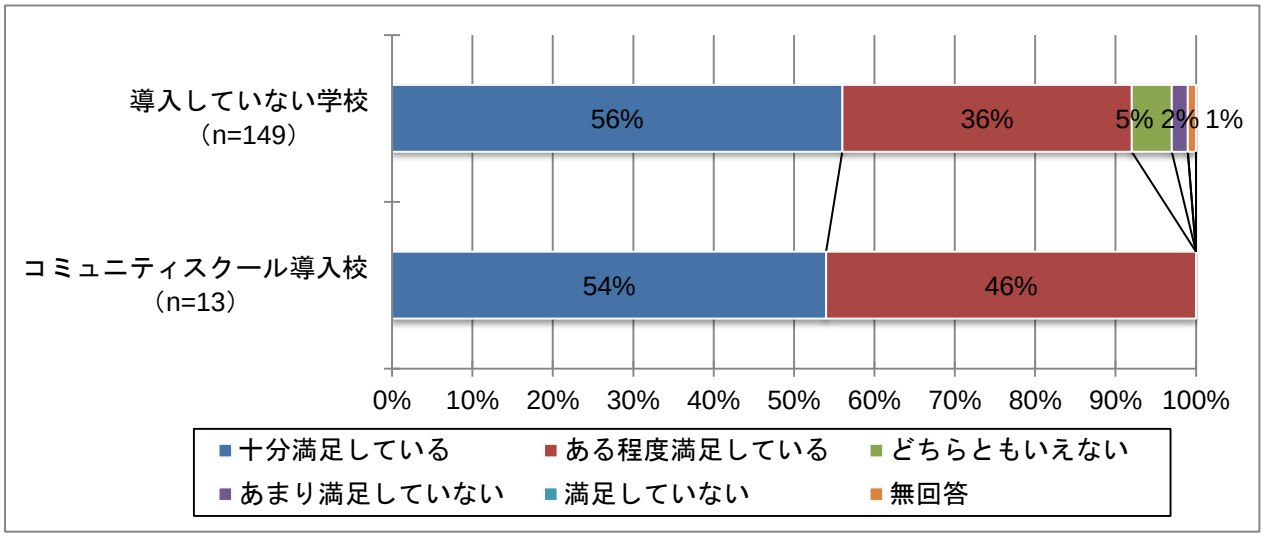
イ　保護者及び地域ボランティア等を対象とした調査結果から（Ｄ票、Ｆ票）

保護者及び地域ボランティア等を対象とした調査で、導入校１校と導入していない学校（保護者：放課後子供教室１０校、地域ボランティア等１７校）についてクロス集計を行った。

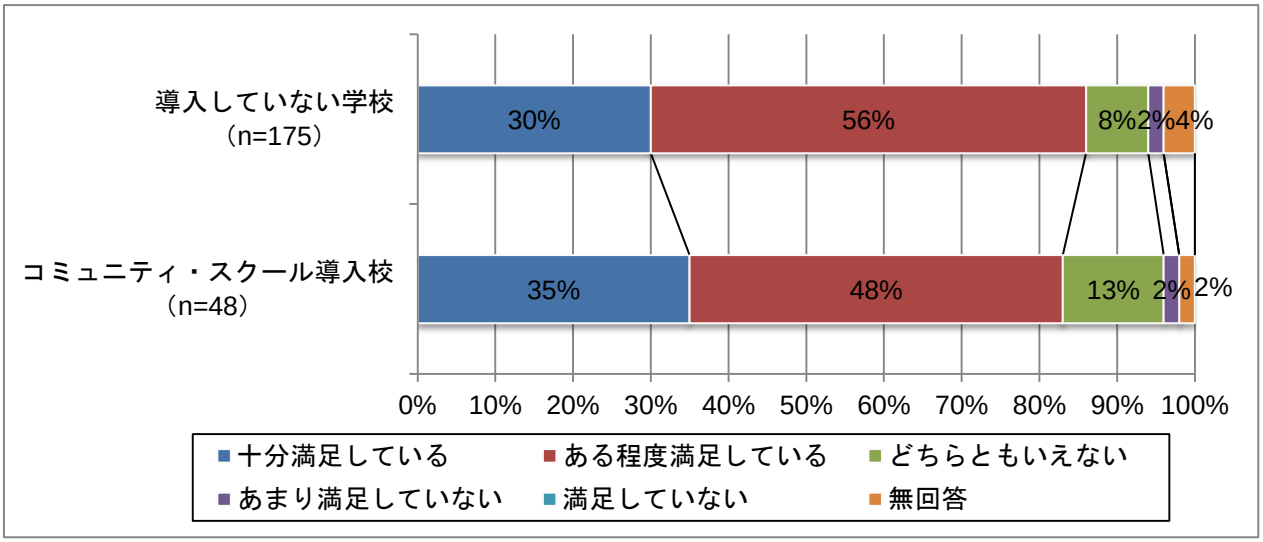
“コミュニティ・スクール導入の有無”と“子どもが参加する放課後子供教室への保護者の満足度の状況”、“学校を支援するボランティア活動での地域ボランティア等の満足度の状況”をクロス集計した結果は、図 3-7、図 3-8 に示すとおりである。

子どもたちが参加する放課後子供教室の保護者の満足度の状況では、コミュニティ・スクール導入校では、全ての保護者が「十分満足している」「ある程度満足している」と回答しているのに対し、導入していない学校では、少数ではあるが、「どちらともいえない」「あまり満足していない」と回答した保護者が７％見られた。

学校を支援するボランティア活動での地域ボランティア等の満足度の状況では、導入校の方が「十分満足している」の割合が５％高いことがわかる。



【図 3-7 ″コミュニティ・スクール導入の有無”と″子どもが参加する放課後子供教室の保護者の満足度の状況“をクロス集計した結果】



【図 3-8 ″コミュニティ・スクール導入の有無″ と″学校を支援するボランティア活動での地域ボランティア等の満足度の状況 “をクロス集計した結果】

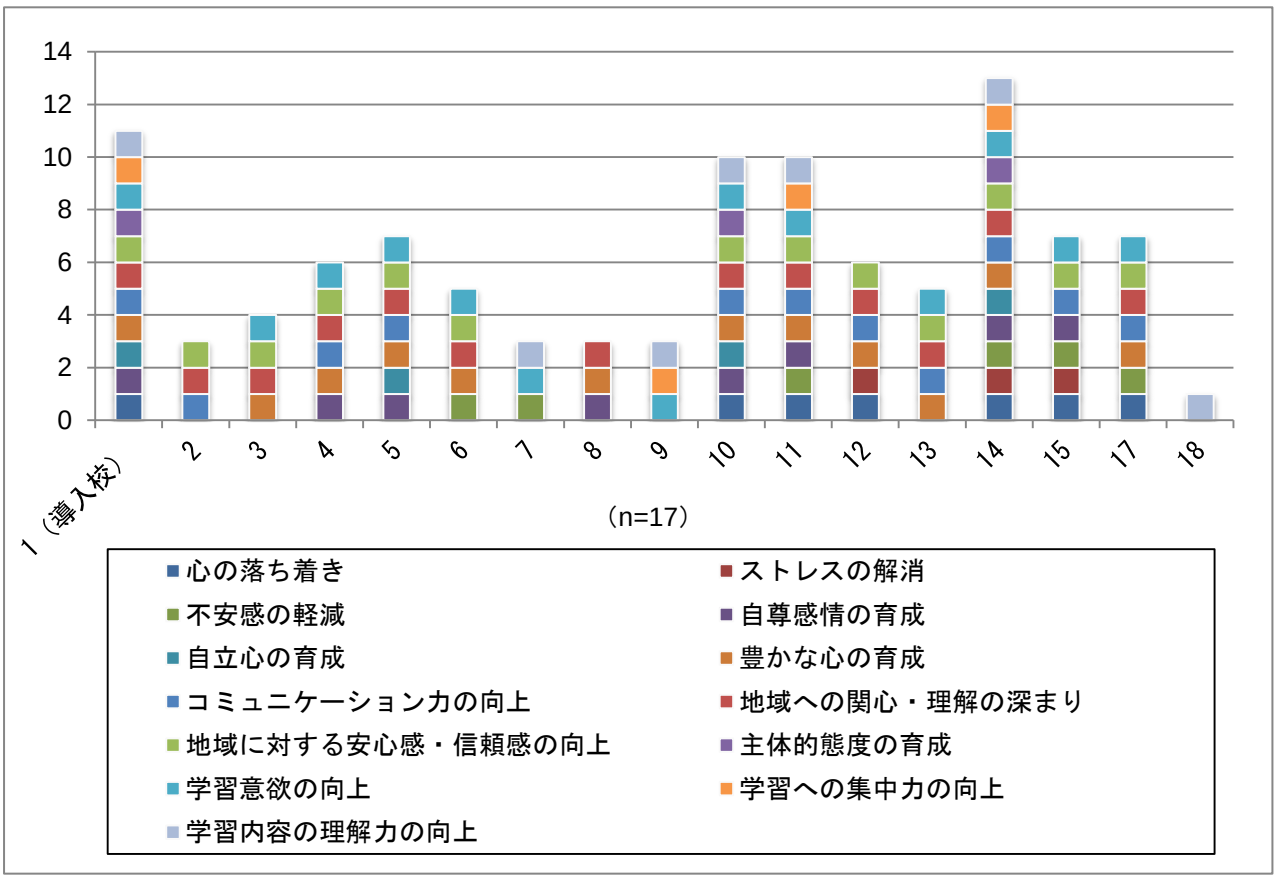
ウ　学校を対象とした調査結果から（Ｃ票）

学校を対象とした調査で、コミュニティ・スクール導入校１校と導入していない学校１７校（※１７校中、Ｃ票の問２で子どもたちの行動面や学習面に効果があったかは「現時点では判断できない」と回答した１校を除く１６校を対象）について以下のとおり比較調査を行った。

導入校と導入していない学校の地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）して見受けられた子どもたちの行動面や学習面の効果の状況は図 3-9 に示すとおりである。

導入している学校では１３項目中、「ストレスの解消」「不安感の軽減」以外の１１項目で「効果があった」と回答しており、１７校中では、２番目に項目数が多いことがわかる。

また、１７校の「効果があった取組」の平均は約６項目であり、導入校の項目数はその約２倍と、様々な効果が得られていることがわかる。



【図 3-9 ″コミュニティ・スクール導入の有無″ と″地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）して見受けれた子どもたちの行動面や学習面の効果の状況 “を比較した結果】

（２）調査結果の考察

①　成果

地震後の地域学校協働活動の実施で、推進員が学校に配置されている学校、学校支援地域本部を設置している学校及びコミュニティ・スクールを導入している学校は、子どもや学校、地域への実施効果がより高まる傾向がある。

３の（１）の調査結果（Ｐ３７～４２記載）から、まず、推進員が配置されている学校では、推進員が日々学校と地域ボランティア等の双方と円滑にコミュニケーションをとりながら、顔の見える関係を構築し、地域と学校を結ぶ懸け橋として調整役を果たすことで、地域と学校がパートナーとして、より連携・協働した活動が継続して実施できているものと思われる。

また、学校が推進員と顔の見える関係の中で、推進員に、地域の方に協力してもらいたいことを気兼ねなく伝えることができており、そのニーズに合致した地域ボランティア等の活用による地域学校協働活動が行われることで、学校が子どもたちの学習効果の高まりや教職員の業務の助けとなっていることを実感しているものと考える。

次に、学校支援地域本部の設置校では、地域のボランティア等と連携・協働した学校支援活動が継続的、計画的に取り組まれているものと考える。

これらの学校では、日頃から授業等の学習補助、学校行事の支援、学校環境整備、登下校時の見守り等、多様な活動が年間を通して数多く実施されており、子どもたちは、地域の多くのボランティア等とかかわる中で、多くの愛情を注がれている。

このように、学校支援地域本部設置校では、子どもたちが地域の方との心の交流活動を日常的に行っていたことで、「豊かな心の育成」「心の落ち着き」「自尊感情の育成」等、自然と心が成長していったものと考える。

最後に、コミュニティ・スクール導入校では、学校支援活動等の地域学校協働活動と学校運営協議会の双方が機能し、地域住民等の意見を学校運営に反映させながら、子どもたちの成長を支える活動が活性化しており、双方の相乗効果が発揮され、子どもたちの行動面や学習面等の成長へとつながっているものと考える。

導入している１校では、平成２１年度から学校支援地域本部事業、平成２４年度から熊本版コミュニティ・スクール、平成２６年度からコミュニティ・スクールに取組み、年間延べ３，０００人以上の地域ボランティアが学校で活動している。

年６回行われている学校運営協議会の中で、学校が推進員と連携して具体的な児童の姿で学校理解を得るよう努めた結果、学校が地域に求めている支援が明確になり、地域の方がより積極的にボランティアに参加するようになったという経緯がある。

また、熊本地震においては、多くの児童が仮設住宅団地をはじめとする新しいコミュニティでの生活を余儀なくされていたが、学校は日頃の授業などを通して地域の方に児童のことを理解してもらっているので、地域では児童への声かけや児童に関する情報共有等が行われている。

さらに、避難所運営では、当初は行政・支援団体中心に行っていたが、６月中旬からは町内で唯一、学校に避難されている方々が中心となって、避難所の自主運営が実現した。

その後、避難所の方は、７月からは避難所から学校支援ボランティアを実施され、仮設住宅へ転居後も、「是非子どもたちに教えたい」との思いから、学校支援ボランティアの活動を継続されている。「仮設住宅に移ったことで地域のつながりが断たれたと感じていたが、学校のボランティアに来ることで、地域の者同士が再びつながりを持つことができて、とても楽しい」と言われるボランティアの言葉から、ボランティアの方が学校に集うことで、地域コミュニティの維持及び再構築に大きくつながっていると考える。

② 課題

今回の調査対象１８校の中で、推進員が学校に配置されている学校は対象６町村中１町の２校のみとなっている。

また、学校支援地域本部設置校は、対象６町村中２町の８校であり、コミュニティ・スクール導入校は対象６町村中１町の１校のみとなっている。

地震後の地域学校協働活動の実施で、推進員が学校に配置されている学校、学校支援地域本部を設置している学校及びコミュニティ・スクールを導入している学校では、子どもや学校、地域への実施効果がより高まる傾向があることは、（２）調査結果の考察の①成果（Ｐ４３記載）で述べたとおりであるが、そもそも推進員を学校に配置している学校や学校支援地域本部の設置など、地域学校協働活動を仕組みとして取り組んでいる学校、及びコミュニティ・スクールを導入している学校が少ないのが現状である。

これは、平成３０年１月末現在の熊本県（熊本市を除く）における「地域と学校の連携・協働」の推進状況（Ｐ３～４記載）を見ても、推進員の配置（５４．３％ ※但し、学校には配置されていない市町村配置の推進員も含む)、地域学校協働活動（学校支援活動）の実施（３５．１％)、学校運営協議会の導入（１９．４％ ※但し、熊本版コミュニティ・スクール導入校と併せると７１．０％）と、全県的に見ても高いとは言えない状況である。

４ 今後の展望

今後のさらなる地域学校協働活動の充実に向けて、以下のとおり展望を述べる。

まず第一に、地域のボランティア等と連携・協働した地域学校協働活動の取組を継続的に実施することが必要であると考える。

各市町村の小中学校においては､地域の方がボランティアとして単発的なゲストティーチャー等、学校を支援する活動は行われているものの、その全てが運営委員会、運営協議会等の「学校を支援するための組織」に基づいて行われたものではない。

学校の教職員が定期異動により入れ替わっても、継続して持続させるためには地域学校協働活動を組織的かつ継続的に取り組む必要がある。

各市町村教育委員会は、地域や学校の実情に応じて、関係機関と連携して、活動推進の「仕組み」を構築していくことが望まれる。

第二に、コーディネート機能を強化するために「地域と学校をつなぐ人」となる推進員を各学校に配置する必要があると考える。

各市町村教育委員会は、推進員の発掘・育成・機能強化を計画的に進める必要がある。そのため、県教育委員会は県教育事務所に配置した県統括コーディネーターを各市町村単位の研修や会議へ派遣するなどして、市町村教育委員会との連携をさらに推進する必要がある。

また、各市町村教育委員会は、推進員有償配置の有効な手段である国及び県の補助事業（学校支援活動・放課後子供教室・地域未来塾）を積極的に活用する必要がある。併せて、県教育委員会及び市町村教育委員会は配置のための予算を確保する必要がある。

第三に、今後、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を各学校で導入し、各地域学校協働活動と併せて効率的に運営していく必要があると考える。

また、既に熊本版コミュニティ・スクールを導入している学校においては、国版のコミュニティ・スクールへの積極的な移行が望まれる。

各市町村教育委員会は、学校と地域の住民等が力を合せて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みとして、コミュニティ・スクールの組織づくりに向けた準備を行い、その組織づくりに向けて、設置の目的や仕組みなどの理解を図るため、先進校視察等を行い、コミュニティ・スクールの運営方法等を研究する必要がある。

お わ り に

本報告書は、「平成２８年熊本地震」を体験した被災地域・学校を、地域と学校の連携・協働に係る視点から分析し、後世に伝えるという役割があります。地域学校協働活動やコミュニティ・スクールについては、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えることを目的とし、取り組んできましたが、震災後に避難所となった学校を訪問する中で、これらの活動に積極的にかかわってきた学校では、その他の学校と違いがあることが担当教職員との会話の中から見えてきました。「地域学校協働活動に積極的にかかわっていた学校の方が、避難所の運営がスムーズになされた要因は何か」「平時の地域学校協働活動と非常時の避難所や学校の運営に関連性はあるのか」について明らかにしたいというのが、本調査の出発点でした。

調査研究委員会では、調査アンケートを作成する段階で、いくつかの仮説が出されました。

① 学校は避難所として利用されることがあり、避難した人たちにとって数日から数ヶ月間の生活が安心・快適に過ごせるかどうかは、それまでの日常的な内部の人々のかかわりあい、外部の支援者のかかわり方に依存するのではないか。

② 市町村の行政、学校教職員、自治会のリーダーなど全体を支援・統括する人の存在の有無が、避難所の運営に重要なファクターとなったのではないか。また、それらのリーダーやサポーターとしての役割を持つ住民を平時から育てることも防災には重要であり、その一つの重要なポジションとして、地域学校協働活動推進員があるのではないか。

③ 避難所にいる児童生徒にとって、面識のない大人より、日頃からかかわりを持ち、信頼している大人がリーダーとなる方が、安心感をもたらすのではないか。また、学校生活においては、学年単位・クラス単位で過ごすことが多い中、異学年での交流や地域ごとでの活動機会を日常的に持たせることも、非常時への「備え」としては有効ではないか。

地域学校協働活動の平時の役割とともに、非常時の役割を兼ね備えた支援体制としての重要性を明らかにすることは、震災を経験したことのない地域にも有用な情報と言えます。

調査の結果、仮説はほぼ検証できたように思います。実際に地域学校協働活動にかかわっていた方々が、避難所の訪問、子どもやボランティア宅への訪問、避難所での子どもとの交流活動、避難所と学校の交流活動を行っていたことが明らかになりました。さらに、震災後の学校業務が多忙な時に、地域学校協働活動にかかわる関係者が、下校時や校外活動の安全支援、教科指導・学校行事支援、朝自習・補充学習等の支援などにより、教職員の業務の手助けとなり、教育の質の維持に貢献していたことがわかりました。また、震災から２年が過ぎようとする現在、仮設住宅など不安定な居住環境にある児童生徒ほど、地域学校協働活動に楽しさや有用感を感じていることも明らかになりました。これは震災の数年後に発生すると言われる学力低下への対応にもなるのではないかと考えます。平時、震災直後、震災後数年と、それぞれの時期において、地域学校協働活動が果たしていた役割があることを調査により明らかにすることができました。

本報告書は、短時間に作成したものであり、実態を全て分析できたとは言えないと考えております。もし、詳細なデータ等が必要であれば、担当部署にお問い合わせ下さい。

最後になりましたが、アンケートや聞き取り調査にご協力いただいた皆様、そして膨大なデータの整理・分析をいただいた担当職員の皆様に感謝申し上げます。本報告書が、地域学校協働活動の平時・非常時の有用性・役割への理解や、その設置・拡充に向けた一歩への一助となり、さらなる展開への懸け橋となることを祈念しております。

熊本県被災地域の教育力向上プロジェクト調査研究委員会
委員長　田口　浩継

参考文献

文部科学省（２０１７）『地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン』

熊本県社会教育委員会議（２０１７）『未来を創る地域と学校の連携・協働－復旧・復興を目指す熊本の「元気づくり」－（提言）』

熊本日日新聞「熊本地震県内の被災状況」２０１８年３月１３日付朝刊、３（２７）

熊本県教育委員会（２０１３）『地域と共に創る熊本版コミュニティ・スクール』

平成２９年度「被災地域の教育力向上プロジェクト」調査報告書作成に係る構成員名簿

本調査報告書の作成は、次の熊本県被災地域の教育力向上プロジェクト調査研究委員会の委員及び事務局が行った。

【熊本県被災地域の教育力向上プロジェクト調査研究委員会委員（五十音順）】

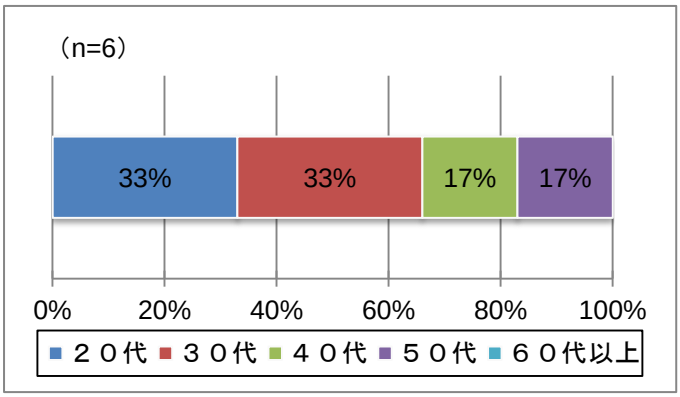
委員長　田　口　浩　継　（熊本大学教育学部　教授）
委　員　石　村　秀　登　（熊本県立大学文学部　教授）
　　中　村　慶　治　（熊本県ＰＴＡ連合会　会長）
　　八ッ塚　一　郎　（熊本大学教育学部　准教授）

【事務局】

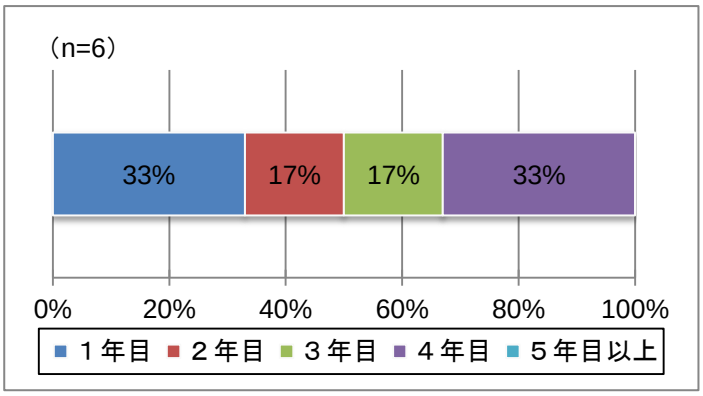
坂　本　富　明　（熊本県教育庁教育総務局社会教育課　課長）
本　村　由紀博　（同　審議員）
江　上　知　男　（同　主幹）
廣　瀬　友　治　（同　社会教育主事）
土　井　淳　　（同　社会教育主事）
神　田　一　真　（同　主事）

参考資料１
各対象別回収者の属性の状況

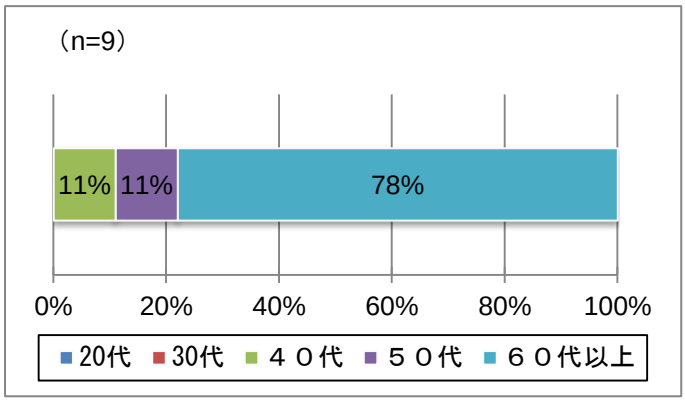
各対象別回収者の属性の状況は図１－１から図１－２６のとおりである。



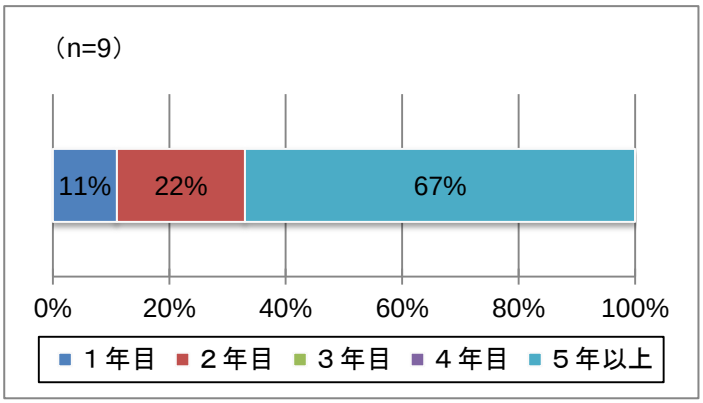
【図 1-1 教育委員会担当者の年齢】



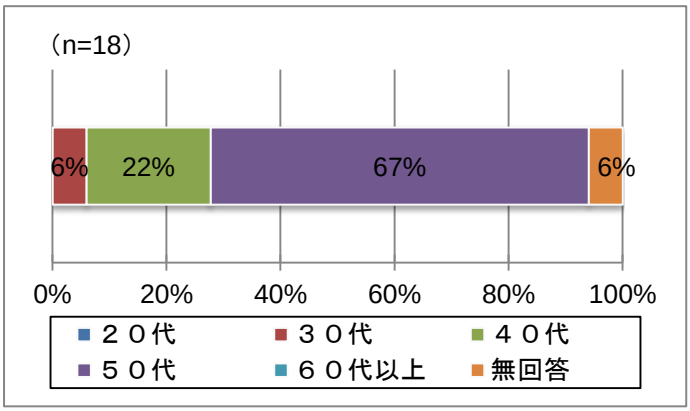
【図 1-2　教育委員会担当者の経験年数】



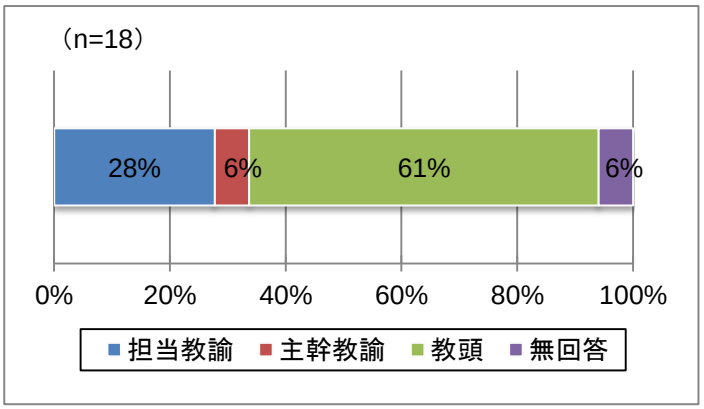
【図 1-3 推進員の年齢】



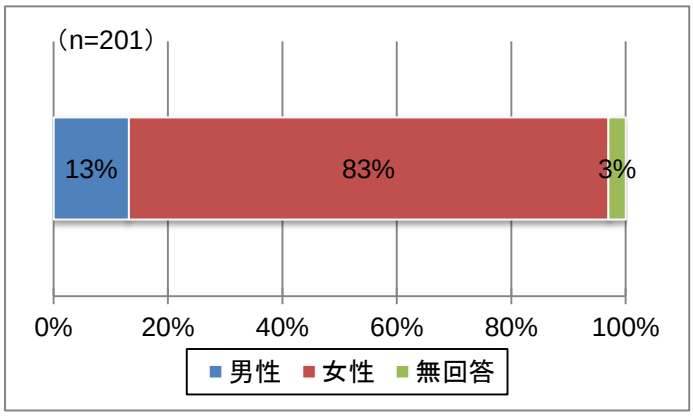
【図 1-4　推進員の経験年数】



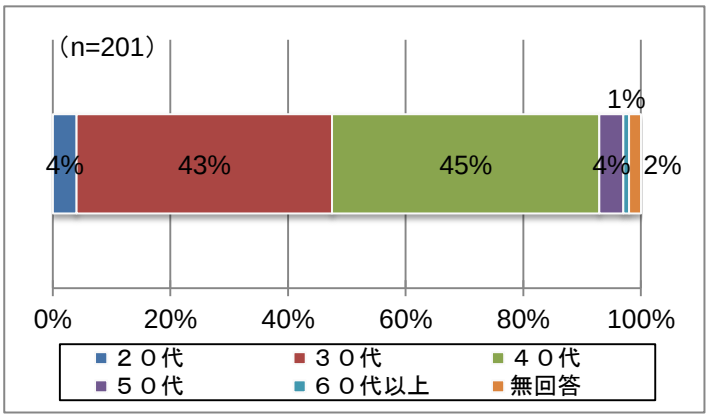
【図 1-5 学校教職員の年齢】



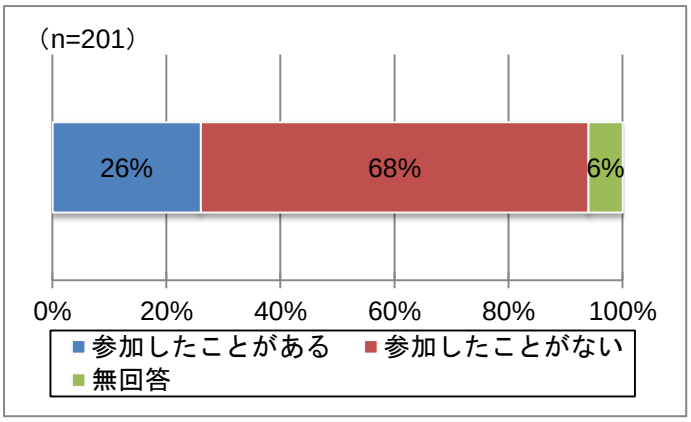
【図 1-6 学校教職員の職】



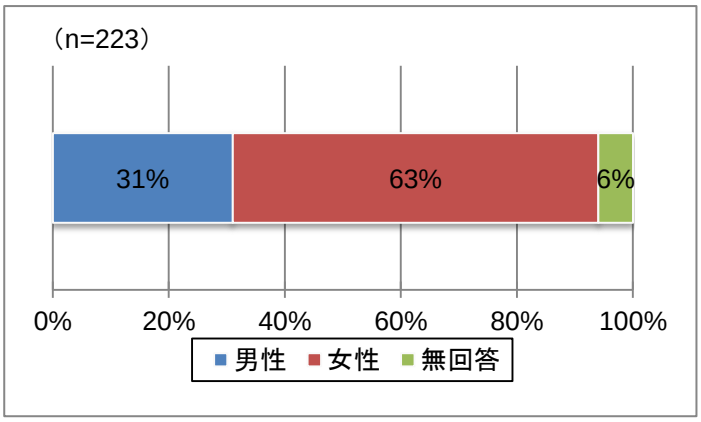
【図 1-7 保護者の性別】



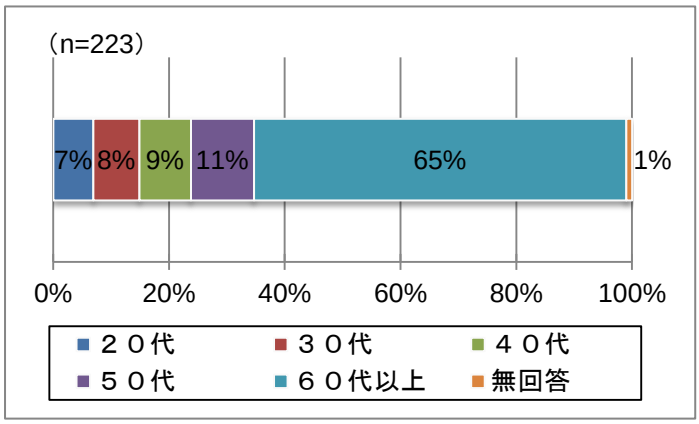
【図 1-8 保護者の年齢】



【図 1-9 保護者のボランティア活動への参加】



【図 1-10 地域ボランティア等の性別】



【図 1-11 地域ボランティア等の年齢】

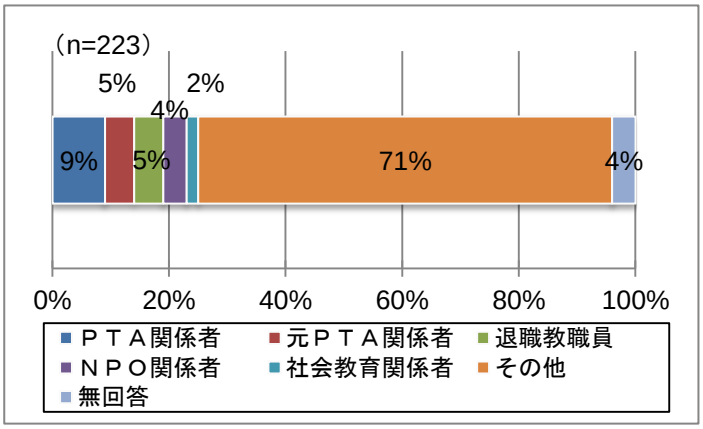
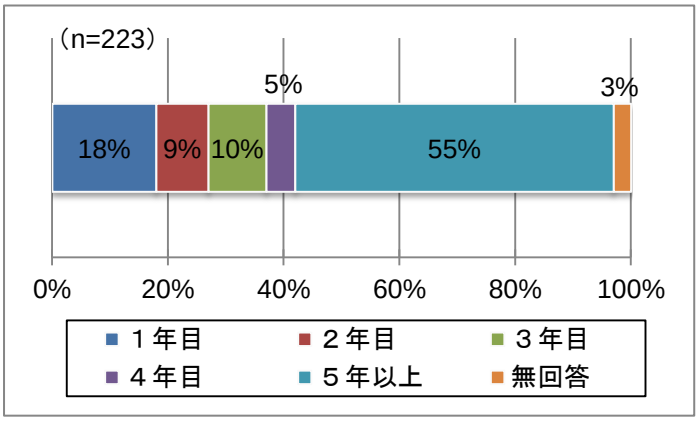
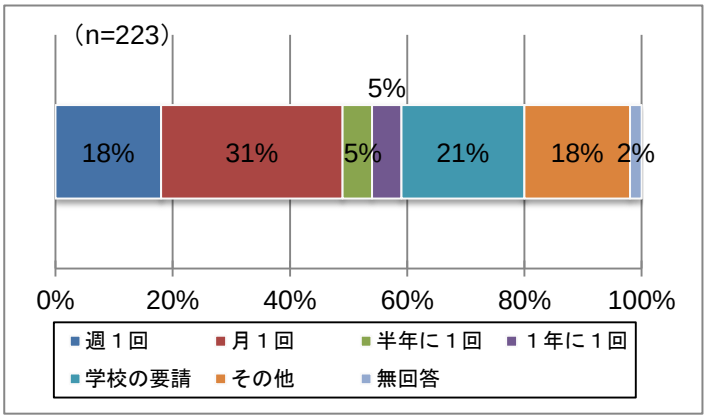


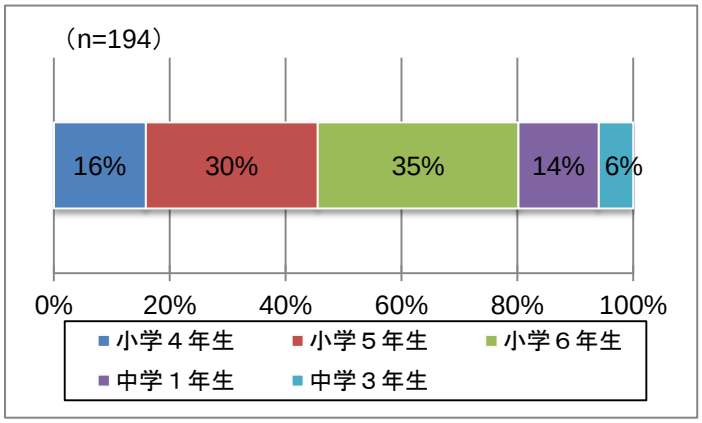
図 1-12 地域ボランティア等の職種・役職】



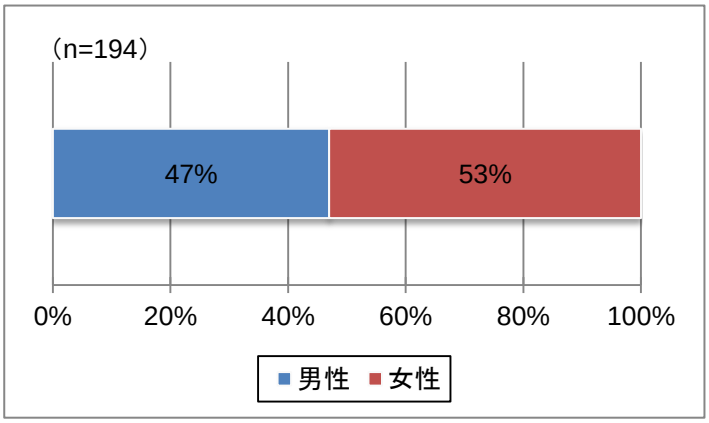
【図 1-13 地域ボランティア等の経験年数】



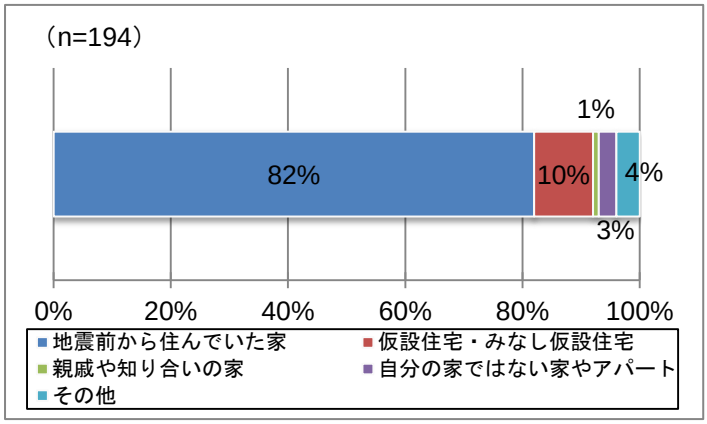
【図 1-14 地域ボランティア等の活動頻度】



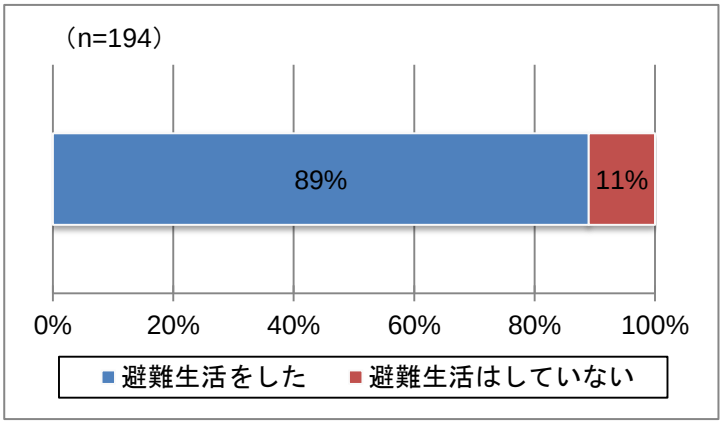
【図 1-15 学校支援活動児童生徒の学年】



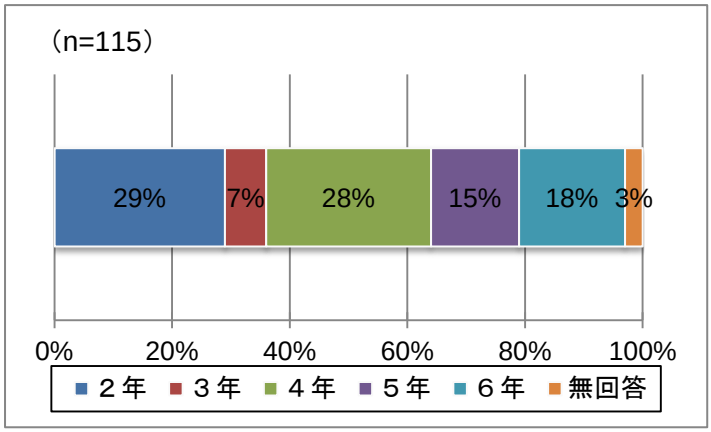
【図 1-16 学校支援活動児童生徒の性別】



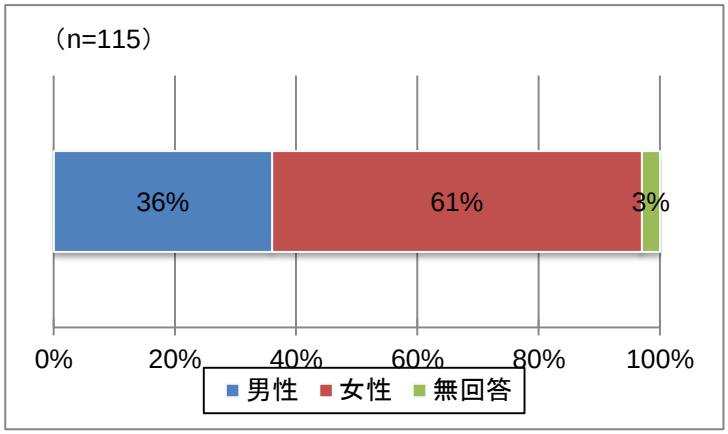
【図 1-17 学校支援活動児童生徒の現在の住居】



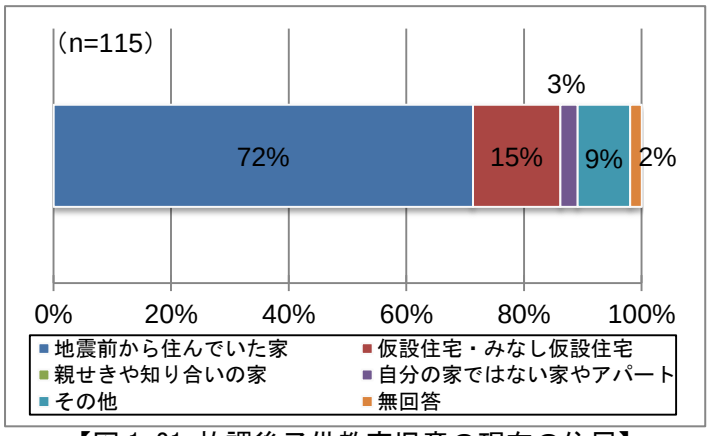
【図 1-18 学校支援活動児童生徒の熊本地震後の避難生活の有無】



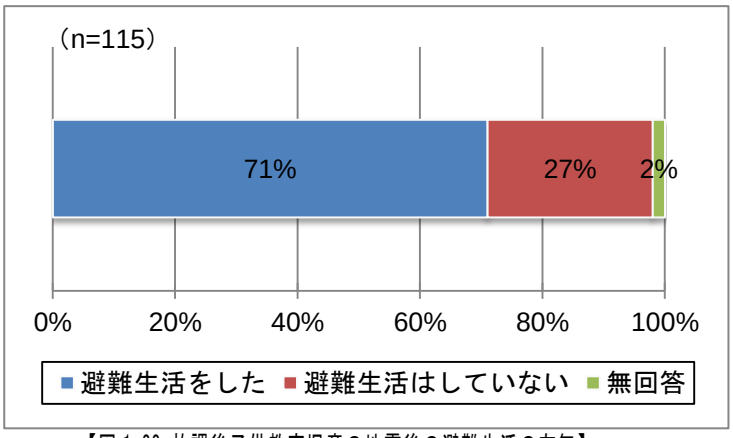
【図 1-19 放課後子供教室児童の学年】



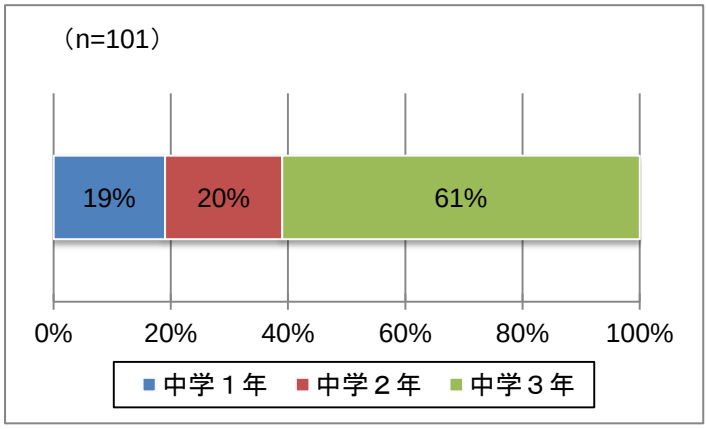
【図 1-20 放課後子供教室児童の性別】



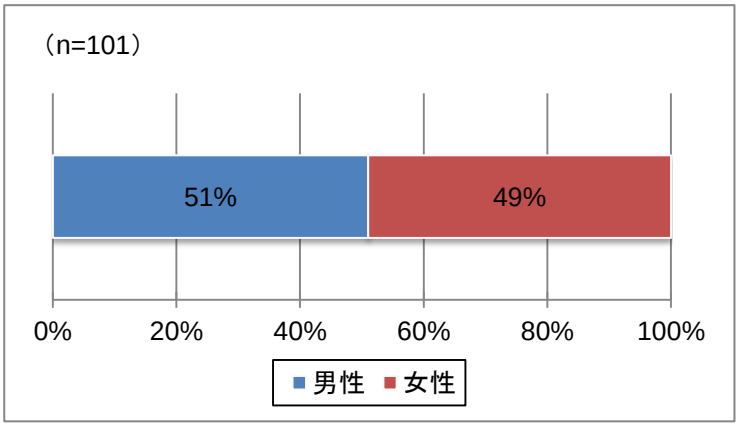
【図 1-21 放課後子供教室児童の現在の住居】



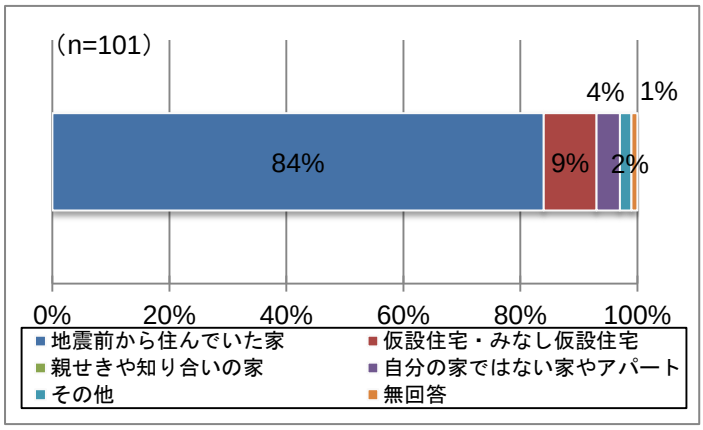
【図 1-22 放課後子供教室児童の地震後の避難生活の有無】



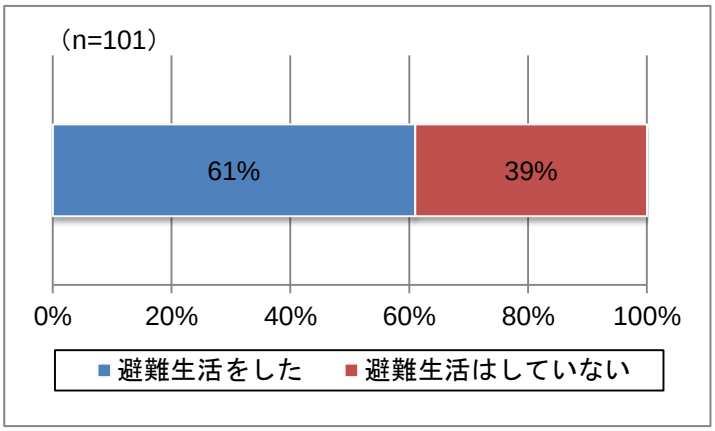
【図 1-23 地域未来塾生徒の学年】



【図 1-24 地域未来塾生徒の性別】



【図 1-25 地域未来塾生徒の現在の住居】



【図 1-26 地域未来塾生徒の地震後の避難生活の有無】

参考資料２

平成２９年度「被災地域の教育力向上プロジェクト」に関するアンケート

平成２９年度「被災地域の教育力向上プロジェクト」に関するアンケート（A票：教育委員会用）

熊本県教育委員会

町村名：	
記入者（職・氏名）：	
年齢： ２０代 ・ ３０代 ・４０代 ・５０代 ・６０代以上	
担当課経験年数： 年目	
電話番号：	
メールアドレス：	

熊本地震後、１年半を経過した現時点での貴自治体における「地域と学校の連携・協働」の状況についてお尋ねします。※該当する項目（□）にチェック（☑）を入れてください。

◆ **「地域と学校の連携・協働」として取り組んでいる事業は何ですか。**（複数回答可）

□ コミュニティ・スクール　□ 熊本版コミュニティ・スクール
□ 学校支援活動　□ 地域の教育力を活用した土曜授業・土曜学習
□ 地域未来塾　□ 放課後子供教室
□ 学校独自の地域教育力を活用した取組（学校応援団等）

◆ **貴市町村の地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）の配置人数は何人ですか。**

□ １人　□ ２人　□ ３人　□ ４人　□ ５人以上

問１　地震後の地域学校協働活動等の取組で、特に重視したことは何ですか。（複数回答可）

□ 地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）の配置
□ ボランティア等の人材確保
□ 「地域と学校の連携・協働」推進のための、教職員と地域の方々の会議や打合せ等の開催
□ 地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）やボランティア等との打合せ
□ 地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）等の研修会への参加
□ ホームページ等での情報発信
□ 活動内容に係るチラシの配布
□ 保護者との情報共有
□ 地震前の地域学校協働活動等の継続維持（実施回数・指導者の数など）
□ その他（　　）

問２　子どもたちの心の安定や学習意欲喚起のために、来年度推進したい取組は何ですか。（複数回答可）

□ 放課後子供教室等による体験活動の機会提供
□ 地域未来塾等による学習機会の提供
□ 学習支援ボランティアや体験活動ボランティア活用による多様な人材とのふれあい
□ 地域の多様な人材との交流
□ スクールカウンセラーによるメンタルケア
□ スクールソーシャルワーカーや家庭教育支援員によるサポート
□ その他（　　）

アンケートは裏面に続きます

問３　今後、子どもたちの心の安定や学習意欲の向上のために、中長期的にどのような取組が必要になると思いますか。（複数回答可）

☐　継続した活動のための予算措置
☐　活動のための施設整備
☐　地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）の育成
☐　ボランティア等の地域人材の育成
☐　学校と地域の連携強化
☐　子どもたちの現状に応じた活動プログラム開発
☐　専門家による研修の実施
☐　地域の企業、商工会、公民館や社会教育施設との連携
☐　その他（　　）

問４　その他、地域と学校の連携・協働について、御意見等があれば自由に記入をお願いします。

大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

平成２９年度「被災地域の教育力向上」に関するアンケート
（B票：地域学校協働活動推進員・地域コーディネーター用）

熊本県教育委員会

町村名：
記入者（職・氏名）：
年齢：　２０代　・３０代　・４０代　・５０代　・６０代以上
経験年数　　：　　年目

熊本地震後、１年半を経過した現時点での貴自治体における「地域学校協働活動」の状況についてお尋ねします。※該当する項目（□）にチェック（☑）を入れてください。

問１　地震後の現在、地震発生以前と比べて、地域学校協働活動等に取り組む子どもたちの様子に変化は見受けられますか。

□　変化あり　→**問２**へお進みください　　□　変化なし　→**問３**へお進みください

問２　「問１」で見受けられる変化には、どのようなものがありますか。（複数回答可）

□　活動を楽しむようになった
□　表情に落ち着きが出てきた
□　安心して過ごすようになった
□　落ち着きがなくなった
□　友達とのトラブルが増えた
□　積極的な会話が増えた
□　自分の意見をはっきり伝えるようになった
□　友達と仲良くするようになった
□　活動に退屈するようになった
□　その他（　　）

問３　地震後の地域学校協働活動等において、「子どもたちに良い影響を与えたと考えられる取組」があれば、記入をお願いします。（自由記述）

問４　地震後の現在、地震発生以前と比べて、地域学校協働活動に取り組む地域の方（地域学校協働活動推進員御自身、ボランティア等、保護者等）や地域の様子に変化は見受けられますか。

□　変化あり　→**問５**へお進みください　　□　変化なし　→**問６**へお進みください

アンケートは裏面に続きます

問５　「問４」で見受けられる変化には、全体的にどのようなものがあると思いますか。

（複数回答可）

☐　子どもたちや地域の方への思いが高まった

☐　学校職員とのかかわりが増えた

☐　教え方を工夫するようになった

☐　子どもたちや地域の方と積極的にかかわるようになった

☐　地域行事・イベントへの参加者が増えた

☐　子どもたちや地域の方とのかかわりが減った

☐　地域行事・イベントへの参加者が減った

☐　その他（　　）

問６　貴自治体における地震後の地域学校協働活動等の取組を実施して、子どもたちにどのような効果があったと思いますか。

≪心の安定≫

☐　大変効果が得られた

☐　ある程度効果が得られた

☐　あまり効果が得られなかった

☐　効果が得られなかった

☐　現時点では判断できない

≪学習意欲の喚起≫

☐　大変効果が得られた

☐　ある程度効果が得られた

☐　あまり効果が得られなかった

☐　効果が得られなかった

☐　現時点では判断できない

問７　その他、地域学校協働活動について、御意見等があれば自由に記入をお願いします。

大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

平成２９年度「被災地域の教育力向上プロジェクト」に関するアンケート（C票：学校用）

熊本県教育委員会

町村名：
学校名：
アンケート記入者（職・氏名）：
年齢：　２０代　・３０代　・４０代　・５０代　・６０代以上
電話番号：
メールアドレス：

熊本地震後、１年半を経過した現時点での貴校における「地域と学校の連携・協働」の状況についてお尋ねします。※該当する項目（□）にチェック（☑）を入れてください。

問１　地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）によって取り組んでいる教育活動はどれですか。（複数回答可）

□　教科指導・学校行事の支援
□　部活動やクラブ活動の支援
□　校舎等の補修、校庭の環境整備
□　登下校や校外活動の安全支援
□　総合的な学習や道徳の時間の支援
□　読み聞かせなどの読書活動の支援
□　職場体験活動の支援
□　朝自習・補充学習等の支援
□　その他（　　）

問２　貴校における地震後の地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、子どもたちの行動面や学習面に効果があったと思いますか。

□　大変効果が得られた
□　ある程度効果が得られた
} **問３－１**へお進みください

□　あまり効果が得られなかった
□　効果が得られなかった
□　現時点では判断できない
} **問４**へお進みください

問３－１　「問２」で見受けられる効果には、どのようなものがあると考えられますか。（複数回答可）

□　心の落ち着き
□　不安感の軽減
□　自立心の育成
□　コミュニケーション力の向上
□　地域に対する安心感・信頼感の向上
□　学習意欲の向上
□　学習内容の理解力の向上
□　ストレスの解消
□　自尊感情の育成
□　豊かな心の育成
□　地域への理解・関心の深まり
□　主体的学習態度の育成
□　学習への集中力の向上
□　その他（

アンケートは裏面に続きます

問３－２　具体的な事例等があれば、記入をお願いします。（自由記述）

問４　貴校における地震後の地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組を実施して、「教職員の業務の助けにつながった」と思いますか。

- ☐ 大変つながった
- ☐ ある程度つながった

} **問５－１**へお進みください

- ☐ あまりつながらなかった
- ☐ つながらなかった
- ☐ 現時点では判断できない

} **問６**へお進みください

問５―１　「問４」の「教職員の業務の助けにつながった」取組は、どのような支援ですか。
（複数回答可）

- ☐ 教科指導・学校行事の支援
- ☐ 部活動やクラブ活動の支援
- ☐ 校舎等の補修、校庭の環境整備
- ☐ 登下校や校外活動の安全支援
- ☐ 総合的な学習や道徳の時間の支援
- ☐ 読み聞かせなどの読書活動の支援
- ☐ 職場体験活動の支援
- ☐ 朝自習・補充学習等の支援
- ☐ その他（　　）

問５－２　具体的な事例等があれば、記入をお願いします。（自由記述）

問６　貴校における地域のボランティア等と連携・協働（学校支援活動）した取組の中で、「地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）の存在が学校にもたらした効果」があれば、記入をお願いします。（自由記述）

大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

放課後子供教室及び地域未来塾に関するアンケート（D票：保護者用）

熊本県教育委員会

町村名：
児童・生徒対象学校名：
性別：男　・　女
年齢：　　２０代　・３０代　・４０代　・５０代　・６０代以上
ボランティア活動への参加：　　参加したことがある　・　参加したことがない

熊本地震後、１年半を経過した現時点での、お子さんが参加している活動（放課後子供教室または地域未来塾）についてお尋ねします。※該当する項目（☐）にチェック（☑）を入れてください。

問１　あなたのお子さんが参加している活動は何ですか。（複数回答可）

☐　放課後子供教室　（☐　震災前から参加　☐震災後に参加）
☐　地域未来塾　（☐　震災前から参加　☐震災後に参加）

問２　「問１」の活動について、あなたは満足されていますか。

☐　十分満足している
☐　ある程度満足している
☐　どちらともいえない
☐　あまり満足していない
☐　満足していない

問3　あなたのお子さんが「問1」の活動に参加して、どのような効果があったと思いますか。（複数回答可）

☐　心の落ち着きが見られた　☐　不安な気持ちがやわらいだ
☐　自分を大切な存在だと思うようになってきた
☐　自分から行動するようになった　☐　他人を思いやったり、感動することが増えた
☐　コミュニケーション力（人と上手に話すこと・周りの人と意思疎通をとること・人の話をきちんと聴くこと等）が高まった
☐　地域への興味や関心が深まった　☐　勉強に前向きに取り組むようになった
☐　集中して勉強に取り組むようになった　☐　以前に比べ、勉強が分かるようになった
☐　その他（　　）

問4　「問1」の活動について、「こうすればもっと良くなる」と思うことがありますか。（複数回答可）

☐　活動や学習の内容をもう少し充実させてほしい
☐　実施回数をもう少し増やしてほしい
☐　子どもにとってさらに安全・安心な居場所にしてほしい
☐　子どもがやりたい活動（やりたい学習）をもう少し加えてほしい
☐　参加する子どもをもう少し増やしてほしい
☐　協力するボランティアの数をもう少し増やしてほしい
☐　特にない
☐　その他（　　）

大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

地域学校協働活動に関するアンケート（E票：地域ボランティア等用）

熊本県教育委員会

町村名：
地域ボランティア等の対象学校名：
性別：男　・　女
年齢：　２０代　・３０代　・４０代　・５０代　・６０代以上

熊本地震後、１年半を経過した現時点での地域学校協働活動（学校を支援する活動、放課後子供教室、地域未来塾等）の地域ボランティア等としての活動状況についてお尋ねします。

※該当する項目（□）にチェック（☑）を入れてください。

◆　**あなたの職種・役職等について、差し支えなければ記入をお願いします。**

□　ＰＴＡ関係者　□　元ＰＴＡ関係者　□　退職教職員　□　ＮＰＯ関係者

□　社会教育関係者　□　その他（　　）

◆　**地域ボランティア等としての経験年数はどれくらいですか。**

□　１年目　□　２年目　□　３年目　□　４年目　□　５年以上

◆　**熊本地震後、地域ボランティア等にはどれくらいの頻度で参加していますか。**

□　週に１回程度　□　月に１回程度　□　半年に１回程度　□１年に１回程度

□　学校からの要請に応じて　□　その他（　　）

問１　学校を支援する地域ボランティア等の活動について、あなたは満足されていますか。

□　十分満足している

□　ある程度満足している

□　どちらともいえない

□　あまり満足していない

□　満足していない

問２　地域ボランティア等の活動に参加して、「良かった」と感じるのはどのようなことですか。（複数回答可）

□　子どもと交流することができる　□　学校の教職員と交流することができる

□　地域の人と交流することができる　□　新しい学びになる

□　自分の生きがいになる　□　学校に対する理解が深まる

□　子どもに対する理解が深まる　□　自分の持っている知識や技術が生かせる

□　学校での子どもの様子が分かる　□　子どもの役に立っていると感じる

□　自分の成長や自信になる

□　地震後の子どもの心の安定につながっている

□　地震後の子どものストレス解消につながっている

□　子どもたちとかかわる中で、地震からの復旧・復興を感じることができる

□　その他（　　）

アンケートは裏面に続きます

問３　地域ボランティア等の活動を行う中で、「こうすればもっと良くなる」と思うことがありますか。（複数回答可）

- ☐　先生との打ち合わせの時間をもうすこし増やしてほしい
- ☐　子どもとの接し方等、先生方に困ったことや分からないことを教えてほしい
- ☐　仲間や協力者を増やしてほしい
- ☐　学校内に活動拠点となる場所を確保してほしい
- ☐　ボランティアの活動機会をもう少し増やしてほしい
- ☐　ボランティアのための研修の機会をもう少し増やしてほしい
- ☐　その他（　　）

問４　地域ボランティア等の活動を行う中で、「地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）がおられて良かった」ということがあれば、記入をお願いします。（自由記述）

大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

地域の方と一緒に学習（活動）することについてのアンケート（Ｆ票）

熊本県教育委員会

学校名：

記入者（学年）： 年 （性別） 男 ・ 女

※あてはまる文の（　　）の中に〇をつけてください。

1　地域の方と一緒に学習（活動）することは楽しいですか。（どれか１つに〇）

（　　）とても楽しい　　（　　）まあまあ楽しい

（　　）あまり楽しくない　　（　　）楽しくない　　（　　）どちらでもない

2　地域の方と一緒に学習（活動）する良さはどんなことですか。（〇はいくつでもいいです）

（　　）分かりやすく教えてくれる　　（　　）優しく教えてくれる

（　　）地域の方がほめてくれる　　（　　）いろんな地域の方に教えてもらえる

（　　）ふだん接することのない地域の方と知り合いになれる

（　　）地域の方に話を聞いてもらえる　　（　　）地域のことを知ることができる

（　　）地域の方とふれあうことができる　　（　　）地域の方がいると安心できる

（　　）地域の方が喜んでくれる　　（　　）困ったときに助けてもらえる

（　　）今までできなかったことができるようになる

（　　）たくさんの思い出ができる　　（　　）先生には言えないことも相談できる

（　　）地震などでのつらいことを忘れることができる

（　　）その他【　　】

3　地域の方との学習（活動）をもっと良くするには、どうすればいいと思いますか。

（〇はいくつでもいいです）

（　　）もっと活動の時間を増やす　　（　　）もっと新しい活動を増やす

（　　）もっと多くの方と触れ合う　　（　　）もっと地域の行事などに参加する

（　　）たくさん会話をする　　（　　）専門知識を持った方に来てもらう

（　　）自分たちも地域の人に教える

（　　）その他【　　】

ここまで書いたら、ウラに進んでください。

4　地域の方と一緒に学習（活動）して、「うれしかったこと」があれば教えてください。

5　今、どこから学校に通っていますか。（どれか１つに〇）

（　　）地震前から住んでいた家　　（　　）仮設住宅・みなし仮設住宅

（　　）親せきや知り合いの家　　（　　）自分の家ではない家やアパート

（　　）その他【　　】

6　熊本地震のあと、自分の家ではない場所で避難生活をしましたか。（どちらかに〇）

（　　）避難生活をした　　（　　）避難生活はしていない

＜ここからは、６で「避難生活をした」と答えた人だけ答えてください＞

7　どこで避難生活をしましたか。あてはまるものをすべて選んでください。（いくつでもいいです）

（　　）体育館などの避難所　　（　　）車の中（自分の家で）

（　　）車の中（自分の家ではない場所で）　　（　　）親せきや知り合いの家

（　　）その他【　　】

8　避難生活で安心して暮らすためには何が大切だと思いますか。（いくつでもいいです）

（　　）家族が一緒にいること　　（　　）知っている友達がたくさんいること

（　　）知っている大人がたくさんいること　　（　　）学校の先生がよく来てくれること

（　　）地域のボランティアの方がいてくれること

（　　）その他【　　】

最後まで書いていただき、ありがとうございました。

放課後子供教室（ほうかごこどもきょうしつ）についてのアンケート（G票）

熊本県教育委員会

がっこうのなまえ：

（がくねん）　　年　　（せいべつ）　　おとこ　・　おんな

※あてはまる文の（　　）の中に〇をつけてください。

1　いつから放課後子供教室に参加していますか。（どちらかに〇）

（　　）熊本地震の前から参加　　（　　）熊本地震の後から参加

2　放課後子供教室は楽しいですか。（どれか１つに〇）

（　　）とても楽しい　　（　　）まあまあ楽しい

（　　）あまり楽しくない　　（　　）楽しくない　　（　　）分からない

3　放課後子供教室のいいところはどんなことですか。（〇はいくつでもいいです）

（　　）好きな活動がある　　（　　）おもしろい活動がある

（　　）友達と一緒に過ごせる　　（　　）地域の人と一緒に過ごせる

（　　）違う学年の人と活動できる　　（　　）学校や家ではできない活動ができる

（　　）たくさんの思い出ができる　　（　　）いろんなことを教えてもらえる

（　　）活動に夢中になれる　　（　　）今までできなかったことができるようになる

（　　）勉強をすることができる　　（　　）体を動かすことができる

（　　）昔遊びなどができる　　（　　）地震などでのつらいことを忘れることができる

（　　）そのほか【　　】

4　どうすれば、もっと放課後子供教室が好きになりますか。（〇はいくつでもいいです）

（　　）もっと楽しい活動を増やす　　（　　）もっと新しい活動をたくさんする

（　　）もっと多くの人と触れ合う　　（　　）地域の人と一緒にいろいろ考える

（　　）たくさんお話しをする　　（　　）もっと時間を長くする

（　　）もっと時間を短くする　　（　　）いろんなことにくわしい人に来てもらう

（　　）そのほか【　　】

ここまで書いたら、ウラに進んでください。

5　放課後子供教室に参加して、うれしかったことを教えてください。

6　今、どこから学校に通っていますか。（どれか１つに○）

（　　）地震前から住んでいた家　　（　　）仮設住宅・みなし仮設住宅

（　　）親せきや知り合いの家　　（　　）自分の家ではない家やアパート

（　　）そのほか【　　】

7　熊本地震のあと、自分の家ではない場所で避難生活をしましたか。（どちらかに○）

（　　）避難生活をした　　（　　）避難生活はしていない

<u>＜ここからは、７で「避難生活をした」と答えた人だけ答えてください＞</u>

8　どこで避難生活をしましたか。あてはまるものをすべて選んでください。（○はいくつでもいいです）

（　　）体育館などの避難所　　（　　）車の中（自分の家で）

（　　）車の中（自分の家ではない場所で）　　（　　）親せきや知り合いの家

（　　）そのほか【　　】

9　避難生活で安心して暮らすためには何が大切だと思いますか。（○はいくつでもいいです）

（　　）家族が一緒にいること　　（　　）知っている友達がたくさんいること

（　　）知っている大人がたくさんいること　　（　　）学校の先生がよく来てくれること

（　　）放課後子供教室の先生がいてくれること

（　　）そのほか【　　】

<u>最後まで書いていただき、ありがとうございました。</u>

地域未来塾に関するアンケート（H票）

熊本県教育委員会

学校名：
記入者（学年）：　　年　　（性別）　男　・　女

※あてはまる文の（　　）の中に〇をつけてください。

1　いつから地域未来塾に参加していますか。

（　　）熊本地震の前から参加　　（　　）熊本地震の後から参加

2　地域未来塾は役に立っていますか。

（　　）とても役に立っている　　（　　）まあまあ役に立っている

（　　）あまり役に立っていない　　（　　）役に立っていない　　（　　）分からない

3　地域未来塾の良いところはどんなことですか。（複数回答可）

（　　）友達と一緒に学習できる　　（　　）地域の人とふれあうことができる

（　　）将来の役に立つ　　（　　）学校や家とは違った環境で学習できる

（　　）お金がかからない　　（　　）学習以外のことで相談ができる

（　　）一人じゃないので安心できる　　（　　）学習の習慣が身に付いた

（　　）成績が上がった　　（　　）分からないことを相談（質問）できる

（　　）親切に教えてもらえる　　（　　）住んでいる家より学習に集中できる

（　　）地震などでのつらいことを忘れることができる

（　　）その他【　　】

4　地域未来塾をもっと良くするには、どうすればよいと思いますか。（複数回答可）

（　　）回数を増やす　　（　　）回数を減らす　　（　　）時間を長くする

（　　）時間を短くする　　（　　）地域の先生を増やす　　（　　）教科を増やす

（　　）個別学習にする　　（　　）グループ学習にする　　（　　）授業形式にする

（　　）タブレットなどの機器を使う

（　　）その他【　　】

<u>裏面に進んでください。</u>

5　地域未来塾に参加して、良かったと思うことを教えてください。

6　今、どこから学校に通っていますか。

（　　）地震前から住んでいた家　　（　　）仮設住宅・みなし仮設住宅

（　　）親せきや知り合いの家　　（　　）自分の家ではない家やアパート

（　　）その他【　　】

7　熊本地震のあと、自分の家ではない場所で避難生活をしましたか。

（　　）避難生活をした　　（　　）避難生活はしていない

＜ここからは、7で「避難生活をした」と答えた人だけ答えてください＞

8　どこで避難生活をしましたか。あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答可）

（　　）体育館などの避難所　　（　　）車の中（自分の家で）

（　　）車の中（自分の家ではない場所で）　（　　）親せきや知り合いの家

（　　）その他【　　】

9　避難生活で安心して暮らすためには何が大切だと思いますか。（複数回答可）

（　　）家族が一緒にいること　　（　　）知っている友達がたくさんいること

（　　）知っている大人がたくさんいること　（　　）学校の先生がよく来てくれること

（　　）地域のボランティアの方がいてくれること

（　　）その他【　　】

最後まで書いていただき、ありがとうございました。